

怠惰の天才は満たされたい

マイケルみつお

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「早坂！どうしたら光夜に好きになってもらえるかしら!？」

「さっさと告ればいいと思います」

「それじゃあダメなの！」

四宮かぐやは幼少の頃から1歳年下の従姉弟である伏見光夜の事が好きだった。しかし光夜が高校に進学した今日まで……《特に何の進展もなかった》。

しかし一概にかぐやを責める事はできない。

光夜とかぐやは従姉弟、いわば既に家族である。もしかぐやが告白に失敗してしまった場合……光夜と付き合えないどころか仲のいい姉弟としての今の関係さえ崩壊してしまうかもしれない！故に！かぐやは安易に動く事ができないのである。断じて！告白が怖いとかそんな理由で先延ばしにしている訳じゃあない！

これはただの恋愛頭脳戦ではない。ただ告白させるという事ではまだ足りない。

恋に敗れ、今までの関係全てが崩壊してしまうかもしれないDead or love、堂々開幕！

光夜は関係ありませんがかぐや様の短編も書いています↓
(<https://syosetu.org/novel/286270>)

あとtwitterもやっています @hanvanpan

目次

蓬萊の封印の章

1話	四宮かぐやはブラコンである	1
2話	ラブレター	6
3話	石上優を加えたい	12
4話	伊井野ミコは勝ち取りたい (前編)	22
5話	伊井野ミコは勝ち取りたい (後編)	26
6話	生徒会は出かけたい	30
7話	壁ダアン!	35
8話	羞恥淫学園	42
9話	攻略開始	48
10話	ツンデレ先輩	53
11話	石上優は逃げられない	55
12話	四宮かぐやは引き出したい	59
13話	大いなる誤解	63
14話	白銀御行は吐き出したい	71
15話	伏見光夜は取らせたい	79
16話	怠惰の天才は隠したい	86
17話	藤原千花は貪りたい	99
18話	白銀御行は乗り換えたい	106
19話	伏見光夜は報われたい	112
20話	四宮かぐやは運ばせたい	121
21話	四宮かぐやは入りたい	128
22話	四宮かぐやは諦めたい	137
23話	伏見光夜は夢を見たい	143

24話	似非四宮は見せられない	149
25話	四宮かぐやは問い詰めたい	157

蓬菜の封印の章

1話 四宮かぐやはブラコンである

「光夜、高校進学おめでとうございます。以前から話していた通り、明日からあなたには生徒会に入ってもらいます」

「あの姉さん、その話は断ってるしやっぱりなかった事にできないかな？」

「光夜様、それ以上かぐや様の機嫌を悪くして私の胃の穴を増やさないで下さい」

四宮家別邸。そこは天下に名だたる四代財閥のうちの一つ、四宮グループ総裁の娘、四宮かぐやの家である。その中の一室、伏見光夜の部屋で現在彼は二人の女性に詰められていた。

「…分かったよ」

肝心な部分で姉には頭があがらず、また彼女の近侍の早坂愛にも度々迷惑をかけている事からそのような言い方をされて光夜に断るという選択などできるはずがなかった。放課後はできれば別の事をしたかった光夜であるが、彼は首を渋々縦に振ったのである。

こうして

生徒会長 白銀御行

副会長 四宮かぐや

書記 藤原千花

というメンバーに広報、伏見光夜を加えて生徒会の新年度がスタートした。

「御行先輩、全然断って大丈夫だったんですよ」

「はっはっは。確かに入学式と同じ日に一年生が登用されたって少し騒ぎになっていたな。でも俺はお前なら断るつもりはなかったぞ。四宮からの提案がなければ俺の方からオファーにいったたかもしれない。」

「そう、ですか…」

頼みの綱が切れた。光夜は絶望したかのように溜息を吐いた。秀知院学園の生徒会役員は全て生徒会長が選任する。つまり、姉であるかぐやに何も言わなくとも会長である白銀に働きかければ生徒会就任を阻止する事ができると考えたのだ。まあ元々光夜と白銀は親交があり、白銀が断る事などないだろうと光夜も分かっていたのだが。「それより光夜、聞きたいことがあるのだが」「何ですか?」

「四宮家では映画を観に行く事を禁止しているとか、そういうのはあるか?」

伏見光夜、彼が数年前まで四宮光夜だった事は当然白銀も知っている。ただその詳しい経緯については知らないが。

「自分がいた頃から数年は経っていますですが特にそんな事はなかったと思います…。けどどうしてそんな事を聞くんですか?」

「いや、特に何でもないので。気にしないでくれ」

「はあ、分かりました」

白銀がなぜそのような事を尋ねたのか、答えは数時間前の昼休みにあった。

「そっういえば聞いて下さい」

昼休み。年度の初めというのは色々な仕事が増まって忙しいものである。それは生徒会も同様の事でこうして昼休みも役員三人全員が集まって仕事をしていたのだった。そんな中、生徒会書記の藤原千花が話を切り出す。

「なんか映画のペアチケットが当たったんですけど、家の方針でこういうのを見るのは禁止されてまして、お二人はご興味ありますか?」

藤原が差し出したのは今、人気の恋愛映画のチケットである。勿論かぐやが変な裏工作などした訳ではなくただ純粹に藤原が懸賞で当てたものである。

「私は恋愛に関してあまり知識を持っている訳ではありません。そうですね…。光夜でも誘って行ってみましようか。たまには姉とし

ての余裕でも見せてあげましょう)」

「では藤原さん頂けますか？よろしいですか会長？」

「何でも、この映画を男女で観に行くと結ばれるジंकスがあるとか
」

「(え？四宮に誘われた?!しかも結ばれるジंकスって…まるで告白みたいじゃないか!いや、四宮に限ってそんな事はない。これはきっと何か罠が仕掛けられている!)」

「いいのか？四宮？結ばれるジंकスのある映画に誘って。」

「(え？男女が結ばれるって…！それじゃあ私が光夜に告白しているみたいじゃない！そ、そんなのありえないわ！私はあ、姉として光夜の事が好きなのであってそんな男女の関係なんて…！)」

「すみません。ウチの家でも大衆向けの娯楽は控えるべきだと言われていました。このチケットは藤原さんにお返しします。」

「そうですか？まあかぐやさんのお家じゃ仕方ないですね。」

「はい、それでは午後の授業も近いですし失礼します！」

そう言つて四宮は顔を赤くして生徒会室から出て行った。

「(… 罠じゃなかった？それならもつと押していれば今頃…。や、やってしまったあああああ!)」

「じゃあ会長、これいりますか？」

「(ふむ、まあ藤原書記が持っているとなら放課後までに他の人に渡してしまふ可能性があるな)」

「そうだな、では貰っておこう。」

「(おそらく四宮家が映画を禁止しているというのは嘘だ。光夜に確かめて言い逃れができないようにしてやろう、ハハハハハ)」

そして各々が違う思惑を持った上で迎える放課後。

「あ、千花じゃん久しぶりー。」

「もう！千花姉さんって呼ぶように！っていつも言ってるでしょ！」

「いや… 千花の事そうやって呼んだら姉さんが怒るんだよ…。」

光夜がまだ四宮家にいた時。藤原はかぐやと遊ぶ中で光夜とも知り合った。最初は光夜は藤原の外国語能力などを知って尊敬してい

たが長く過ごす上で光夜は藤原の本質を見破り、今では年上だというのに完全に彼女の事をタメのように接している。

「それよりもだ四宮。さつき光夜に聞いたんだが別に四宮家では映画を観る事を禁止してないそうじゃないか。」

「(こうして外堀から埋めていく!そして今日こそこの恋愛頭脳戦に終止符を打つ!)」

白銀は藤原にもらったチケットを掲げながらかぐやに対して攻撃を開始する。

「え?ええ...」

「(ちよつと!なんで光夜がいる時にその話題を振るんですか!信じられません!ここはなんと返しましょうか...。光夜には余裕のある姉という姿を見せたいですしね)」

「御行先輩!それってラブリフレインじゃないですか!今度観に行こうと思っただんですよ。まだ相手がいないのなら今度行きませんか?」
「え?」

「(ちよつと待つてくれ光夜!俺はこれで四宮を!)」

「あ、すみません。別に断りたかったら断ってもらって全然大丈夫ですので...」

そんな事を言われて断れる白銀ではなかった。

「全然そんな事ないぞ!今度行こうな!」

それから数日後...行ってきた。

「御行先輩!めっちゃ泣けます!」

「ああ!特にあの場面だろ!」

楽しかった!

「今日が最初の生徒会でしたがどうでしたか?」

入学式の翌日、最初の生徒会での活動が終わりかぐやは光夜の部屋に遊びに来ていた。

「御行先輩も千花も知ってたし。みんないい人だし楽しかったよ姉さん。」

「今は早坂もいません。昔のように呼んでもいいですよ。」

「……分かったよ、かぐ姉。」

「~~~~~!」

光夜とこうして昔の呼び方で呼び合える。それだけでかぐやの胸は満たされるのである。二人は離れて会えない時間もあつた。だからこそこの幸せはよりもっとかぐやの胸を暖かくする。

四宮かぐやはブラコンである

2話 ラブレター

「ラブレター?」

「ええ。とても情熱的な内容で、一度食事でもどうかと」

「えー!つまりデートのお誘いという事ですか!」

放課後の生徒会活動。生徒会室には光夜、白銀、かぐや、藤原がいた。かぐやと藤原は今日の担当の仕事は少なかつたのか、今は二人で談笑をしている。男子二人は全く興味が無い素振りをしていたがその話をしっかりと聞いていた。

「ふ、四宮にラブレター?馬鹿な男もいるようだな。普段この俺を見て過ごしている四宮だぞ。俺と比較すればその辺の男など喋る雑草にしか映らん事に気づかんのか。四宮が相手にするはずがないだろう」

白銀は全く余裕綽綽といった表情だった。

「かぐ姉にラブレターか。可哀想だけどフラれるな。かぐ姉に恋愛なんて全く結びつかないし多分そもそも恋愛した事ないんじゃないかな?」

「デートするつもりなんですか?!」

「勿論です。」

「!」

あまりの衝撃に白銀は握っていたペンをへし折り、光夜は思考が完全に止まった。

「(血迷ったか四宮!そんなよく分からない奴の誘いにホイホイ乗るなんて!)」

「勇気を振り絞ってこんなに情熱的な恋文をくれる方です。きっと好きになってしまいうに違いありません。」

「(馬鹿な!そんな事が許されていいはずがない!何とかして四宮を止めなければ!)」

白銀はへし折ったペンをテープで固定した。動揺もあるが簡易的にでも修正は完了した。白銀の反撃が始まる。

「本当に行っちゃうんですか?」

「ええ。楽しみです。」

一見ただの女子同士の恋愛話のように見えた。しかし実際には…
「(行く訳ないでしょうが。この子、脳に花でも沸いてるのかしら。誰が好き好んで慈善活動などするものですか)」

かぐやとて喋る雑草とデートに行く趣味などない。これは光夜に
対してそういう意識をさせるための策略である。

「(さて、光夜はどういう反応をするでしょうか)」

かぐやは光夜の様子を覗き見る。しかし白銀とは異なり光夜は動
揺してないように思える。叩いてるキーボードは一切の澱みがなく、
むしろ普段よりもタイピングは早いようにも思える。

「(…やはり光夜は私がデートに行っただとしても何とも思わないの
でしょうか…)」

かぐやがそう、内心では落ち込んでいるところであった。

「四宮。生徒会長として不純異性行為は許せないぞ。」

「(え?なんで会長が?しかしここで言いくるめられてはせっかくの
策略が台無しに。それに会長に言いくるめられる様など光夜には見
せられません!)」

「大袈裟ですな会長。たかが食事に行くだけです。それだけで何か問
題になるとでも?」

「判断するのは教師だ。お前がどうしても行くというなら俺が教師に
伝えておいてやろう」

「(教師チクリ?!まさか会長がそこまでして止めてくるなんて!…
あら?どうして会長はそこまでして私を止めたいのでしょうか?…
なるほどなるほど、会長は私の事が好きだという事ですか。予想外の
ところで思わぬ収穫を得ましたわね。会長を屈服させるためにはい
い材料となるでしょう。フッフ、お可愛い事)」

白銀、予期せぬところで自身の気持ちがかぐやにバレてしまった瞬
間であった。

「(でしたらここは会長の悶絶する様を目に収めましょうか)」

「構いません。それが真実の恋であるなら退学も厭いません!私は彼
に身も心も委ねたいのです!」

白銀に大ダメージ！

「(まずい！このままでは本当に四宮が行ってしまう！ここを止めるにはもう...)」

「だったらもし俺が仮に告白したら、仮にだぞ。その男の事は忘れるのか？」

「(え?!こんなところで告白ですか?!まさか会長が苦し紛れにそんな事までしてくるとは...。少し追い詰めすぎたかしら...。他に何もなければここでこっぴどく振って会長を屈服させて差し上げる絶好のチャンスでしたが...。会長は光夜とも仲がいいです。そんな事したら光夜から嫌われてしまう!...。それに集団の中でそういった振った振られたの話があれば空気は最悪なものになるでしょう...。光夜との場所を憂鬱なものにはさせられません!さて...。どうしましょうか?)」

「会長の告白はひとまず置いておいて」

「こ、告白とかそんなんじゃないぞ！」

「では別にそれでいいですが。そろそろ彼との待ち合わせの時間になります。どんな事があっても先約を無視するのはあまりよろしくないでしょう。それでは私はこれで」

そう言つてかぐやは生徒会室を後にする。白銀は全てを絶望した表情になる。

「かぐやさん！」

しかし白銀と違い、藤原は生徒会室の外にまでかぐやを追いかけた。

「わたしかぐやさんがだれかのものなるなんていやあー、どこにもいっっちゃいやー、ヴェエエエン」

「ちよつとー！藤原さん?!」

既に生徒会室は出ている。それに大声で泣き叫ぶ藤原に多くの人が何事かと集まるのは目に見えている。

「分かりました。私はどこにも行きませんよ藤原さん。」

「ヴェエエ、ボンドに...?」

「はい本当です。ですのでもう泣かないでください。」

そう言つてかぐやは藤原を宥めていた。そもそもかぐやに先約などいないのだ。ただラブレターを受け取っただけで約束などできるはずもない。しかしその事があまりの衝撃だったのか誰も気づく事ができなかったのだ。一方、その頃生徒会室は…。

「(し、四宮がデートに…)」

白銀はかぐやへの気持ちに既に悟られている事にまだ気づいてない。そして…

「(か… かぐ姉…)」

かぐやは光夜が全く動揺してないと考えていたがそんな事はない。むしろ隣の白銀より動揺度合いは高い。既に思考と行動が全く結びついておらず、その根拠としてパソコンには不規則な文字の羅列が並んでいる。これは学校に提出する報告文だ。暗号化した怪文を書く必要などない。

「(かぐ姉に恋文を送った奴を調べなければ)」

かぐやが生徒会室を出ていくと光夜のその動揺は鳴りを潜めた。いや、動揺は依然としてしているのだが、思考と行動がようやく結びつくようになったのだ。動揺しているところに実際にかぐやがその場へと向かってしまうという更に大きな動揺を受けたことで。そんなショック療法のような、信じられないような方法で光夜は自分の意思に基づいた行動を取り戻した。

伏見光夜は実業家である。四宮家から出て行った後、それまでに築いた人脈も何もかもを駆使して会社を大きくしてきた。何かに特化したスペシャリストではなく、ジェネラリスト。幅広い分野で活動を始めた。

しかし時を重ねていくにつれて各分野でも大きく躍進していく。ジェネラリストであるにも関わらず、既にそれらのレベルはスペシャリストの域に至っていた。ここまで五年も経っていない。

伏見を所詮若造の弱小勢力と侮って攻撃を仕掛けた企業は大企業

も含めて全て返り討ちを受け、それらを吸収しつつ成長していったのだ。光夜は同じ業界で既存勢力があったとしても攻撃を仕掛けられなければ何もしなかった事から手を出してはいけない、敵対してはならないという意味で『アンタッチャブル』と呼ばれるようになった。四宮と並ぶまでの規模はないがその圧倒的な成長速度、そして企業闘争での無双の如き振る舞い。上流階級で伏見を注目しない者など皆無である。

伏見の持つ勢力には探偵事務所も、情報、諜報機関もある。かぐやにラブレターを送った人間を特定して、彼を一から調べ上げる事など光夜からしたら赤子の手を捻るように簡単である。

放課後、生徒会活動も終わって帰宅も完了する。かぐやもその例外に漏れず自室にてのんびりと過ごしていた。すると

「な、何事?!」

ドタドタと廊下を走る音が響く。そしてその音は…こちらに向かっていった。

「かぐ姉!」

「光夜?!」

その音の正体であり、かぐやの自室にへと入ってきたのは光夜であつた。

「何事ですか… 光夜様?!」

「かぐ姉をデートに誘った人!かぐ姉の事何も分かってない!あの人今までにも…!」

部屋にはかぐやだけではなく早坂もいたのだが呼び名がかぐ姉である事、そしてハイテンションで捲し立てる。

「…だから…、あの人と付き合わないで!」

かぐやも早坂も目を丸くする。

「先ほど、ラブレターを下さった方には丁重にお断りをしてきました。」

「え?... ええっ!?!」

自分の思い違いに、そして自分が今何をやったのか。光夜は客観的

に見ることができた。

「あ… ああっ！」

気づいたようである。

「そ、それでは姉さん。おやすみなさい…。早坂も今日の夕飯はいら
ないの。」

光夜は顔を真っ赤にしてからかぐやの部屋から逃げていく。

「かぐや様。」

「~~~~~!!」

本日の勝敗、かぐやの勝利

3話 石上優を加えたい

入学式が終わって数日経ち、校内も様々な変化に慣れて落ち着いてきた。そして生徒会もある活動を始める。

新入生スカウト！

まあ一年生なのでスカウトに足る人材が0になる年も存在するらしいが。そして白銀御行も過去にそのスカウトを受けた人間である。そしてそれは…

「そういえば御行先輩と知り合ったのもこれくらいの時期でしたね」「そうだったな」

伏見光夜は秀知院学園中等部の3年生であった。彼は1年次と2年次はほぼ学校にはいなかったがその知名度は群を抜けている。

なぜなら秀知院学園は幼等部（幼稚園）からある。初等部（小学校）からの生え抜きを純院と呼び、中等部以降から入学してきた人間を混院と呼び差別する風潮があるくらいだ。

初等部の頃から光夜は有名な人間であったため中等部の2年間、秀知院にいなくてもその知名度はやはり群を抜けていたのである。

「全く、どいつもこいつも純院だ混院だ、って差別しやがって…」「本当、くだらないですよね」

昼休み。彼はやはり注目を集めるのである。そして大半の生徒は彼に萎縮し、同級生であっても敬語を使われる。初等部までは光夜は四宮光夜であったため、それが理由だろうと納得していたのだがもう光夜は四宮ではない。それなのにこの様は何だと。

勿論全員が全員光夜に対してそのような態度をとる訳ではない。特にキーキー吠える犬のような同級生にはそのような態度を取られた事はただの一度もない。それでも大多数がそうであり、光夜も嫌なのだ。だからこそ決まって光夜は昼休みはこの誰も通らない学園の端のスペースで過ごすのだ。

知っているかは分からないが秀知院学園の高等部と中等部は隣接している。そして光夜がいる側の学園の端は高等部と隣接している

側である。こうして光夜は高等部側にいる一人の男子高校生と出会ったのである。

「先輩、ですね。高等部の制服着てるし。やっぱり高等部でもまだそんなくだらしない事やってるんですね」

話としては聞いていたが光夜は高等部に通った事などない。中等部にも途中で入学できる事から中等部にも純院、混院差別というものはある。光夜は常にしょーもない事だな、と思っていた。

「親の七光りなんて本当にくだらない。いや、周りの人間が益を得ようとしてこの御子息や御令嬢にヘコヘコするのはまだ分かります。けれどそれを鵜呑みにしてまるで自分自身が偉くなったかのように錯覚するのは見てて滑稽です。先輩もそう思っているんでしょう？」

その男子高校生、まあ名前を白銀御行と言うのだが、(自己紹介などしてないので当然お互いの名前は知らない)別に彼はそこまで考えていなかった。自分が混院である。その一点だけを抜き出して自分の他の部分など見もせずに自分を評価する。その事に不満を抱いて親の七光りはくだらない、などと言っていた。言うのなら彼は無意識の内に純院の人間に劣等感を抱いており、自分の方が下だと考えていた。だから彼らがしようもない、滑稽だなどと本気で考える事などなかった。

「お前は混院の生徒か？」

「いえ、違います。ですが別に自分を純院だと名乗りたいとは思いません。」

白銀はこの男子中学生を混院の人間であると考えていた。

「まあ自分も小さい時は彼らと同じような下らない優越感を抱いていたので、彼らを見てみると自分の黒歴史を思い出してしまつて嫌悪感を抱いているつてもあるんですけどね」

これは光夜がまだ小学一年生の時の話である。しかしそんな事は当然知らない白銀はこの男子中学生がつい最近、中学生にまでなつてこんな考えを抱いていたなんて恥ずかしい!と考えているのだと納得した。要するに厨二病と同じように解釈したのである。白銀も中二であった時代があり、彼も人に見せれない黒歴史がある。それをよ

く他人に話せるな、と白銀はその男子中学生に対し、すげえという感想を持った。

「普通に考えて分かると思うんですが、内部進学の内平均点数より入試の最低点数の方が高いんですね。勿論勉強だけが全てではありませんが一つでも優っている相手にどうしてあんな態度をとれるのか」と

そしてこれは白銀にとっての転換点であった。全てを磨く事が理想だがそうでなければ何か一点だけでも誰にも負けないように磨けばいいのだと。その一点さえ伸ばした後で他のところも磨いていこう、と。彼のそれは勉強であり、後日四宮かぐやに対して定期テストの挑戦を叩きつける事になるのはまた別の話である。そして昼休みの終了を示す予鈴が鳴る。

「お前と話すのは中々有意義であった。また話そう。」

「自分も先輩と話すのは中々楽しかったです。こちらこそ、喜んで。」
こうして後の生徒会長、広報となる二人の対面はお互いの名前を知らずに終わったのである。

そんな彼との昼休みの交流は幾度となく行われた。いつしかお互いの名前も知るようになり、無機質な『先輩』は『御行先輩』と変わり、『お前』というぶっきらぼうな呼び名は『光夜』へと変わった。

「つていうかやけに久しぶりだな。数ヶ月ぶりだろ」

「まあ、中学は義務教育で留年はありませんので」

「そういう事ではない。… まあ決してズル休みじゃないし外部の俺がどうこう言う事ではないな」

「そう言って貰えると助かります。」

事実、ここ最近とはある企業との闘争によって常に気を張っていないければならなかった。向こうが余計な手出しをしてきたのを見過ごす光夜ではない。それなりに大きい企業だったので数ヶ月と、彼にとってはかなり時間がかかったが無事に先日、手出しをしてきた首謀者たちにおしおきする事に成功し、学校に戻ってこれたのだ。

「まあ俺も休みたい時はあるからな」

「それ、生徒会長が言ったらダメでしょう…。」

「お、俺は高等部の会長だからな…。中等部の生徒に聞かれても問題はない」

「もうすぐ自分も高等部に進学するんですが…。」

「じゃ…。じゃあ留年してくれ」

「だからできないんですって」

そんな下らない事を言い合えるくらいには仲が良くなったのだ。

「あ、予鈴鳴りましたね。それでは」

「ああ。また今度な」

「お前は十五になってごめんなさいの一言も言えんのか！」

教室に戻る際、生徒指導室から怒鳴り声がし、気になった光夜はいけない事だと分かっていながら聞き耳を立てた。

「い、いや…。僕にもまずい点があったのは分かっていますし反省しています…。でも…。謝罪だけは死んでもできません」

「舐めるのもいい加減にしろ！荻野はよお、チャラチャラしてるが性根の悪いやつじゃない。お前がきちんと謝るのなら許すって言ってくれてるんだぞ。優しい奴じゃないか」

「許す…。そうですか…。」

反省しているのになんで謝らないんだろう。謝るだけで許されるというのに。光夜はその会話の中でそこが引っかかった。

気になった事を放置する光夜ではない。しかし光夜はつい最近まで学校にまるで来ておらずその事件も、そして怒られている男子生徒の名も知らなかった。唯一分かったのは荻野、という名前。おそらくあの男子生徒から何かされた被害者なのだろう。当然光夜は荻野、という名前の生徒にも心当たりがなかった。それなら知っている奴に聞けばいい。それも公平な視点に立てるやつ。

「という訳で聞きにきた」

「わざわざ呼び出したと思ったら…。何で石上の事を…」

伊井野ミコ、キーキー吠える犬のような同級生である。裁判官を指しているし風紀委員としての取り締まりも誰かれ構わず取り締まっている。四宮時代のときの光夜を取り締まった実績もある事からその説得力は十分だろう。だがしかし、

「え？お前ってその石上君の事好きなの？」

荻野という名前を出しただけでさっきの生徒の名前が石上という事は分かった。石上という名前が出てくるまであまりに早かった事から少し揶揄うと...

「何で私があんな奴！石上なんて大嫌いよ！そもそもあいつは.....」

「(こうなってしまった...。ガミガミとうるさい...)」

どれくらい伊井野は話し続けていただろうか。光夜は途中気絶しそうになったがそうするとまた一から言われる事もありえると考え意識を手放さないように強く、そう強く握りしめた。

「分かったから。お前がその石上君の事が嫌いなのは分かったから」

「わ、分かればいいのよ」

一気に捲し立てたからか、客観的に大声で叫んだ事実を振り返って恥ずかしくなったからか伊井野は顔を赤くさせながらもこうして第一次石上事変は終わった。

「で、じゃあ石上君が起こしたその事件について教えてもらってもいいか？」

「石上が大友さんにストーカーしてその彼氏の荻野君を殴った...」

ってというのがひとまず知れ渡っている事実って事だな。伊井野は石上君の事嫌ってるしこれに間違いがないかを調べてみるか。

「けどっ！石上は風紀を破ってゲームばかりするろくでなしだけどっ！本当に人が傷つく事はしない！」

「伊井野...」

「(お前やっぱり石上君の事を...なんて言葉を喉から出す直前に消しとばした事をまず褒めたい。停戦直後に第二次、なんて洒落になら

ない。主に自分の鼓膜が」

「ありがとな、伊井野」

「大まかな事件が起こった概要と関係者の名前。それさえ分かれば後は大丈夫。自分が気づいた点なんて石上君のたった一言と些細なことのみみんなが言ってる事が真実なのかもしれないけどね」

「あの時、些細な事だと切り捨てなくてよかった」

事件はなんと初手で大方分かってしまった。荻野コウがどうい人物なのか、荻野コウの正体さえ知れば真実の扉が開かれる。荻野を殴った時石上が言った言葉も意味がまるで変わってしまう。

「さて、石上君にはなんて伝えよう」

光夜は石上の家の前でそう考えていた。

「光夜の思いをそのまま伝えたらどうだ」

「御行先輩！」

「光夜が何か動いてる。そう誰かからタレコミがあつてな。調べてみたら色々なものが出てきた。ここにお前がいるって事は俺達とお前の調査結論は同じだという事だ」

「姉さん、ですか？」

「否定はしない」

「(やっぱりかぐ姉だったか)」

「それでは行くぞ！」

「ふざけんな…」

告発文だ。全部ぶちまけてやる。荻野がキレて大友を殴ろうが、リベンジポルノかまそうが僕には関係ない。一刻も早く解放されたい。「書いてやる。書いてやる書いてやる書いてやる書いてやる書いてやる！」

…結局僕は何も書けなかった。媚びるような謝罪。僕はイタくて迷惑な、おかしな奴でした。そんなとき、二人の男が訪れた。

「お前は太友京子を守るために何の反論もしなかった」

「石上君が起こした事件の数日後、荻野と太友さんは破局したらしい。」

今では会って会話をする事もないらしいよ」

「荻野は相当お前を警戒していたようだ。まあ反省文だけ出さずに自分から数ヶ月も停学している奴なんて怖すぎるしな」

「勿論石上君がやった行動が全て最善だったか、と言われれば分からない。けれど…大友さんは石上君によって助けられた」

「だったら！お前が書くべき反省文は…こうだろ！」

そう言つてその人はうるせえバーカと反省文に大きくマーカーで書いて僕に突き出した。

「ウツ…ううつ…」

僕はおかしくなんてない。僕は二人に助けられた。

「おい光夜、どこに行くんだ？」

「まあ、ちよつと最後のシメですよ。御行先輩は石上君をお願いします」

「全く、俺がせっかく時間をとつてやってるのに何だあの目は」

「(目的の人物はまだ何も知らずふんぞり返っているな)」

「ん？なんだ。入る時はノックをしろ」

「こんにちは。生徒指導の先生ですよね」

「そうだが」

「本日は秀知院学園の生徒としてではなく、伏見の人間としてあなたとお話にきました。」

その一言で男の顔つきが変わる。腐つても秀知院の教師。上流階級の事は知っているらしい。

「石上優の事を教えてください。」

それからは酷かった。目の前の男は石上優という男をいかに悪くしておかきな人間だ、という事を力説した。

「そうですね。ところで、荻野コウという人間が徒党を組んで性犯罪を行なっていた事はご存知ありますか？」

「は？」

「既に徒党を組んだ相手も調べがついています。流石秀知院学園ですね。親は名が通った方みたいです。荻野君の親の話をするとうすぐに白状してくれました。」

実際には荻野も光夜の事を知っており、もう自分が逃げきれないという事を悟り、できる事なら傷を浅くと思つて全てを白状したのだが。

「そして彼らの次のターゲットは大友京子さんだったらしいです。」
「え？」

「分かりますか？今回の事件で被害者の荻野君の彼女と言われた大友さんです。あ、石上君が大友さんをストーカーしていたというのは真つ赤なデマですよ。実際に事件が起こる数ヶ月前から彼の行動を遡つて調べましたがそんな事実はない。」

そういえば、ストーカーなどしていい石上君が荻野君に対して『お前は金輪際、大友には近づけさせない』つて言ったらいいですよ。石上君が荻野君を殴つた理由、そろそろあなたにも分かったんじゃないんですか？単なる暴力事件よりも更に大きな、被害者は一体どちらなのか。加害者は一体誰なのか」

「それは・・・」

「しかし周りの学生が勘違いするのも無理はない。石上君は真実を叫ばなかった。いや、仮に叫んでも無駄だったでしょう。荻野君の立ち振る舞いは完璧でした。まあその後、何の疑問も持たずに与えられた話だけでそう思い込んでる事は恥ずべき事ですが。彼らに対する落ち度は、彼らに対する非難は噂に疑問を挟めなかった事。単なる能力不足です」

彼らと違つて伊井野は情報が少ないながらも言われた事に、噂に疑問を持つていた。

「しかしあなたは違う」

「ッ！」

「あなたを含めた教職員は生徒指導として生徒を裁く立場だ。あなたは噂を鵜呑みにして最初から石上君が悪者だと一方的に決めつけていた」

「しかしそれは石上が真実を言わなかったからだ！」

「あなたはそもそも石上君の言い分など聞かずにただ怒鳴りつけてただけだ。私も昨日、その場面を目撃しました。それを、生徒指導とは呼ばない。そして…石上君が沈黙を守った理由にあなたはまだ気づかないんですか？」

「何？」

「真実が明るみになれば大友が悪い男に捕まった事もバレてしまう。そうなればある事実にも気がつく人間は出てくるでしょう」

「ある事実、だと？」

「荻野たちは性犯罪のグループを結成していた。そしてグループ全員で暴行をする次のターゲットが大友京子だった。荻野と彼女は既に身体を重ねている」

「じゃあまさか、次の事実って…」

「そういう事には気づくの早いですね。そうです、大友さんの動画はネットにあげられていました。男にはモザイクがかけられていましたが。ですから今更あなた達に真実を話す機会など与えない。石上君の言葉を聞かなかった人間が石上君がやろうとした事を台無しにする事など許さない。まあ、もうそんな事できる状態にはないですけど」

見つかる限りの動画は強制的に削除した。だがインターネットとは恐ろしいもので削除しても完全に消える訳ではない。一度アップロードされてしまえば完全に消せる事などないのだ。

「何だと！」

「石上君は彼女の名誉を守るために沈黙したんです。ですがあなたはその沈黙をいい事に石上君を悪者だと決めつけた。一通りの石上君の弁明さえ聞かずに。あなたは、あなた達は無実で純粹な一人の若者の未来を消しかける事をしたんです。それを教育者とは呼ばない。あなたに教育者を名乗る資格はない」

「…脅しか？」

「脅し？あなたははまだ何も分かってないようですね。脅し、とは恐怖でもって何かを要求する行為です。あなたから得なければならぬ

ものなど何も無い。それに… 脅しで収める訳がないでしょう?」

「… ツー!」

「そうですね… 明日までに少しでもスワヒリ語を話せるように今からでも勉強しておく事をお勧めしておきます」

翌日、教職員達がどうなったのか、それは私立学校では珍しい人事異動が突然行われて数人が秀知院学園を去った、とだけ言っておこう。荻野コウも姿を消したという。

それから石上は学校への復帰が認められた。本人の要望により事件の真実は一般生徒には伏せられたが伏見光夜と高等部の生徒会までもが石上のために動き、またこれらが険悪ではない事から一般生徒もあの事件には何か裏があった、という事を察したようだ。そして人間の空気というものは集団の中で感染し、大きくなっていく。依然、石上はあまり周りに友達がいる訳ではないが彼に対する視線は嫌悪ではなく困惑へと変わっていった。石上のあの事件を話題に出す事自体が禁忌であるかのようになるのは自然な成り行きだった。それは大友が成績不良で秀知院高等部に進学できなくなった後でも。

「御行先輩!」

「ああ。誘う人物なら既に決まっている!」

4話 伊井野ミコは勝ち取りたい（前編）

中間テスト！それは学年が新しくなって初めて行われる定期テストである。1年生は特に外部入学してきた生徒を含めて自分が学内でどのくらいの立ち位置にいるのかを確認する事ができる最初の機会である。

その中で今回も学年一位の有力候補であるのは伊井野ミコである。彼女は中学三年間の中で一度を除いて学年一位を取り続けた秀才である。そんな彼女は光夜に対して挑戦を叩きつけていた。

「伏見！今回は本気を出すのよ！手加減をしてテストに挑むなんて風紀委員として見過ごせないの！」

「いや、風紀委員関係ないでしょ……。」

光夜は、中学二年の学年末テストで伊井野に勝利してから、毎度の如くテスト前にはこうして伊井野から挑戦を受けている。

「いや、今のところは姉さんから特に何も言われてないし。」

かぐやへのラブレター騒動や、石上騒動ばかりが最近取り上げられてて忘れがちだが、伏見光夜という人間は基本怠惰なのである。

自らの実力を出した事での悲劇を知る身からして、自分は全力を出すべきではないと本気で思っているのである。まあ試験勉強などまるでせずとも毎回五位前後には入っていることからその能力の高さは窺える。

そう、伊井野が学年一位の有力候補であっても、大本命ではない理由はそこにある。光夜が本気を出せば光夜が。そうでなければ伊井野が学年一位をとるとというのが一年生と教職員の間での前評判なのである。

「だってお前……一位取れなかったらいじけるじゃん。」

「でも……もしそれで何か言われたらまた守ってくれるんでしょ？」

「自分が気づく範囲で困ってたらな。」

光夜と伊井野が親しくなったのはその光夜が学年一位をとった試験の事である。

光夜はほぼ学校に来ずして二年生に進級した。しかしテストの日には必ず出席し、そこそこの成績を修めていたため何も文句を言われず、またこのままの出席ペースで三年生を終えても高等部進学は問題ないだろうと言われていた。そして今日は珍しくテスト当日ではなく一週間前なのに学校に来ていた。

いる筈がない人間がそこにいれば当然話題になる。その噂は学年を超えて姉の耳にも入った。

四宮かぐや。彼女を知る者は口を揃えてこう呟く。『まるで別人だ』と。高貴さはあるがしかし実際に話してみれば親しみやすさを覚えるような彼女は中学二年になってから変わった。それまでの親しみやすさなどどこに行ったのか、他者を寄せ付けないような性格と変わった。付けられたあだ名は『氷のかぐや姫』。小学校から彼女を知る人間はただ困惑するだけであった。

しかしその氷は定期テストの日だけに溶かされる。氷が溶かされたかぐやは一心不乱に一つ学年が下の教室へと走っていた。

「光夜！」

「早坂から聞いてみれば、まさかテストの日じゃないのに光夜に会えるなんて！」

氷のかぐやしかならない下級生は皆、目を丸くするだけだがそんな事はかぐやは気にしない。

「ちよつと来なさい！」

かぐやは光夜を連れ出した。

「その…どうしたの？」

かぐやは当然光夜が学校を休む理由を知っている。だからこそかぐやは嬉しさを胸が弾けそうだったが、なぜ光夜が登校したのかが気になったのだ。

「中学から色々あって、ようやく会社が安定するようになったんだ。もう自分がいないとまわらない、なんて事はなくなつた。勿論何か非常事態があればまた学校に来れなくなると思うけどそうならな限り、学校に来ようかなって思つて…。かぐ姉とも全然会えてなかつたし。」

「じゃあもうテストが終わつた瞬間に海外や、全国各地に行つちやつたりしないの？」

「うん。だから東京に留まるかな。東京の会社に寝れる場所はあるし、そこにいようかなって思つてる。」

「か、会社で寝るなんていつか体調を崩すわ！部屋は空いてるのだしまた昔みたいに戻ってきたら？」

「でももう四宮の人間じゃないし。」

「問題ありません。苗字が四宮じゃないとしてもご存知の通り、総帥は光夜様に帰ってきてもらいたいと思つています。何も言われる心配はありません。」

「げっ、早坂いたのか。」

姉と久しぶりに会えた歓喜で光夜は早坂の存在に気づかなかつた。そしてそれはつまり子どもらしい姉の呼び方を聞かれたという事を意味し、光夜の顔は真っ赤に染まる。

「光夜様が帰ってくるだけで私の胃には平穩が訪れるのです。是非とも帰ってきて下さい。」

そう言われ、元々断るつもりなどなかつたのだが光夜に断る選択など取れる訳がなかった。

「変わってないな。」

「かぐや様が光夜様は必ず帰つてくると言つていましたので、光夜様の部屋は光夜様が家を出てから何も変わってません。」

思い出と何ら変わらない家、自室に少しばかり感激する。

「ところで姉さんは？」

「かぐや様は定期テストが近いため勉強中です。光夜様が帰ってきたら教えるように言われていますがもう少し待っておきましょう。どうせ光夜様が帰ってくれば勉強なんてしないでしょーし。」

「聞こえてるわよ早坂。」

早坂は気づいてないようだったが、階段の上でかぐやが腕を組んで早坂を睨んでいた。

「光夜の気配を感じて降りてきたら…。まあ、今回は光夜が帰ってきた功績に免じて不問とします。下がちなさい。」

「も、申し訳ありませんでした。」

「さ、光夜。着いてきて。」

そう言つてかぐやは光夜を自室へと招いた。

「ねえ、どうしたの？早坂に対して当たりが強くない？」

氷のかぐや姫状態のかぐやは他人に対して先ほどの早坂よりも酷い当たりをしているのだが、そんな事は光夜が知る由もない。

「なんかかぐ姉怖かったよ。昔の方が好きだった。」

「ッ!？」

かぐやに大ダメージ。

5話 伊井野ミコは勝ち取りたい（後編）

「と、とにかく！一緒に勉強しますよ！光夜。」

「え、なんで？」

「来週からテストでしょう…。まさか光夜、今までテスト勉強は？」
「そりゃあ教科書一通り読んだりはしてるけど今のかぐ姉みたいにガッツリはしてないよ。」

伏見光夜は怠惰である、という事は有名な話である。

「それで光夜、いつもは何位くらいなの？」

「大体五位くらいかな。その辺をウロウロしている。」

ほぼ勉強をしない状態でこの秀知院で一桁の順位。これは非常にすごい事であるのだがかぐやにはお気に召さなかったようである。

「光夜。一位であるのなら勉強量については何も言いません。ですが自分より上の存在がいるのに努力を怠る事は愚か者のする事です。私の弟としてせめて今回のテストは一位を取りなさい。」

四宮かぐやは中等部進学から学年一位の座を一度も譲った事がない。そしてそれは本人の才能もさる事ながらかぐやが努力を続けてきた事の何よりの証なのである。

「…分かったよ。」

そしてやはり基本方針として伏見光夜は姉に逆らえないのである。

伊井野ミコは風紀委員である。裁判官を親に持ち、悪を憎む彼女は風紀委員として校則を破る生徒を取り締まり続けてきた。

取り締まる側の人間はそれ以外の人間から嫌われがちである。しかし彼らが表立って伊井野に反抗できなかったのは、そして伊井野がどれだけ他人から拒絶されても自分を強く持つことができていた一番の生命線は…。テストでの学年一位だった。

しかし伊井野は生まれて初めて自分の右隣に他人の名前が刻まれる結果を目の当たりにした。

「こら！学校に不要なものは持ってこない！」

「げ、伊井野だ。」

しかしテストの結果は残念なものであっても伊井野ミコは風紀委員である。自分の気分によって職務を放棄するなど、それこそ伊井野が嫌うもの。彼女は今日も変わらず取り締まりを開始した。

「おい待て酒巻。よう伊井野、今回のテスト1位じゃなかったみてえじゃねーか。こんな事するより勉強してた方がいんじゃないか。」

「へー、そうだったのか。俺らは学年で1番優秀な学年1位の言う事しか聞かねえからよ！」

いつもならそんな言葉など無視して取り締まりをする伊井野だが今回は違った。学年1位というものは自分の行為に説得力を持たせる以上に伊井野の自信の根源となっていたのだから。

「ッ！」

結果として言い返す事などできず俯くしかなかった。

「じゃあ自分の言う事なら聞くのかい？」

「お、お前は?!」

「伏見光夜だ。そこのお前、学年1位の言う事しか聞かないんなら自分の言う事は聞くんだよな？」

「は？いや何言ってるん…」

「お前バカッ！知らねえのか?!こいつは元四宮で苗字代わりのあのアントッチャブルだ！親父からもこいつだけは敵対したらダメだって言われてんだ！」

「(思い切り聞こえてるんだよなー、あとアントッチャブルは恥ずかしいからやめてくれ)」

光夜は思わぬ反撃に内心少しむず痒い思いをしていた。

「伊井野が悪いところをしたとすれば、それはこいつが校則の要求範囲を超えた取り締まりをした時だけだ。だが自分はそんな話は聞いたことがない。」

今回はどうなんだ？と光夜が尋ねるが、しかし彼らにも校則を破っている自覚があったのだろう、そして光夜に対して強くは出れない事

からあぶら汗を浮かべるしかなかった。

「校則の範囲で取り締まってるにも限らず、それに反発を覚えるなら、抗議の先は伊井野じゃない。生徒会や教職員だ。それでも伊井野に反発し続けるならそれは何て言うか知ってるか？逆ギレって言うんだよ。」

そこまで言われて男子生徒2人は最早他にとれる選択などなかった。

「ご、ごめんなさい伊井野さん…。」

そしてこの事は間接的に、伊井野ミコのバックには伏見光夜がいるという噂に繋がり、伊井野は以前のように嫌がらせを受ける事はなくなった。

「ふ、伏見！…そ、その…ありがとう…。」

「別に伊井野のために助けた訳じゃない。ただあの現場を見逃して自己嫌悪したくなかったただけだ。だからお前は勝手に助かったただけだ。礼はいい。」

それは光夜の意図したところとは違うが、見返りを求めない優しさとして伊井野の胸を貫いた。

「次は…私が学年1位をとるんだから！」

今度は自分が光夜を助けられるように、と。伊井野の目標に光夜にテストで勝つ事が加わった。

そしてその目標は次の中間テストで早くも達成される事になる。伊井野は1位。光夜は5位だった。しかし伊井野の顔には喜びはない。

「伏見！あんたまた手を抜いたでしょ！」

「ん？ああ伊井野か。自分に勝つ！ってあれだけ言ってたが有言実行ってすごいなー。学年1位おめでとー」

「私は！私にあんたの全力に勝ちたかったの！手抜きのあるあなたに勝つても嬉しい訳がないじゃない！次は…次は全力を出しなさいよ！」

しかしかぐやからの命令が最初のテストつきりなかったため、光夜に全力を出す必要はなく、高等部進学まで伊井野が1位を獲り続け

た。
「なんでそこまで勝ちたいのかなー」

6話 生徒会は出かけた

中間テストも終わり、秀知院の面々も、そして生徒会も張り詰めた緊張が緩み、学園の雰囲気も日常へと戻っていた。

光夜は、伊井野から散々本気を出しなさい！と言われてたがそれはいつもの事なのでいつものように聞き流していた。

そして本気を出す事もなく今回も光夜は5位であった。

「そうだ！ 夏になったら生徒会で旅行に行きましょう！」

生徒会室には光夜、かぐや、白銀、藤原という、石上以外の役員全員が揃っていた。石上はかぐやを恐れているのだがその事を光夜は知らない。

「それはいいですね。親睦も兼ねてどこか出かけましょうか」

「行くなら山がいい。夜は満天の星空の魔法にかけて四宮を落とす」

白銀はこれを恋愛頭脳戦に結びつけた。

「そうだな。行くとしたらや……」

「海以外ありえませんが」

しかし白銀の提案はかぐやの言葉に遮られた。

「私は常々考えてきました。私と光夜は常に同じ家で2人きりで暮らしています」

かぐやの脳内から早坂愛という存在は消された。

「(ですのただ一緒にいる時間を増やすだけではダメなのです！もっと何か刺激的な、そう！ 非日常溢れる旅先で日頃見ない私の水着姿を見れば……光夜も私の事を1人の女として見るでしょう！海の魔法にかけてそのまま……」

いける！ いけるわ！ ならば海しか有り得ない！」

ここにかぐやと白銀の全面決戦が開始された。だが、

「あ、すみません。ちょっと用事があるので席外しますね。今日の分の仕事は終わってますので」

光夜はスマホに何か連絡が入ったのか、それを見ると生徒会室から

出ていった。

「(いいわ。光夜が帰って来る頃には勝負を決めておきますから楽しみにしておきなさい!)」

「(光夜は基本四宮には逆らえないからな。光夜には悪いが、あいつがない方が山に行きやすくなる!)」

光夜の不在によって2人の士気は更に高まった!

「海の潮騒は最高の子守唄です。潮風が夏の火照りを吹き消してくれるでしょう」

「(まずい! 海だけはダメだ! 俺は泳げない!)」

白銀に更に負けられない理由が加わった。

「海は人が多いだろう。それにベタつくしな」

「四宮家の所有するプライベートビーチを使いましょう。温水シャワーの設備もあります」

「日焼けは乙女の大敵だ」

「最高級の日焼け止めを用意しましょう。一流のエステティシャンも呼んで、肌のアフターケアも完璧です」

「……鮫が出るぞ」

「フロリダから一流のハンターを呼んでおきましょう。デイナーはフカヒレですね」

「(くそっ! この金持ちめ!)」

「(なんで会長はここまで反対してくるのよ!)」

白銀、持ちうる反論材料が尽きてしまう。かぐや、白銀がなぜそこまで反対してくるのかが分からない。

だがかぐやにはその事を考えるより今は重要な事があった。

「海は夏しか行けないじゃないですか。山は天気も荒れやすくて雨も降ります。それに、虫も出ますよ」

「(虫……虫だけは……!)」

白銀は大の虫嫌いである。その事を指摘され、もう白銀に山を選択する事などできなかつた。

「……水着買っておくか……」

「勝ちました。さあ光夜、待っておきなさい」

本日の勝敗、かぐやの勝……

「あ、そうですね。私も去年のサイズが合わなくなっちゃって、新しいの買わなきゃ」

「ッ!?!」

かぐやは藤原の胸部をみて、何かを察した。

「(まずい……それじゃあ……、光夜に私を意識させるどころか……藤原さんが友達から格上にされてしまうじゃない！ それはNO！ 絶対にNO!）」

「山にしましょう。海はベタつくし、人が多いし鮫も出ます。山にしましょう」

「さつきと違いますよ!」

「いや海だ! 山は雨も降るし虫も出る! 海にしよう!」

「こっちも!」

そう、各々が意見を変え議論が踊っていた時だった。

「ただいま帰りました。で、どこ行くか決まりましたか?」

「あ! 光夜君! 聞いて下さいよ! この2人、さつきまでとは違った事言い出して!」

そこで藤原は光夜に対してこれまでの事を説明しようとした、が。

「そ、それなら海か山か、藤原さんに決めてもらいましょう!」

「え! 私か! ですか?」

「(藤原さんにさつきまでの話をされては……私がなんで意見を変えたのかバレてしまう! そんなの姉的にNO!）」

「ええと……どちらかという……山?」

勝った、という声がかぐやからした気がした。

「(かぐ姉は山に行きたかったんだ)」

同時に白銀は海に行きたいのだと光夜は気づいた。

中学のとき、白銀がカナヅチである事を知った光夜は白銀があれから泳げるようになったのだと、特訓を積んだのだと思って白銀を尊敬していた。

自分は怠惰と呼ばれるように努力というものが苦手だからである。

……まあ、白銀は泳げるようにはなっていないのだが。

「あ、山は山でもー、恐山に行きたいです！」

「恐山？」

「賽の河原に血の池地獄！ 輪廻を廻す風車とかがいっぱい！ せっかくだからイタコさんに死者の霊を口寄せしてもらいましょう！ 誰がいいかな〜！ キリスト？ ブツダ？」

その藤原の変貌にかぐやと白銀は顔を青くさせる。結果、先程までの争いは一旦保留という結論に辿り着きそうである。

本日の勝敗 計画おしや白……

「いいね！ 千花。自分も賛成！ 恐山は温泉もたくさんあるしね！」

「お、光夜君分かってますねー。じゃあ今度行きますか？」

「でもイタコさんって365日いつでもいる訳じゃないからね。あ！

夏休み入ってすぐの大祭なら間に合いそう！」

「お〜！ それはいいですね！ じゃあ一緒に行きましょう！」

「そうだね。御行先輩も姉さんもあまり気乗りしてないみたいだからね」

「(かぐ姉が怖いのが苦手って言わない方がいいよね)」

そんな中、光夜と藤原の間で次々と決まっていくのをみてかぐやの心中が穏やかな訳がなかった。

「(ちよつと待って！ それってつまり光夜と藤原さんが2人で旅行に行くって事じゃない！ それってまるでデ……。とにかくっ！

そんなの姉である私が許しません！)」

「2人が行くならわ、私も行きます」

「(な、なに!? 四宮も行くのか?! 確かそこ大祭は夏休みに入ってますって言って言ってたな……。それならそこで行かなかつたら夏休み最終日まで結局何も無い……。なんて事に……)」

「お、俺も行くぞ。そもそも生徒会の親睦って事だったからな。そうだ！ 俺が行かない訳がないだろ！」

白銀、どんな状況でも、無理矢理にでも自信を持つという事を実践する。

「わあ〜！ いいですね！ 皆さんで恐山に行きましよう！ 楽しみですね！ 光夜君！」

生徒会の親睦旅行に恐山が追加された。

本日の勝敗 光夜、藤原の勝利

「それで、こんなところに呼び出して何なんだ？ 伊井野」

光夜が山、海論争の途中で生徒会室を抜け出したが、それは伊井野から風紀委員室に呼び出されたためであった。

「何か校則違反をした覚えはないんだが」

「きよ、今日は違反をしたから呼び出した訳じゃないの」

「じゃあなぜ呼び出した？ と思ったがそれはこれから説明があるだろうと光夜は思った。」

「この前のテスト、私が一位だったわ。だから夏休みの間私が伏見に勉強を教えてあげるわ！」

「え」

「テスト前に言ったじゃない！ 今度のテストで私が勝ったら少し付き合いなさい！ って」

光夜はまたいつもの如く伊井野がキーキー言ってるなど聞き流していたので聞き覚えがなかった。しかし伊井野がそんな嘘をつく事はないとも思うのでおそらく言ったのだろうと。そしてそれに自分が同意したという事も理解した。

「（一回約束したんなら破る訳にもいかないよな）」

「分かったよ。学年一位の伊井野さんにお勉強を教えてくださいませよー。じゃあ夏休み入ったら適当に連絡してくれ」

その後、光夜は生徒会室に戻り、先の話となる。

7話 壁ダアン!

「恋愛相談?」

「はい! 恋愛において百戦錬磨との呼び声が高い会長と伏見君に何かいいアドバイスを頂けないかと思って」

放課後の生徒会室前。突然田沼という男子生徒に恋愛相談を持ちかけられる光夜と白銀であった。

(え、恋愛百戦錬磨って何?! 俺そんなイメージ持たれてんの?! しかしここでボロを出したら... 四宮に童貞だとバレてしまう! それだけは避けなければ... それには光夜がいる。あいつなら俺と違ってそういう経験もあるだろう)

「よし、任せろ!」

白銀は田沼を生徒会室にへと招き入れた。

「あ、すみません先輩。自分、そういった経験はなくて... だから先輩が求めるようなアドバイスはできないかもしれません」

白銀の当てが外れた。

「自分も一緒に御行先輩から色々学びたいと思います!」

白銀、既に引き受けた以上、その言葉を取り消す事などできなかった。

「分かった... 俺に任せろ!」

こうして童貞の童貞による童貞のための恋愛講義が始まった。

(あら、光夜の恋愛話ですか。家ではそういった話はあまりしませんし、気になりますね)

扉の外にはかぐやが耳を澄ませた状態で。

「それで、相談というのは?」

「はい。クラスメイトに柏木さんという人がいるんですが... 彼女に告白しようと思っているんです!」

(ふム)

(おお!)

(まあ!)

「でも断られるかと思つたら… もう少し関係を深めてからでもいいと思ふんです…」

(フラれたくないしねー！)

「… ちなみに、その子と接点はあるのか？」

「はい！ バレンタインにチョコを貰いました！」

「お！ どんなチョコだ？」

「… チョコボール三粒です」

(ええ…)

かぐや、顔を青くする。

「これってやつぱり義理ですかね？」

(それは… いくら恋愛経験なくても分かるよ…)

光夜とかぐやの考えは一致した。田沼のその問いに白銀はどう彼を傷つけずに答えるのか、光夜とかぐやは気になった。

「あー… それはもう…。お前に惚れてるな」

(え？ どうして？ チョコボール三粒ですよ！)

「いいか！ 女つてのは素直じゃない生き物なんだ。常に真逆の考えを取ると思え！ つまり、その一見義理に見えるチョコも…」

「逆に本命…！」

光夜は恋愛経験はないが、人と多く接してきている。白銀と違って最初にかぐやと同じ結論に至っていたのだが…

(経験者がそういうならそうなのか)

自身が未経験であり、経験者の白銀がそういうならそうなんだと学んでいた。

(会長！ 光夜に変な事を教えなくて下さい！)

これが終わったらあれは間違いだと光夜に教えようと決心するかぐやであった。

「だけど… 彼女にその気なんてないと思います」

「と、言うと？」

「前にこんな事があって…」

「ねえ君って彼女いるの？」

教室で柏木に問われる田沼。

「い、いないけど..」

素直にその問いに答える田沼。

「彼女いないって!」

「やっぱり!」

「いる訳ないよねー!」

「超ウケる!」

「こんな感じで...。だから、揶揄われているだけなのかな、って」

(残念だけど揶揄われているわね。異性として見られている以前の問題。流石に光夜も会長が言った事が間違いだと気づいたでしょう)

「お前... モテ期きてるぞ!」

(ええ...)

「なぜそんなに女を疑うんだ! 女だってお前と同じ人間だ! さっきのやりとりを翻訳するところだ!」

それから白銀は柏木さんとその周りの彼女達が全員田沼に惚れているという推理を始めた。そしてその的外れの推理に光夜が目を輝かせている事からかくやや頭痛が痛くなり始めた。

「そんな... 莫迦な..」

(そうよ!)

「彼女達の中からたった一人を選ばないといけないなんて..」

(あなたも莫迦なの?!)

「何言ってるんですか! 先輩が好きなのは柏木先輩なんでしょう!

それなら! 迷う必要なんてないじゃないですか!」

(光夜?!)

「でも... 彼女達の友情にヒビが入ったり..」

「そうだな。最悪いじめに発展するかもしれない。女同士の友情はそういうものだからな」

(よかった! ちよつと不安だったけど光夜も賛同してくれるなら間違いないな!)

「だけどその彼女は先輩が守るんです! 先輩しか、彼女を守る事は

できないんです！」

(最初は意味分からなかったけれど御行先輩がそういうなら間違いないね)

「でも告白なんてどうすればいいのか…」

「そうだな、よし光夜手伝ってくれ」

「分かりました御行先輩」

白銀は光夜に概要を説明する。

「この扉に件の女子がいるとする。いけっ！ 光夜！」

「はいっ！」

光夜は力の限り、その扉を叩く。そして…

「俺と付き合え」

「そう。突然壁に追い込まれ、女は不安になるが耳元で愛を囁いた途端、不安はときめきへと変わる。そうすれば告白の成功率は上がる！」

(び、びっくりした！)

かぐやは先ほど受けた衝撃を実際に生でされたらという事を妄想し始めた。扉の陰に頭を埋めている。

「この技を… 壁ダアンという。俺が名付けた」

「やはり天才か…」

かぐやのツツコミなど既に追いつかない

「ありがとうございます！ 会長のおかげで勇気が出ました！ 流

石、あの四宮さんを落とすだけではありませんね！」

((え?))

「い、いや… 俺と四宮は別に付き合っていないぞ」

(かぐ姉と御行先輩…? まあそこら辺の人より御行先輩ならまだ…)

(そうよ！ 私落とされてなんかいいわ！ それにどうしてよりによって会長なのよ！)

「そうなんですか？ 側から見ればかなりお似合いなんですが」

「いや… 最近むしろ嫌われているように思えるんだ。興味すらな

い…と」

(会長には悪いですが、人間としては尊敬する部分はありますが男女という意味では仰る通りです。現実を客観的に見る事ができるのは美徳の一つです)

「会長！ 大事なものはどう思ってるかですよ！」

「俺が四宮をどう思っているか？」

(え？ それ聞く?! そんなの公開告白みたいじゃないか!)

白銀の頭脳は羞恥と興奮で機能しなくなっていた。それはこの場に誰がいるのかという認識で…

「まあ正直、金持ちで天才で癪な部分はある。案外抜けてるし、内面怖そうだしあと胸も…」

「御行先輩！」

白銀の頭の中から光夜が隣にいますという認識がずれ落ちていた。この男の前で姉の悪口など言語道断。姉がブラコンであると同時に絶対に認めないだろうがこの男もまたシスコンなのである。

「姉さんは！…！」

それから光夜のかぐや談が始まる。

(知ってる！ そんな事知ってるよ！ 四宮のいいところなんて上げ出したらキリがないんだって事は!)

(もうやめて！ 光夜！ 心臓が…!)

「… だからかぐ姉は最高なんだあつ！」

途中から呼び名が変わってはいるが、そんなことには気づかず、しかしようやく話が終わったのだと気づいて白銀は話を切り出す。

「と、とにかく！ 告白しないと何も始まらない！ 変に策略を練って駆け引きなんてしてもいい事ないぞ！」

(あれ… なんだろ… 胸が痛い…)

白銀、自らの言葉で大ダメージ。

「僕、頑張ってみます！ 本当にありがとうございました！」

そう言って田沼は生徒会室から出ていった。柏木に壁ダアンをするのであろう。

「御行先輩。自分も駆け引きなんてしないでぶつかってみたいと思います！　ありがとうございます！」

そう言って光夜も生徒会室を出て行く。田沼と同じく彼も誰かに壁ダアンをしに行くのだろう。光夜の好きな人を知らない白銀はそれが誰か気になるがしかし後輩を応援する。

「ああ！　頑張れよ！」

（告白って！　それじゃあ私。。。今から光夜に壁ドンされて告白されるって事じゃない！　そんな。。。いきなり！　まだ心の準備が！）

「あ！　かぐ姉！」

（顔がまだ緩んで！　しっかりしなさい！　四宮かぐや！　こうして光夜の側から来てくれているのよ！　姉として！　堂々とするのよ！　照れ隠しなんてダメ！　自分の思った事をそのまま素直に言うの！）

「じゃあ急いでいるからまた後でね！」

「え」

光夜はそう言ってから生徒会室を後にした。

（じゃあ光夜は私。。。以外の人に今告白しに行つて。。。）

かぐやの目の前は真つ暗となった。これが失恋というものなのか。「ふう、何とか乗り切つたか。しかしあの光夜も好きな人がいるとはな。成功する事を祈つておこ。。。げっ四宮！　。。。まさか聞いてたか？」

（やばい！　俺四宮に何て言つてた?!　光夜が四宮談義をする前だろ。。。ヤバイ。。。）

（会長のせいで光夜が。。。会長が余計な事を言わなければまだ光夜と付き合える可能性だつてあつたはずなのに！）

「会長。。。絶対に許しません」

（終わった。。。俺の恋。。。）

本日の勝敗　白銀、かぐやの敗北

一方その頃、元凶^{光夜}というと…
(先輩の熱に浮かされて勢いよく飛び出したけど… 面白いえば好き
な人とかいないじゃん)
いなかった。

8話 羞恥淫学園

「あれ？ 姉さんは？」

一連の元凶^{光夜}が浮かれた熱を冷まし、生徒会室に戻るとそこにはかぐやの姿はなく、どこか意気消沈した白銀のみがそこにいた。

「ああ。四宮なら何か体調を崩したとかで帰ったぞ」

その事を聞いて光夜の行動は早かった。白銀は元々光夜の告白について聞きたかったが、最早そんな気力など残ってはいなかった。

「早坂ー」

「はい、よしよし」

（それにしても光夜様に好きな人がいるとは……ちよつと意外ですね）

「早坂。こうなったら会長に痛い目を見てもらわないと気が済まないわ！ って聞いているの?! 早坂！」

「あー、ちよつと聞いてません」

（光夜様からですね。内容は……。これ告白が成功した後のメールじゃないと思うんですね……）

早坂は光夜が振られる事など考えてはいなかった。一時は敵対した関係。色んな視点で彼を見た事で早坂は誰よりも客観的に光夜を見る事ができていた。

（やっぱりあの人が告白する様子も、そして振られるのも想像つかないですね……。多分かぐや様が言った、告白しに行くつてのが勘違い）

早坂、あの場になかったにも関わらず誰よりも早く真実の扉に手をかける。

「かぐ姉！ 体調崩したって大丈夫?!」

光夜、颯爽帰宅。

「……。告白しに行つて彼女はどうしたの？」

「あ、もしかして生徒会室の話聞いてた？ いやあ、田沼先輩と御行先輩の話聞いてたら胸が高鳴つて壁ダアンしに行つただけで生徒会

室出て、そういえば好きな人いなかったって気づいたんだー」

かぐや、目が点となるがその間にも脳は働き現状を理解しようとする。結果、自分が思い違いをしていた事に気がつく。

「大丈夫よ！ もう治ったわ！ 今日はいつもとより早く帰ったし少しお話ししよう！」

かぐやの機嫌はピークに達した。

（四宮の機嫌が明らかにいい……）

昨日はあれだけ悪かったのに1日で一体何があったのか……。白銀の頭はそれだけに支配されていた。実際は今ここにはいない男の誤解が解けただけなのだが。そんな時、藤原が奇声をあげる。

「ひ、ひゃあああ！ 淫れてます！ この国は淫れてます！」

藤原が広げた雑誌、それは生徒が学校に持ってきたものでいかかわしいとして没収されたものである。

「高校生までで初体験を済ませたアンケートで34%ですか」

「嘘です！ みんなそんなにしてる訳がありません！」

「セレクションバイアスってやつだな。こういう雑誌を読んでいる奴が投票するからだ」

かぐやの声に反応するように藤原と白銀があり得ないとその投票結果を否定する。34%。つまりその数字だけで言えばこの生徒会室に集う3人の内、1人はそういう経験があってもおかしくないという事を示しているに他ならないからである。

「別に妥当ではありませんか？ むしろ低すぎだと思えます」

しかしかぐやだけは2人と反応が明らかに違った。

「その……かぐやさんはそういったものが……」

おそるおそる藤原が尋ねる。四宮かぐやは日本屈指の財閥の娘である。そういった経験など無論……

「はい。だいぶ前に」

あった。

「風紀委員の書類提出なら一人で行けるだろ……。わざわざ呼び出

して」

「しようがないじゃない！ 生徒会室は行った事ないし！ 少し緊張するのよ！」

未成年の告白よろしく、ピンク色に染まった生徒会室に光夜がいなかったのは伊井野に呼び出されたからである。彼女は風紀委員に属しており、本日はその書類を生徒会室に持っていかなければならない。しかし彼女は生徒会室に行ったことなどなく、こうして光夜に協力を求めているのである。

「あ、ちよつと電話だ。……長くなりそうだな。伊井野、生徒会室には千花もいるから大丈夫なんじゃないか？」

「え！ 今日藤原先輩いるの？」

「確か今日はT.G部の日じゃなかったと思うし。伊井野一人でも行けるやろ。先行つててくれ」

（藤原先輩がいるなら大丈夫ね！）

藤原がいるという情報を得て、伊井野の心に勇気の灯火がついた。彼女は生徒会室の扉に手をかける。

「ですから、私は光夜と初体験を済ませましたね」

話は数分前に遡る。

「か、かぐやさん経験した事あるんですか？」

「さつきも言いましたけどそうですね」

「私も彼氏作った方がいいのかな……」

（あはは……四宮はそうなのか……昨日から俺のSAN値が……）

「幼い頃にもしましたし、昨日もしましたね」

「え。かぐやさん、昨日どこかに泊まったんですか？」

「いえ。普通に家に。来客も来てませんよ」

「それじゃあ……」

「はい。昨日は光夜と。幼い頃にもしましたね懐かしいです。ですから、私は光夜と初体験を済ませましたね」

そこで冒頭へと戻る。ガチャリと扉は開かれ伊井野が生徒会室へと足を踏み入れる。

(初体験って！ それじゃあ伏見は……)

伊井野ミコは机に広げられている雑誌の表紙と先程の会話だけで何の話をしているか分かってしまった。

(四宮の機嫌がいいのは昨日それをしたからなのか……じゃあ四宮の好きな人は……)

最早生徒会室は光夜とかぐやがそういう関係であるという事で阿鼻叫喚であった。

「ええ、昨日光夜のほっぺにしました」

(そんな特殊プレイを！)

伊井野は間違った解釈をした。

「姉弟でそんな事をしたらダメでしょう！」

「私と光夜は従姉弟の関係です。法律上結婚もできるので何もおかしくはありませんよ」

「それでも！」

(ていいうかなんであいつは今日、飄々としてたのよ！ 大人の階段上ったのよ！ もっと何かあるんじゃないの?!)

伊井野がそう考えていた時であった。

「すみません、遅くなりました」

渦中の種がやってきた。

(え、何？ この雰囲気。かぐ姉はなんか上機嫌だし御行先輩は死んでるし、千花は目を合わせてくれないし伊井野は殺人鬼のような目で見てくる)

「伏見が昨日致した事についてよ」

「すまん。まるで意味が分からん」

「伏見と！ 四宮先輩が昨日致した事よ！」

(かぐ姉と昨日した事?)

光夜は昨日の事を思い出す。

〜回想中〜

「それじゃあ本当に誰にも告白しに行かなかったのね?!」

「だからそう言ってるでしょ。今好きな人とかいないし」
(本当に私の勘違いだったのね。何だか恥ずかしいわ!)

ベッドに座っていたかぐやは考え事をしていたのもあり、立ち上がる時にバランスを崩してしまう。

「かぐ姉危ない!」

このままでは床に頭をぶつけてしまう。光夜はそれを防ぐため動く。そして……かぐやは光夜に頭突きをしてしまう形となり、かぐやの唇は光夜の頬に凄いい勢いでぶつかった。

「痛てて、かぐ姉が無事でよかったよ」

当然光夜は何が起こったのか、そしてかぐやが先ほどから一言も発しないのか分からない。

「じゃあ念のためにも氷もらってくるよ」

後ろを振り返り、かぐやのその紅潮しきった頬を見てないからである。

〜回想終了〜

「昨日何かあったっけ?」

「何であんたが知らないのよ! 隠そうっとしたってそうはいかないからね!」

光夜は本当に知らないのだがそれは伊井野からしてみれば誤魔化しているようにしか見えなかった。

「まあ光夜が気づいてないのも無理はありませんね」

(睡眠〇!)

伊井野はまたも酷い勘違いをした。光夜が部屋に入ってから幸か不幸か、何についての話をしているのか、肝心な単語は一切出てこず光夜とそれ以外で大きなすれ違いが起こっているのだ。

伊井野は顔を真っ赤にして怒り、かぐやは先ほどからテレテレとしていて話にならない。白銀は死んだ目をしておりまともに話ができる可能性は顔を赤くしているが一人しかない。

「ねえ千花、ところでさっきから何の話をしてるの?」

藤原の耳元で光夜は尋ねる。下手に聞けばキーキー吠える犬がまた更に喚く事になると光夜は考えた。

「えー！ 私に言わせるんですか！ そ、その…… 光夜君とかぐやさんがその…… 男女の営み的なものをしてるとかぐやさんが言ってます。」

「は!?! してる訳ないでしょ!」

「でもかぐやさんがそうだって!」

「いやいや姉弟だから! そんなのしないって! …… っていうかそもそもかぐ姉ってあんまり性事情なんて知らないんじゃない?」

光夜は四宮家の教育事情を知っている。もともと光夜は四宮家を出てからはそういった内容についても人並みの知識は付け足し、かぐやは知らないが石上の調査をする過程で同級生のそういう動画を見た事もある。

「姉さん。一応聞いておくけど初体験って何の事だ知ってる?」

「光夜! こんな人目があるところで何を言わせるんですか!」

(あなたは恥ずかしくないの?!)

「…… キ、キッスの事でしょ?」

その瞬間、この場にいたかぐや以外の全員が事の真相と自らが間違っていた事実を自覚した。

「光夜君。私が説明してきます」

「御行先輩、伊井野。生徒会室から出しましょう。姉さんの名誉のために」

その後、生徒会室で絶叫が聞かれたとか聞かれなかったとか。

「ところで伊井野。途中、何か誤解してたよな? 一体どんな誤解をしたんだ?」

「ッ!」

本日の勝敗、伊井野の敗北

9話 攻略開始

それはある休日のことであつた。

「早坂、光夜に女として意識されるためにはどうすればいいのかしら」「な、何言ってるんですか？ そんな事したら…。」

そんな事したら光夜の事を好きだと言ってるようなものですよと言ふ早坂。これまでも何回か同じような事がありその度に、つい冷静になつた時に泣きつかれるのがお決まりのパターンであつた。

「だから… そう言ってます」「えっ？」

しかしかぐやのそれはこれまでと異なる目つきであつた。かぐやは既に覚悟を、そして自分の気持ちを固めていた。それは光夜が誰かに告白をしに行くことと決めたあの日から…

（私はあの時、すごく胸が苦しかったわ！ そして… 今なら分かるの…。このまま…。このまま変わらなかつたら…。あの光景がそのまま私の未来になつてしまふ！）

しかし問題は光夜とかぐやが姉弟であるという事。いや、光夜とかぐやは従姉弟であるので何の問題もないのだが光夜が完全にかぐやの事を姉としてしか見ていないところにある。そしてこのまま無計画に告白してもただ失敗するどころか姉弟としての関係すらも壊れてしまふという最悪の展開まであり得てしまふ。

（それでも！ もう自分の気持ちに嘘はつけない！）

これはただの恋愛頭脳戦ではない。ただ告白させるといふ事ではまだ足りない。恋に敗れ、今までの関係全てが崩壊してしまう恐れもあるDEAD or LOVE。しかし賽は投げられた。

（だからっ！ まずは！ 光夜に身内ではなく他人だと思わせなければ！）

長年の停滞からかぐやは前に進み出した。

「あー！ 姉さんおはよう」

計画が始まつた事など当然知らない光夜は呑気に朝の挨拶を交わ

かぐやは光夜が酷く落ち込んでいたという事を聞いて顔を青くし、更にただ仲の悪い姉弟になるかもしれないと言われ、より顔を青くさせた。

「ならどうしたらいいのよー!」

「簡単です。執拗に距離を空けるのではなくその逆、むしろ距離をこれまで以上に縮め、恋人のような距離感で接すればいいのです」

（せっかく胸を痛くして実行したのにそれが無駄だったなんて!

・・・でもこれ以上光夜に辛く当たらなくていいのならそっちの方がいいわね!）

「そうするわ。では明日からのため、今日は英気を養うために寝ます」

「分かりました。おやすみなさいませ、かぐや様」

翌日

「お、おはよう...?」

「おはよう光夜。昨日はごめんなさいね」

返ってきた返事は昨日の冷たいものではなかった。

（よかった! 早坂には感謝しないとな!）

光夜は安堵の表情を浮かべる。

（やっぱり光夜は笑顔の方がよく似合うわ!）

出だしは上々である。

「あれ? 今日の朝食」

四宮家では三食の食事は一流の栄養士がバランスを細かく考えて提供される。だが今日は違った。

「ええ。今日は光夜の好きなものを私が作ったわ! でもちゃんと栄養も考えているからそこは安心しなさい」

かぐやはそう言って胸を張った。そして光夜はある事に気づく。

（あれ? 箸がない。かぐ姉にしては珍しいミスだな）

「はい、光夜」

「え?」

かぐやは一体何をしているのか。ハンバーグを一口サイズに分けてから光夜の口元へ箸を近づけている。

「箸がないと食べられないでしょ？ だからはい、あーん」

そこで光夜はかぐやの真意を理解し、何も反抗せずにその箸を受け入れた。

「光夜！ 私の分のデザートも食べていいわよ！」

「えっ… わ、分かった…」

「光夜！ 耳掃除してあげるわ！」

「はい…」

「光夜！ 先にお風呂入っていいわよ！」

「……………」

かぐやにとつてはどれも恋人同士がする行為、会話。それを光夜とできる事によつてかぐやの脳内ではオキシトシンなどの幸福物質が生まれていた。

（ああなんて幸せなのかしら！ これで光夜も私達の事を姉弟を越えたものだつて思ったはずよ！）

一方その頃光夜は…

「助けて早えもん！」

「だから人を青いタヌキみたいに言わないで下さい光夜様」

早坂の部屋であった。

「それで、今日はどうされたんですか？」

「姉さんがおかしいんだ…。いつもよりやけに優しいというか…

いつもしないような事をしてて…」

人は知らない事を恐怖に思う生き物である。いつもニコニコしている人はその笑顔の裏に何を飼っているのか分からないで怖い。それは怒鳴り散らかす人よりももつと人間の本能的な部分で相手に恐怖を与える。

「やっぱり姉さんを怒らせちゃったのかな…？」

そしてそれは不気味さとして、昨日よりも光夜は震えていた。

(かぐや様のやる事がことごとく上手くいっていない…)

…これは天才達による恋愛頭脳戦である。

10話 ツンデレ先輩

「あら、光夜じゃない」

「あ、眞妃さんじゃないですかこんにちは」

「それで… こんなところで何やってるの？」

それは学校のない日曜日。東京のある街で光夜は四条眞妃に話しかけられた。

「ボランティア部が募金活動をするようで、生徒会としてその手伝いですね。御行先輩と一緒に。眞妃さんは？」

「… 私もボランティア部なのよ…」

「こんなところで何をやってるんですか…」

眞妃は木陰に隠れて募金活動の様子を見ていた。そんな眞妃を光夜はジト目で見てから田沼、柏木がいる方に眞妃を連れて行こうとするが…

「ま、待って！ 心の準備が…！ もうちよつとここで待たせて…」

「言ってる意味が分かりませんが… まあ分かりました。じゃあ自分は先に行ってますね」

「待って！ もうちよつとここにいてくれないかしら？ … 一人だと何をしてしまうか分からないから…」

「本当に言ってる意味が分かりません…」

（この人相変わらずよく分からないんだよね…。四宮と四条は仲が悪いけどこの人に敵意を持たれてるかどうかさう分からないし）

「もういいわ！ 心の準備はできたわ！ 待たせたわね光夜！」

「… 本当ですよ。なんで一時間も待たされたんですか。ていうか素直に一時間待った自分も馬鹿だ…」

それから残り少ない募金活動を行なった。

「さつきは助かったわ光夜。この後お礼するから少し付き合いなさい！」

「えっ… いや別に…」

「何？ せっかく四条のこの私が施しをさせてあげようと言うのに断るといふの？ この不調法者！」

募金が終わり、光夜は眞妃にそう誘われる。そこまで強い口調で言われ、特段光夜に断る理由もなかったので首を縦に振る。そして二人は気づかない。

田沼と柏木を反社会勢力にしたのかと不安に思ったかぐやが丁度様子を見に来ており青い顔で、そしてすごい目つきで二人を睨んでいる事に光夜達は気づかなかった。

四条眞妃という人間は四宮憎しの四条家の人間ではあるが周りの人間ほどその傾向はない。それに加えて四宮家の奥深くの事情まで知らない彼女にとっては光夜は自らの家、四宮家から追い出されて可哀想、不憫な存在なのである。

そして血の繋がった親戚。光夜が四宮の苗字を捨てた事で四条家の人間も光夜に対してはそこまでの嫌悪感はない。

かぐやが光夜に向ける感情とは違うが、眞妃も親戚として光夜の事を思っている。

「だから哀れなあなたに施しをさせてあげようって言うてるのよ」

「いや… 自分の分は自分で払えますから…」

「何？ 私の施しは受けられないって言うの？」

が、四条眞妃という女は超がつくほどのツンデレであり、天邪鬼なのである。結果…

(やっぱりこの人何がしたいのか分からないで苦手だ…)

光夜に対して100%善意を持って接しているがその気持ちは光夜に届いた事はない。

11話 石上優は逃げられない

「生徒会を辞めたいんです…。」

そこは生徒会室。会長の白銀と会計の石上が生徒会室にいた。そして石上優は…生徒会を辞めたがつていた。

「マジで勘弁してくれ！生徒会の仕事はお前と光夜でもっているんだ！しかも光夜はたまに長期間いなくなる時がある！お前が辞めたらマジで生徒会が破綻してしまう！この通り！」

白銀は机に頭をつけて懇願した。

「会長と光夜にはすぐくお世話になったんですがこのままだと…僕殺されると思うんです…四宮先輩に」

「お前それ絶対光夜に言うなよ」

「僕は自殺志願者じゃないので…。だから今こうして会長に相談してるんです」

白銀も石上も、光夜の目の前でかぐやの悪口を言えばどうなるか、しつかりと身に染みていた。そして白銀にとってかぐやは失恋相手。あまりかぐやに関する話はしたくなかった。

「（だが石上を失う訳にはいかない！）」

「それで、何があったのか言ってみろ」

く回想く

それは数日前のある日、場所は生徒会室。

「ふふっ。今日も光夜とはよく話せましたわね。そろそろ私の事を一人の女性として見るのも時間の問題でしょう…。しかし眞妃さんと最近仲がいいですね…。四条は四宮の力を使っても簡単には潰せません…」

生徒会室に一人といった状況でかぐやは安心して一人言を零していた。これは四宮の内情を知りたい人間にとっては聞き逃せないもの。かぐやがついっかき口にしてしまったのも、生徒会という居場所に安らぎを感じているからである。

「え…」

しかし間の悪い事で有名なのは石上優。彼は生徒会室の扉の外で偶然その言葉を聞いてしまった。

「すぐに逃げないと！」

石上に四宮家の内情を探る気など毛頭ない。そしてこの事をかぐやに知られば石上が酷い目に遭わせられるのは火を見るより明らかである。彼はすぐにその場を立ち去ろうとする。しかし…

「あ…」

しかし石上優という人間は間が悪いと同時に運も悪い。生徒会室を離れようとした際、彼の携帯電話が鳴る。後で知った事だがこれは迷惑メールを受信した着信音であった。石上の人生で一番迷惑メールによって迷惑を被った瞬間であった。

「今の話、聞いてましたか？」

「…はっ」

かぐやの目はまるで獲物を狙う獰猛な肉食獣のような目をしており、石上に抵抗も、そして自衛のための嘘も許さなかった。

「この事は秘密です。いいですね？」

それは最早許可を求めるものではなく命令であった。石上は首を縦に振るのみしか生き延びる道はない。かぐやは光夜への想いを自覚し、攻略を開始していたがやはり根底にあるのは「恋愛は戦、好きになった方が負け」なのである。他のライバルに対して横入りを許さぬよう、先に自分の想いを宣言するような戦術も存在するが、それはかぐやの望むものではなかった。

く回想終了く

「口止めされてるので詳しいところまでは言えません」

白銀に相談すればもしかすれば石上の命は助かったかもしれない。しかし石上にかぐやに植え付けられた恐怖を乗り越える強さなど持ち合わせてはいなかった。

「そ、そうか…」

そう言われてしまえば白銀もそれ以上追求する事はできない。石上は生徒会を辞める意思を伝え、副会長が戻ってくるまでに逃げようと生徒会室を出た。だが…

「石上君」

「ッ！」

扉の向こうにいたかぐやから、やはり石上は逃げきれないのである。

「あの件、黙っててもらえて嬉しいです。口が堅いのは美德ですよ。もし喋ってたら…どうなっていたでしょうか？」

石上は顔を青くさせる。

「それと… 光夜はあなたの事を大切な友人だと思っています。石上君が生徒会にいる事が、同じ学年の同性の友人が同じ生徒会にいる事は光夜にとってはずごく大きな事です。ですので… もう生徒会を辞めるだなんて言わないでくださいね」

「(この人… もしかして最初から聞いてたんじゃ…:)」

それはまるで扉の向こうから生徒会室での話を聞いていた自分への意趣返しのようなもので… かぐやへの恐怖から生徒会を辞めたかと思っただが、かぐやへの恐怖からそれは不可能となった。

本日の勝敗、石上の負け

これはかぐやが石上と白銀の会話を初めから扉の向こうで聞くより少し前、

「(あれは!:)」

かぐやが生徒会室に向かう途中、聞き慣れた男女の会話が聞こえたのでかぐやは柱の影に身を潜めて盗み聞く。

「で、真妃さんは翼先輩の事が好きなんですよね？」

「な! ベ、別に好きじゃないわよ!」

「本当は?」

「本当に好きじゃないわよ!」

一向に認めない真妃に対して光夜はジト目を向ける。そして…

「好き、なんですよね?」

「うん…」

眞妃は顔を赤らめて頷いた。

「(どこどころか光夜達の話が聞こえないけど随分と楽しそうねえ？でもこれ以上近づいたら気づかれるわ！)」

かぐやは会話の詳細までは聞き取れなかったが二人が親密に会話をしているという事実だけで激しい憎悪を眞妃に向けていた。

そして光夜達が生徒会室に近づき、かぐやにも二人の話が聞こえるようになる。

「それで？ 光夜は生徒会はどうなの？」

「姉さんも御行先輩も千花もみんないい人だからね。そして石上も同性で同い年の彼がいるから結構楽つてのものもあるかな。気は使わないかもしれないけどやっぱり学年の話とかだについていけないからね」

この話を聞いた後、生徒会室前で石上が生徒会を辞めようとしていたため、かぐやは本気で動いたのだった。

「そういえば眞妃さん」

「何よ、光夜」

「恋愛ならすぐく頼れる人がいるから紹介しますよ」

光夜の告白騒動によってかぐやは光夜に白銀の意見が間違いであると指摘する事を忘れていた。そう、今でも光夜の頭の中での恋愛マスターは白銀なのである。

こうして光夜の手によって恋愛マスター(笑)と失恋傷心者(いや、それはどっちもか)が引き合わされる事になるのは数日後の話である。

12話 四宮かぐやは引き出したい

「あなたの前に動物用の檻があります！ その中に猫は何匹いますか？」

唐突に藤原千花はそう尋ねる。生徒会室に居るのは光夜とかぐやと藤原のみ。石上は生徒会に残る事を白銀に伝えていたが、光夜とかぐやには決して聞かれないうようにするために生徒会室とは離れた場所で会話している。

「いきなりどうしたんだい千花？」

「心理テストですよ光夜君！ 図書館から借りてきたんです！ この質問に答えるだけで光夜君の深層心理がくつきりと分かるんですよ！」

心理テスト、それはバーナム効果を基にするものだが娯楽として、話題としては非常に楽しめるものである。

「それで？ 何匹でしたか？」

かぐやは二人に背を向けながらもその会話の一言一句を聞き逃さないように耳を澄ませていた。光夜は特に何も考えずに素直に答える。

「うーん… 三匹くらいかな？」

「普通すぎて面白くない回答ですね。その数はあなたが欲しい子どもの数みたいです。九匹とか多かったですら面白かったですけどねー」

「いや、九人とか多すぎて流石にそんな人はいないよ千花」

白銀、この場にはいないのは賢い選択である。光夜は結婚の事など考えた事もなく、その回答が自分の本心に合致しているのかを確かめる手段はなかった。

「(三人！ 上の子は男の子がいいわね！ 次の子は女の子が！ X染色体とY染色体の特性の違いを利用すれば難しい話ではないわ！)」

かぐやは一人、妄想の世界へと旅立った。その顔がにやけてとんでもない事になっているが、二人に背を向けていたので顔を見られる事はなかった。

「じゃあ次の問題いきますよー！」

貴方は今、薄暗い道を歩いていきます。その時、後ろから肩を叩かれました。その人は誰ですか？」

「薄暗い道… 一体何を暗示しているのでしょうか？」

かぐやは何も分からないような発言をしたが…

「(きましたね！ 47ページ目の2問目！ その答えは… 好きな人を暗示している！)」

嘘である！ かぐやは藤原の事を本人以上に理解している。図書館にこの本が入荷する前からこうなる事を予想しており、既にかぐやはこの本を完全に暗記している。

「(この問いで私が光夜と答えれば！ きつと光夜は私の事を意識するはずだわ！)」

毎度の事ながらこれもかぐやの仕込みである。かぐやの目的は光夜に自分が異性だと意識させる事。今回の心理テストもそのために利用しようと考えている。好きな人、という問いで自分の名前を言われれば嫌でも光夜は自分の事を意識するだろうと彼女は考えた。

「私は——」

「姉さんかな。千花、姉さんが見えたよ」

が、かぐやは答える前に光夜に先を越されてしまう。

「(え!?! それってやっぱり光夜は私の事…！)」

「私も…」

光夜の回答に頬を染めながらも、私も光夜でしたよと答えるつもりだったができなかつた。そう、彼女は気づいてしまったのだ。

「(これってまるで告白みたいじゃない!)」

策士策に溺れる。心理テストの答えを知らなくてもかぐやは間違いないなく光夜と答えただろう。そしてその答えを知らなければ何も恥ずかしがる事なくかぐやは思惑通り答える事ができた。

だが、かぐやは既に答えを知っている。覚悟を決めたとはいえやはり、かぐやはかぐやなのである。

「わ、私は藤原さんでしたよ…」

答えを知っていたためにかぐやは自滅した。

「答えはあなたが好きな人です！」

「まあ合ってるね」

光夜は好きな人、を恋愛ではなく親愛であると解釈した。かぐやの狙いはついに完全に失敗したのである。

「では次の問題です！ 私も答えたいのでネットで探しますね！」

これによってかぐやのアドバンテージは完全に消滅した。だが先ほど答えを知ったが故に失敗したかぐやはどこか安堵の表情を浮かべていた。

「じゃあいってきますよ！」

無人島にヤシの木が一本あります。そのヤシの木の下には何個の実が落ちていますか？」

「(まるで答えが読めない！ …… 素直に答えるしかないですね…)」

「私は実は何も落ちてなかったですね」

「あ！ かぐやさんもですか？ 私も0個でした！」

かぐやと藤原の答えは一致した。残る回答者は光夜だけである。

「うーん… 自分は一個かな。一個だけ落ちてた」

光夜だけがかぐやと藤原とは回答が異なった。

「じゃあ答えを見てみますね〜！ えっと答えは… あなたの過去の恋愛回数のおようです！ 光夜君〜既に初恋は済ませているようですね〜」

ニマリと笑った顔で藤原は光夜を見た。藤原は初恋をまだした事がないため0個。そしてかぐやは初恋はしているが当然それは現在の恋。過去の恋愛ではないため藤原と同じく0個。では光夜は一体何なのか？

「(え…。。 そんな… 光夜は一体誰を…)」

かぐやは絶望という表情を見せた。

「いや、全く身に覚えがないんだけど。そもそも人を好きになった事ないし。所詮どこまでいったところで心理テストだからね。あまり真に受けないですよ」

藤原に揶揄われても光夜は何一つ動揺しないでそう答えた。彼が

嘘をついてる様子はなかった。

「ま、それもそうですね。じゃあ次の問題いきますよー」
その後も心理テストは続いて、かぐやも策略なしに楽しんだ。

……
心理テストは当たっている。

13話 大いなる誤解

白銀圭は中等部より秀知院学園に進学した外部生。所謂混院生である。そしてこの学校では初等部からの生え抜きの純院生ではない者を見下す風潮があった。今でこそ彼女は総理大臣の孫娘達と友達となったり、学問などで地位を築いたが入学してからすぐはそうではなかった。

「あ、あの…」

「ごめんなさいね。私、お父様から下々の者とは関わるなど言われてますの。類は友を呼ぶと言いますの？ お友達は慎重に選びたいのです」

まだ自我も対して発達していない中学生。学園生活を送るのに一人ではあまりにも辛すぎる。圭は小学校のクラス替えの時のように隣の席の女子生徒に話しかけたが… ぞんざいに扱われてしまった。未だ入学から数日も経っていないが、圭は早くも入る学校を間違えたと感じ始めていた。

そんな彼女はやはり遺伝なのだろうか。同じ状況に遭遇した兄のように校舎の隅の方へと向かった。そして…

「あれ、圭ちゃん？」

高等部に進学した兄と中等部の男子生徒と遭遇したのである。

「初めまして、妹の圭です」

「こちらこそ。伏見光夜です」

圭とその男子生徒、光夜はお互いに自己紹介を交わした。圭からしてみれば兄の御行と光夜は非常に親しくしており当然名前も知り合っていると思えば苗字は省いた。尤も光夜と御行はまだお互いの名前を知らない。光夜にとつて圭が白銀家で初めて名前を知った人間であった。

「Kさんは1年生？」

光夜は別にふざけている訳ではない。ただ、自己紹介は普通フルネームで答える事。圭が光夜が御行の名前を知っていると勘違いし

た事。日本語の残酷さと言うべきか、彼女の名前の圭とアルファベットのKが同じ発音であった事などのいくつかの勘違いが重なってしまい、光夜は錯誤してしまったのである。目の前の少女は自分の名前を名乗りたくなくイニシャルを使ったのだと。つまり…

「変わった人だなあ」

圭は光夜から変人認定を受けてしまったのである。

「圭ちゃんは学校どうだ？」

「(圭ちゃんの前でいつもの話ができない!)」

「別に。おに… 兄さんには関係ないでしょ」

「(お兄の前でこんな事言えない!)」

なんだかんだで似たもの兄妹なのである。お互いがお互いに迷惑をかけたたくない。心配をかけたたくないと思うお年頃なのである。光夜とはいっても純院差別の愚痴などを話しているがその話題はあまり白銀はしたくなかった。奇しくも二人の悩みは似たようなものであったのだが。

「私、次の授業があるから。失礼します」

戦略的撤退。圭は光夜に一礼してからその場を立ち去った。同時に二度とあの場には行かない事を決意した。その後、光夜と御行は残り数分ではあったが予鈴が鳴るまで再び話し続けた。

大半の純院生が混院生にとる態度は無視である。人間、興味の反対は無関心だという研究もあるようにそもそも無いものとして扱うのだ。だがここで大半と言った理由、つまり実際に差別言動をとる純院生も少数ながら存在するのである。その様子も当然大半の純院生は黙殺する。

「ねえ、なんで入学したの？」

「純院に囲まれてポツンとして… 恥ずかしくないの？」

「そのメンタルだけは誇ってもいいんじゃない？」

敷地の隅から玄関に戻ってきた圭にかけられた心無い言葉。ケラケラとまるで見せ物かのように、そして本人に聴こえるように中傷する純院生の女子生徒達。直接的な行動に出ず、影から、陰湿な手段に

訴える部分は流石金持ちの人間が集まる秀知院であると言わざるを得ないだろう。圭は何も反論せずに教室へと向かう。

その様子がこの女子生徒達にはお気に召さなかったようである。

「ねえ、あなたに言ってるんだけど。何？ 無視してお高くとまってるつもり？」

女子生徒は圭の進路を塞ぐ。小学生がやる通せんぼである。何人かの純院生はそれを見ていたが我関せずで立ち去って行った。リスク回避の処世術は一流のものを子どもの頃からそれぞれの親によって仕込まれている。

「な、なんで……」

圭は初めて直接的な手段に晒された事で涙目になる。

「純院生はそんなに偉いのか？」

後ろからかけられた言葉は先ほどまで圭の兄と話していた男子生徒のものだった。

まだ秀知院に来たばかりの圭は分からなかったが伏見光夜とは中等部一年からも有名なのである。純院生なら特に。

「いや……その……」

氷のように冷たい眼差しを向けられて先ほどまでの威勢はどこにいったのか女子生徒達はただ俯くだけである。

「今年も内部進学最低点数よりも外部進学最低点数の方が高い。君達が学年の中でどれだけの順位を誇ってるのかは分からないが……半分以上に余裕で入るほどでなければ大半の外部進学者よりも学力は下だろうね。勿論学力が全てじゃないけど何か劣ってる部分がある相手に対してよく優越感を抱けるなど思うよ」

純院混院の是非ではなく、純院生の大半にはそもそも混院生を蔑視する資格すらないという事を光夜は淡々と述べる。

「……」

圭はその様子を見てただ人として憧れた。相対しただけで相手を萎縮させてしまうほどの実力の持ち主。圭は、自分にはないその実力に強い憧憬と自らもそうなりたいとして光夜を目標に定めた。

「あ、そうだKさん。1年生にそんなつまらない価値観持ってない人、

知ってるから後で紹介するよ」

光夜は藤原家とも親しい。藤原千花の妹の三女、藤原萌葉の事も知っていた。… あらゆる意味で。が、変人同士ならうまくやれるだろうと完全な善意で萌葉を圭に紹介した。

それから光夜が長期欠席したり、高等部進学などで二人の再会の機会はなかった。

「失礼致します」

白銀圭は二年生に進級し、中等部の生徒会に所属するようになった。そして今日はいくつかの書類を高等部の生徒会に持っていく事になった。圭はその、誰もが嫌がるであろう作業に自ら立候補した。兄が生徒会長を務めてはいるが、理由はそこにはない。自分を助けてくれて、そして友人まで紹介してくれた憧れの恩人にお礼を言うため。

伏見光夜の名前はあまりに有名で特に調べなくても彼が高等部の生徒会に所属している事は分かっていた。彼女は意を決して扉を開ける。

「(いた!)」

目の前に目的の人物がいた事を確認したが、逸る気持ちを抑えて冷静に声を出す。

「あ、Kさん」

「光夜、知ってるのか?」

「御行先輩の妹さんだよ」

生徒会室に残っていたのは光夜と石上。生徒会室に現れた来訪者の説明をざっくりと光夜はする。

「覚えていてくれて嬉しいです。そちらの方は初めましてでしたね。中等部生徒会会計の白銀圭です。本日は生徒総会の配布資料のチェックを頂きに参りました」

「(まあ忘れる方が難しいからね)」

依然、光夜の圭への誤解は解けていない。

「資料のチェックなら石上の方が向いてるかな。石上、頼める?」

「当然」

石上に任せたが光夜も投げ出す訳ではない。石上の後ろからきちんと書類に目を通している。怠惰の天才と呼ばれる光夜も学習しなければ当然知識は身に付かない訳で。事務処理に関しては石上に一日の長がある。

「(石上はやっぱりすごいなあ)」

次々と改善点を洗う友人の姿を見て光夜は本心からそう思う。自分の会社に欲しい人材である。もし余裕があるのなら協力して欲しいとも思っている。間違っても雇うわけではない。光夜はプライベートとビジネスを完全に分けて考えているがそれ以上に、雇用者と被雇用者の関係になれば否が応でも上下関係が発生してしまう。大切な友人とは対等でありたいと、そう思えるほど石上は光夜にとって大切な友人なのである。

そして熱心に石上からの指摘を聞く圭を見て改めて、

「(やっぱりそんな変人には見えないんだよなあ)」

光夜、誤解を解く鍵を手にする。

「(千花みたいに明らかにヤバい人じゃないんだよなあ)」

そしてこの場にまた新たな来訪者が現れる。

「遅くなりましたし… あっ圭ちゃん！」

藤原千花
明らかにヤバい人の登場である。

「こんにち殺法！」

「あっ！…こんにち殺法返し！」

「(でも萌葉みたいにしばらく話さないとヤバい人かどうか分からない人もいるからなあ。Kさんは後者だったんだろ)」

光夜は誤解を解く鍵を手放した。

「どうしたの圭ちゃん？ 遊びに来てくれたの？」

「ううん。今日はお仕事だよ」

二人は知り合いだったようで楽しく談笑している。が、まだ途中だったようで圭は石上の方へと戻っていく。

「(Kさんと千花は結構仲がいいように見えるね。萌葉繋がりがな？

でも千花に対しても自分の名前を明かしてないんだね)」

「ねえ千花。ちよつといい？」

「ん？ 何ですか光夜君？」

圭と石上の邪魔をしないようにというジェスチャーをしながら光夜は千花を彼女達とは対角線の位置にまで移動させてから尋ねる。多少の同情も含めて。

「Kさんの名前、千花もまだ知らないんだね」

「何言ってるんですか光夜君、頭もげたんですか？」

突然の罵声！ 思わぬところから衝撃を受け光夜は一瞬頭が真つ白になる。そしてあまりの衝撃に走馬灯が走り出す。光夜の脳内には先ほど経験した事が、交わした会話が映画のようにして映し出されている。

「（これは… Kさんが生徒会室に来た時の事か…）」

『中等部生徒会会計の白銀圭です。本日は生徒総会の配布資料のチェックを頂きに参りました』

「……………」

「（アレ？）」

そして更に走馬灯は続く。それは圭が持ってきた資料を石上の後ろから見ていた時。資料作成者欄のところには…

『白銀圭』

と書かれていた。人間は目に映るもの全てを見ている訳ではない。脳が意識の外に放り投げた情報は網膜に映っても脳が認識しないのである。が、光夜はKが名前かも？ という疑問を抱いた事によってその映像を見る事ができるようになって…

「（ああああああああああああああああ！！）」

誤解に気づいたのである。

「… 白銀圭さんだよね？」

千花シヨックから帰ってきた光夜は石上と圭の会話が終わった頃合いを見計らってそう尋ねる。資料作成者欄の『白銀圭』と書かれた部分を指して。

「えっ、あっ、はい。そうですけど…」

「すみませんでした!」

その一言を聞いた瞬間、光夜は途轍もない勢いで頭を下げた。

「(君をやバい人だなんて誤解したばかりに藤原萌葉なんてヤバい人を君に紹介してしまった!)」

藤原萌葉。光夜からガチでヤバい人認定されている。

「その… 萌葉とは上手くやってる?」

「はい! 大切な友達です! 紹介してくれてありがとうございます! ました先輩!」

「えっ! 萌葉と仲良くできてるの?!」

「(凄いいこの子… めっちゃいい子じゃん!)」

「ちよつとー! 光夜君どういう事ですか?! 人の妹をどちやくそやべー奴みたいに言わないで下さい!」

藤原の魂の訴えを光夜は黙殺した。

「それと…。去年の入学式頃の時、助けてくれてありがとうございます! しました! 中々お礼も言えてなくてごめんなさい!」

「い、いいよ! 気にしないで!」

「(というよりあの時は圭さんの事をヤバい人と思ってちよつと避ける節があつたからな…)」

光夜。自らの勘違いによる行動によって目の前の少女に罪悪感を持たせたのかと不安になる。

「ちゃんと圭さんのお礼は受け取ったから」

「圭、でいいです先輩。年上の先輩ですし敬語は使わないで下さい」

「分かった圭。あ、じゃあそろそろ時間も遅いし中等部の方まで送っていくよ」

「えっ! じゃあその… お願いします」

自分の役目は終わったとして生徒会室の隅で密閉型ヘッドフォンをしてゲームをする石上と、妹の悪口を言われた! と怒る藤原を置いて光夜は圭を送るために生徒会室を出て行った。

「… 光夜は年下の子が好みなのかしら… !!」

光夜が圭と楽しそうにして生徒会室を出て行った様子をたまたま見た姉は顔面蒼白で急激に現れたダークホース(双方今のところ恋愛

感情は抱いていない)に戦慄していた。

14話 白銀御行は吐き出したい

「早坂ー！」

「何ですかかぐや様。それからあまり大きな声を出すと光夜様に聞こえますよ」

「うぐっ」

従者の指摘を受け、押し黙るかぐや。が、廊下がバタバタとする音は聞こえない。

「(光夜には聞こえなかったみたいね)」

ホツとかぐやは息をつく。これからする話は光夜についての話であり、彼がいては話にならないからである。

「(最近、光夜の周りに仲のいい女狐が増えたわ。四条の娘に昨日の中学生)」

かぐやはその中学生が白銀の妹である事を知らない。

「早坂。もうあまり猶予はないの。光夜に異性として認識されるためにはどうすればいいのかしら」

「普通に告白したらいいと思いますけど」

「それじゃダメなの！ もし失敗したら今の関係さえ壊れてしまうかもしれないのよー！」

「(そして今告白しても関係が壊れてしまう未来しか想像できない！)」

かぐやは決意を固めた後で色々と頑張ったもののまだ全然自分が異性として見られていない事を自覚していた。

「そういうえばかぐや様。なんだかんだ言っただけで光夜様と二人でデートした事ないんじゃないですか？」

「えっ…… い、いやそのデートなんてまだ早いんじゃない」

「じゃあ私から光夜様を誘ってきますね」

「待って早坂ー！」

誘うにしても乙女のプライドがある。

「…… 私から…… 言ってきます」

「かぐや様……」

早坂は自らの主人の成長に感激していた。

「光夜、ちよつといいかしら」

ノックをし、返事が返ってきたため光夜の部屋に入るかぐや。顔は何もないよう平静を保ってはいるが手は抑えられない緊張で震えていた。

「明日、何か予定はあるかしら？　なければ行きたい場所があ…あるのだけど」

途中から緊張で頭が真っ白になるが、事前に何十回もシミュレーションを繰り返した事で反射的に最後まで言葉にする事に成功する。後は光夜の返事を待つだけだ。

「あ…ごめんかぐ姉。その日はちよつと用事あるんだよ…ごめん」

かぐやの決死の覚悟の誘いは失敗に終わってしまった。

「ちよつとその…痴情の絡れで」

「えっ…」

かぐやは石化を受けたかの如く固まってしまった。

「あ、すみませんお待たせしました真妃さん」

今日は以前約束した事を果たす日であった。だから光夜は最愛の姉の誘いも渋々断ったのだ。

「(先約は大事だしね)」

光夜は白銀を連れて待ち合わせの喫茶店に入店、先に席に座っていた真妃と合流した。

「あ、こちら知ってると思うけど生徒会長の白銀御行先輩。そして彼女が四条真妃先輩です」

「光夜。彼とはクラスが一緒だから知ってるわよ」

「あ、そうだったんですね。それはすみません。えっと今日は…恋愛百戦錬磨の御行先輩に恋愛で悩んでいる真妃先輩の事を聞いてもらって、何かアドバイスを頂けないかと」

光夜と眞妃が楽しく話す中…

「(あ、それアカン奴や…。前は咄嗟に思いついた壁ダアン！で何か乗り切ったが今度は同級生相手に乗り越えないといけないのか…。)」

身から出た錆。そして白銀は壁ダアンがきつかけで失恋したという嫌な記憶も思い出してしまった。

「私が好きな翼くんと渚は確かに付き合ってたけど…。でも学生時代の恋愛なんてすぐ終わるわ！最後に彼が私の隣にいてくれたら…。それでいいのよ…。」

後半、耐えきれずに涙目になったが眞妃は最後まで言い切った。

「翼くんとは結構いい感じだったの。このままいけばあと少して告白されたのよ！」

尚、翼氏は最初から柏木神狙いだったのでこの指摘は外れている。

「なのに！彼にあんな事を伝えたやつのせいであ！」

光夜、この時点で臆げながら何かを察した。

「あんな事？」

「壁ダアン！とかいう変な技よ！」

「!?」

「二人が付き合ったのはまだかん…。見守るとしてもそいつだけは許せないわ！光夜！白銀！一緒にそれが誰か探してくれるわよね?!」

二人はそのあまりの衝撃に眞妃が監視と言いかけた事にツツコミを入れる事すらできずにいた。

「……………」

光夜、白銀。共に押し黙るしかない。

「急に捲し立ててごめんなさい。そもそも二人に説明なしで壁ダアン！なんて言っても分からなかったわね。まあ所謂壁ドンのパクリだけ」

「「えっ」」

「(え…。御行先輩…。あれパクリだったの?)」

「(え…。あれ既にあつたの？俺の発明じゃなかったの?)」

眞妃の話聞いた二人はそれぞれ異なった理由であったが驚嘆していた。が、白銀にはそれよりも大きな課題がこの瞬間、新たに増えた。

「俺の発言で四条が……。だとしても今馬鹿正直に俺がやったと言ったら……」

四条は四宮の親戚である。何の拠り所もないような庶民の白銀など如何様にもされるだろう。

「それに俺を……恋愛マスターとして見てくれている光夜の期待を裏切る訳にもいかない」

そもそも自らの嘘を素直に打ち明ければいいのだが……白銀の思考はそちらには向かなかったようである。こうして三者がそれぞれの思惑を胸の内に抱きながら話は更に進んでいった。

「そーいや白銀も恋愛した事あるの?」

「当たり前だろ。俺は振られた事がない」

「さっきちよつと疑っちゃったけどやっぱり御行先輩は恋愛マスターだね!」

白銀の発言は嘘ではない。彼は数日前まで四宮かぐやに対して恋をしており、また告白した事もないため振られた事もないのも事実である。

深い尊敬も抱いている事によって白銀に対してチョロい光夜は、その発言を何も疑いもせずに受け入れた。白銀、光夜の期待を裏切る訳にはいかないというミツシヨン、クリア。

「さっきも言ったけど高校生の恋愛なんてお遊びよね? すぐに別れるよね?」

「大半はそうだろうな。まだ未熟な学生の間は相手をよく見る事ができない。付き合う内に相手の嫌な部分はどうしたって見えるだろう。その時にどう思うか、だろうな」

尚、この情報は白銀父が頼んでもないのに妹の圭もいる夕食時に話した事をそのまま言っているだけである。

「(ありがとう親父!)」

白銀は人生で初めて、下らない父親の妄言に感謝した。

一通りの話し合いも終了し、三人は解散した。が……

「……なんで光夜じゃなくて俺だけ……」

一旦別れた後、白銀は眞妃に誘われ二人でまた別のカフェに入ったのである。白銀の心中は穏やかでない。

「(やばいやばいやばい! もしかして壁ダアン! の事か?! 気づかれたか?! そうか……この後黒塗りの高級車とかに連れ込まれるんだろうな……親父……圭ちゃん……元気だな)」

白銀は死期を悟り、己の終焉を受け入れた。

「ちよつと、何つつ立つてるのよ。後ろの人の迷惑にもなってるわ。早く座りなさい」

「えっ、あ、ああ。すまない……」

が、予想に反して眞妃が怒ってるようには見えない白銀であった。

「(考えてみれば俺をどうにかするのならこんな人目がつく場所に誘う必要はないな)」

「で、どうしたんだ?」

テーブルに腰掛け、そして注文した飲み物が届いてから白銀は話を切り出した。

「あんた、光夜が恋愛マスターだ、って言ってたけど本当は違うんでしょ?」

「!?!」

「(バレた?! なぜだ?! 俺は何もヘマはしていない!)」

白銀は自分の事を客観的に見るこができていない。

「(おい! 四条はクラスメイトなんだぞ! 俺が恋愛の経験値もないう状態で恋愛マスターを自称して同級生の恋愛相談を受けていたなんて知れたら……クラス全員から……)」

可愛い事

「(四宮に言われるよりダメージデカすぎんだろ!)」

白銀、絶望のあまり顔が真っ青となる。

「ちよ、ちよつと待って！ 別にだからって私どうこうしようとかそんな事思つてないし！」

眞妃は白銀の顔面の色変わりから持たれた誤解を解消した。その言葉を受け、白銀の顔色に血色が戻ってくる。

「…ちなみにどこで気づいたんだ？」

「…失恋した人には同じ失恋者を嗅ぎ分ける能力が身についているのよ」

眞妃は虚空を見つめながらそう言った。

「で、白銀は一体誰が好きだったの？ 私だけ知られるのもおかしいから教えなさいよ」

「断る」

眞妃は自分と同じ失恋者である事から先ほどまでより白銀に対して多少親近感を抱いていた。自分と同じ失恋者ならば相手が誰かも知りたいのは当然の事である。

「(と言っても白銀とは学校でも話さないしあいつが誰と親しいのかも分からないわね….)」

今日、光夜に紹介されるまで彼と彼女の間には一切の接点がなかった。故に眞妃が出せる答えの選択肢と言えは…

「白銀、生徒会長よね。まさか叔母さまとか？ まああり得ないでしょうけど」

眞妃の想定した返ってくる答えは「お前、何言ってるんだよ」という笑いながらの否定であったが…

「……」

「えっ…嘘でしょ？」

俯く事しかできない白銀の姿を見て、全く適当に出した答えが正解である事を眞妃は悟った。

「でも御行もかなり難しい恋したわね。多分私より難易度激ムズよ」

そこまで本気で聞き出すつもりはなかったが眞妃は白銀が好きだった人を知ってしまった。そして知れば知るほど今の置かれた立場があまりにも自分と似ている。こんな苦しみは自分しか味わっていないだろうと思っていたところに来た初めての仲間。彼女が白銀を下の名前で呼ぶには十分だった。

「四宮の姫… あ、叔母さまの事ね。四宮の姫は弟好きって結構有名な話よ。光夜の方は聞かないけど」

少なくとも四宮とその親戚の間では有名な話であった。四宮内部の事を知らず、光夜が一方的に追放されたと思っている眞妃ですら知っている情報なのだから。

「で、御行はどうするの？ まだ叔母さまと光夜は付き合っていないしまだ手遅れだなんて事はないはずだけど」

眞妃と白銀の違いはそこにある。眞妃の場合は既に意中の相手が別の女性と交際に至っているのに対し、白銀は違う。尤も、かぐやが自分の事を好きではないという事。それから勘違いではあるが一度フラれてもいる。かぐやとの交際可能性が天文学的に低い確率である事は疑いようもないだろう。それに…

「最近考えて… 分からなくなっただ」

白銀は壁ダウン！ 騒動、そして羞恥淫騒動の後、自分の気持ちについてずっと考え込んでいた。妹の圭に気持ち悪いと言われるほどには。

「俺はこの学校で何か一つでも誇れるものを作りたかった。そしてそれは俺の場合… 勉強だった。当時の学年一位はアイツで… 当然四宮は俺の目標になった… 強く憧れた」

彼女のようにになりたい。自分もあのような人間に近づきたいと白銀は本気で思い、赤子が親の仕草から学ぶように、武芸者が達人の技を盗むように、かぐやの事を見続けていた。そしていつしかその気持ちか初恋なのではないかと気づいた。だが…

「あれが本当に恋だったのかも分からない…」

話し始めたのは去年の生徒会から。決して短くない時間だ。しかし2年生に進級して光夜が生徒会に加わって、かぐやはよく笑うよう

になった。

「知らなかった…。俺は四宮のあんな表情なんて今までに見た事もなかった」

それは思春期の、しかし年相応の悩みと言っているものだった。白銀も普段学校では虚勢を張っている。多少の無理をしたとしても。しかし眞妃の前ではなぜか本心から自らの言葉を紡ぐ事ができている。眞妃が白銀に親近感を抱いているのと同じように白銀もまた、眞妃の事を仲間だと思っていた。

15話 伏見光夜は取らせたい

期末テスト。それは一学期の学期末に行われる定期テストの事であり、これ乗り越えれば夏休みは目の前だ。学生はそれを楽しみにして期末テストへのモチベーションに繋げる。

そして定期テストと言えばおなじみ…

「伏見！ 今度のテスト本気出さないよ！」

伊井野ミコの襲来である。光夜はもう慣れたのか、それを軽く聞き流していた。今のところかぐやから何かを言われた訳もなく今回も特段テスト勉強をする気はない。今回のテストでも一位は伊井野が獲るだろう…。このままいけば。

秀知院の教師陣と1年生は光夜が本気を出せば光夜が、本気を出さなければ伊井野が学年一位を獲ると予想している。普通であればテストで全力を出さない光夜を注意するべきなのだが…。それでも彼は学年5位付近で安定しているため誰も文句を言う事はできない。

「そういえば…。そろそろ期末テストですね。勉強はなさってますか？」

場所は変わって生徒会室。この場にいるのは白銀、かぐや、藤原だけである。光夜はまだ伊井野に拘束されており、石上はテストがヤバいという理由で教師に呼び出されている。

「試験勉強なんて必要ない。そんなもの、普段から勉強していれば問題ない」

嘘である。この男、微塵もそのような事は考えていない。彼は莫大な勉強時間を費やす事で現在の地位を築き、そして保っている。が、今回。白銀を大きなピンチが襲っていた。

「(いつもよりモチベーションが上がらない…。！)」

白銀の勉学への大きなモチベーションはかぐやに勝つ事である。何でもできる天才のかぐやに勉学でも負ける訳にはいかない。勉学で負けては最後、白銀はついにかぐやと対等ではなくなってしまうから。好きな人であり目標でもあったかぐやに少しでも近づくといい

事がこれまでの白銀を支えてきた。

が、その目標は揺らいでいた。かぐやへの失恋。そして自分の気持ちについて考え続けた結果、自分がかぐやの事をどう思っているのかが分からなくなったのだ。今、白銀は最大の目標を失い過去最大のテストの危機に襲われていた。

「そうですね。テストは自分の実力を測る場です。無理をして本来より良い成績を取っても本来の自分は見えません。自然体で受けるのが良いかと」

嘘である。この女、本来より良い成績を取るために本気も本気である。もしこの場に光夜がいればその滑稽さに噴き出してしまうかもしれないくらいには出鱈目もいいところである。テスト期間中はかぐやは自室に籠りつきりであり同じ家で過ごしていてもあまり光夜と顔を合わせる機会もない。が、今回。かぐやを大きなピンチが襲っていた。

「(なんでこんなに集中できないのよー)」

かぐやは先日、光夜が痴情の絡れだと言って自分の誘いを断った事に動揺していた。もしかして光夜は誰かと恋愛しているのではないか?! と過呼吸にもなった。かぐやにとって勉強どころではなかったのである。

故に、椅子に座って問題集を広げたとしても一向に進まない。かぐやはテスト勉強に全くと言っていいほど入り込む事ができないでいる。今、かぐやは集中力を失い過去最大のテストの危機に襲われていた。

「勉強量が必ずしも成績に反映するとは限りません。いっそ勉強しないという選択もありますよ」

言うまでもなく嘘である。かぐやは本気を出しても勉強で白銀に勝てていない。これが彼女のプライドを大きく傷つけていた。また前回から最愛の弟が高等部に進学している。これ以上彼の前で情けない姿を晒したくない。白銀にさえ勝てば彼女の学年一位は堅い。しかし自分があまり調子が良くないため白銀の調子を落とすよう画策していた。

「そうだな。俺も試験前は三日ほど座禅を組んで精神統一をしている。これが効くんだわ」

こちらも嘘である。白銀はかぐやへの気持ちが変わったとしても彼女が自分の勉学のライバルである事には変わらないのだ。自分が外部入学で生徒会長をやっている以上、学年一位はどうしても手放せない。かぐやにさえ勝てば学年一位は堅い。しかし自分があまり調子が良くないためかぐやの調子を落とすよう画策していた。

藤原が二人の言う事を鵜呑みにして勉強しない事を決意するも、二人にその間違いを指摘する余裕などなかった。

生徒会室で頭脳戦が繰り広げられてる中、光夜は生徒会室に向かうため廊下を歩いていった。

「（ちよつと遅れちゃったな）」

伊井野の拘束が思いの外長かったのである。彼は職員室を通過し、生徒会室に向かうつもりであった。

「石上、分かっているのか？ これ以上赤点取ると進級も怪しいんだぞ」その職員室から石上と教師の会話が聞こえたため光夜は足を止め、その会話を盗み聞いた。彼は石上が呼び出され教師と話す光景に良くない印象を覚えていた。

「折角進学できたんだ。それを棒に振るな」

が、彼の心配は杞憂に終わり、その教師は正当な事を石上に伝えているだけであった。

「とにかく、次の期末テストは絶対に落とすんじゃないぞ。分かったな？」

赤点。秀智院では平均点の半分を下回れば赤点と見做される。秀智院に救済処置はない。科目で赤点を二回取れば欠点と見做され、必修科目を落とせば即座に留年となる。成績が厳しい生徒には特別保護者会（通称トクホ）が開かれ、石上はその常連参加者であった。石上は既に三科目で赤点を取っており、次に赤点を取れば留年は確定である。

「失礼しました」

石上と教師の話も終わり、石上は職員室を出る。そして…

「うわっ！ 光夜か。ビックリした」

光夜が職員室の前で仁王立ちしていた。

「話、聞いてたのか？」

石上の問いに首を縦に振る光夜。

「…僕は赤点を取って留年してもいいかと思って」

石上優は特に学園で被害を受けているという訳ではない。別の世界線とは違って下駄箱に何か入れられたりといじめのような事をされたりはしていない。学園生活に大きな不安は抱いていない。しかし去年の冬に起こした大友京子を巡る一連の事件で自分が何もできなかった事から自信を喪失していた。

——僕なんかがいくら頑張ったところで赤点回避するなんて無理

やる前から石上優は諦観していた。そしてその言葉を聞いた光夜は内心穏やかではなかった。仮に石上が留年して学年が変わったとしても光夜は石上に会いにくだろう。それだけで彼らの絆が切れる事はない。しかし留年した人間は全校生徒の代表たる生徒会にはおそらく入れない。

絆は切れないとは言ったが関わる頻度は格段に減るだろう。石上優とは光夜が同学年で唯一、友達だと認めた同性である。

「勉強なら教えるから」

「いやいいよ。それに光夜の手を煩わせるからね」

そう言ってから石上は光夜に背を向けてから帰宅の準備をする。石上は今日発売のゲームを早くプレイするために既に今日の分の仕事を終わらせている。そんな彼の関心を買うためには…

「(正直モノで釣るとかあまりしたくなかったけど…)」

「石上、今度のテストで赤点がゼロだったら今、弊社で今度サービスを開始するゲームのベータテストに参加する事ができると言ったら？」

石上の足が止まった。

「それってあのフルダイブ式のあれか…？」

「そうだ」

「よし光夜。すぐに勉強を始めよう」

ゲームが好きな者はゲームによって動く。こうして石上は光夜と共に赤点回避を目指すのであった。

そしてついにテストを迎えた。かぐやと御行は幾度となく頭脳戦を繰り広げたが結局何も益はなく藤原の成績を落としただけであった。光夜と石上は毎日放課後に勉強をしてきた。

「調子はどうだ？ 優」

「大丈夫」

連日の勉強会を通して光夜の石上への呼び方が変わった。生徒会メンバーが伏見光夜を光夜と、そして石上優を石上と呼んでいたため自然と二人の呼び方もそうなっていたのだが、光夜だけが下の名前で呼ぶのもどうなのか？ と思つて光夜が優と呼び始めた。尚、石上は隠していたが嬉しそうにしていた。

激励（？）も終わり光夜も席に着く。

「（優も本気でやるからね。今回は見直しかかも本気でやろう）」

石上も赤点を回避するために本気でテストに取り組む。それならば友人として光夜も本気でテストに取り組むべきだろう、そう考え最初の科目、生物のテストが始まった。

テストが終わつて、全ての答案が返却された。そして学年順位も張り出された。

「光夜、ありがとう」

石上は赤点を余裕で回避した。順位も97位と良くも悪くもないが前回は197位である事を考えれば大躍進したと言えるだろう。そして光夜は…

「2位か。やっぱり本気で挑まないで伊井野には勝てないね」

一年生の順位は一位伊井野ミコ、二位伏見光夜であった。試験中、光夜は本気で取り組んだ。試験の時間が許す限り見直しも行った。しかし2位。普段本気でない時には取らない順位ではあったがやはり試験期間中から本気で取り組まなければ伊井野には勝てないのだ

ろう。これで伊井野は中等部に光夜に負けてからまた連勝記録を伸ばした事になる。

そして二年生の順位では大波乱があった。白銀がついに首位を陥落させてしまったのだ。二年生の学年一位には別の人物の名前が書かれていた。しかしそれはかぐやではない。

「まあ、当然ね」

一位 四条真妃 二位 白銀御行 三位 四宮かぐや

これが今回の期末テストの二年生の順位であった。白銀とかぐやがそれぞれ個人的な事情で成績を落とす中、真妃は光夜と話した事で、そして白銀という同志を得た事でこれまでになく精神的に落ち着いてテストを迎える事ができた。真妃の精神は乱れているのがデフォルトである。それが落ち着きを取り戻した結果・・・学年一位を獲得に至ったのである。

「(かぐ姉が三位かあ・・・)」

姉の見た事もない順位。自宅で慰めないと早坂の胃の穴がまた増える事になるなど光夜は思った。

「伏見！」

試験の結果が張り出されてる場で光夜は話しかけられる。振り返ればそこには今回も学年一位の伊井野が。今回は割と本気で挑んだ。それでも伊井野に負けた。光夜は素直に・・・

「おめでとう。また——」

「なんで本気を出さなかったのよ！」

伊井野に言葉を遮られてしまう。

「いや、今回は割と——」

「あんたが本気出したんなら私が一位な訳がないでしょうが！」

伊井野ミコにとって、光夜が本気を出したのなら必ずしも学年一位を獲得というのは当たり前の価値観であった。自分より左に彼の名前がある時点で彼女からしてみれば光夜は本気でテストに挑んでないのである。本気の光夜に勝ちたいという思いとは矛盾するものだが、人の感情とは必ずしも合理的ではないのだ。

「……………」

そして光夜も試験は真面目に取り組んだとはいえ、試験期間中まで本気という訳ではなかったため反論する事ができなかつた。自分に勝ったくせにキーキーと吠える伊井野を見て光夜は虚空を睨む。

「勘弁してくれ……」

16話 怠惰の天才は隠したい

「じゃ、社長！ 今日こそここまで差し詰まったものは……」

そこは東京に置かれた伏見の本部。まだ一学期が終了した訳ではなく学校もまだあったが光夜はここに足を運んでいた。

「まだ社長は高校生なんですから。学生らしく……は難しいかもしれませんが。平時は私達だけでまわせますし」

「ありがとう石川さん。でも夏休み入って数日はちよつと予定が入つてね。その分を前倒しでやらないといけないんだ。勿論何か緊急性の高い案件だったら帰ってくるけどね」

石川と呼ばれた男、二十代という若さながら光夜の仕事面での補佐、並びに多方面に展開している事業の管理の責任者でもあるこの男は主の学生らしからぬ生活が心配であった。

「それに自分で望んでやってる事だからさ」

光夜は度々怠惰な男であると評されるがそれは生来の気質ではない。育つた環境が自然とそうさせてしまったのだ。彼がまだ四宮光夜であった時は今とは正反対で彼は怠惰とは程遠い好奇心旺盛な少年であった。

「して、その予定とは？」

石川は職務に戻り、書類を片付けながら尋ねる。

「夏休み入ってすぐにね、生徒会のみんなで旅行に行くんだ」

特に隠す必要もない光夜はその問いに答える。

「生徒会……という姉君も？」

「勿論、姉さんもだよ」

『伏見』の中でも上役に近い石川は当然光夜の旧姓も会社設立の経緯についても知っている。

「で、行き先は？」

「青森県の恐山」

「恐山?!」

当然の事ながら聞き返してしまう。少なくとも学生旅行の行き先としてマイナーな場所である事に間違いはない。藤原が提案し、光夜

が乗った事で決定したこの行程。光夜と藤原の二人旅など認められないかぐやは当然参加を表明し、また当時かぐやの事が好きであった白銀も便乗した。後にこの話を聞いた石上は行き先にこそドン引きしていたが生徒会メンバーで思い出を作りたいという理由で参加する事となった。

「(でもかぐ姉すごく張り切ってたなあ)」

かぐやは怖いものが嫌いなので恐山にはあまり行きたくなかったがしかし光夜がこう考えたのにも理由がある。どう考えても藤原に旅行の計画は任せられないと考えた光夜は、言い出しつぺな事もあり計画も準備も自分で行うつもりだった。しかし何も言っていないのかぐやから「宿の手配は私に任せて頂戴」と。光夜はこれを……

「(なんだかんだでかぐ姉も楽しみにしてくれているんだね!)」

と好意的に捉えた。尚、厳密に言えば外れているがかぐやが楽しみにしている事自体は当たっている。

「(あ、あともう一人女子を誘って、とも言われてたね)」

言うまでもなくこれもかぐやの策略である。光夜の女友達、交友関係を完全に把握するためという目的も含まれている。

「(って言っても旅行に誘える女子なんて二人しかいないよね……)」

早坂は近侍という立場が生徒会メンバーにバレないようにするため選択肢からは外れる。尤も、光夜とかぐやを守るために尾行という形で参加するのだが。

つまり光夜に残された選択肢は伊井野ミコか四条真妃しかない。

「(伊井野は却下だな。あいつ、異性で旅行とか聞いたら鼓膜が破ける勢いでキーキー騒ぎそうだし)」

後日……

「あ、真妃さん。ちよつといいですか?」

「光夜じゃない。どうしたの? 突然」

昼休み。いつものように中庭でイチヤイチャする柏木と田沼翼の様子を物陰に隠れ、涙を浮かべながら監視……観察していた真妃を

光夜は捕まえる。

「夏休みに入つてすぐに生徒会の皆で旅行に行くんですが……眞妃さんも来ませんか？」

「ふうん。私を誘うのね。殊勝な心がけじゃない。で、どこに行くの？」

「恐山です」

「行くわけないじゃない！」

かぐやと同様、怖いのが苦手な眞妃は条件反射で反対する。

「……ちよつと待つて光夜。生徒会のメンバーつて……おばさまも行くの？」

「勿論です」

「（え、待つて。おばさまは行くのに怖いから私は行かないつて……それつておばさまに負けたみたいになるじゃない！）」

尚、かぐやは恐山自体は依然として怖いと思つており、できる事なら行き先変わらないかなあと未だに本気で思つている。

「（生徒会メンバーつて事は御行も来てるのよね？ 光夜もいるし。夏休み入つたら相談とか気軽にできないわよね……）」

そこまで考えた上でふと、眞妃はイチャラブを繰り広げている柏木と田沼翼の方を見た。いつまでも未練たらしく見続けているが自分の想いが報われる事はきつとないのだと。同じ失恋者白銀御行を客観的に見た事で眞妃の心理には諦観が浮かんでいた。

そして眞妃と柏木は親友。それは想い人を取られたとて変わらぬ事。つまり眞妃は田沼翼との交際を半ば諦めた後でも自分の好きな人と親友がイチャイチャするところを近くで見なければならぬ。今、眞妃が最も欲しているのは……

——悟り——

「ねえ光夜。恐山つて修行場よね？」

「え？ そうですけど」

「行くわ」

「えっ？」

「だから！ 恐山行ってやる！ つて言つてるのよ！」

半ばヤケクソだった眞妃だが……しかしこれで光夜はかぐやからの指令を達成する事ができた。

「ようやく明日だね」

眞妃の参加も取り付け、そして残り少ない一学期を過ぎしていき、ついに終業式も終えた。既にかぐやは明日からの行程のために眠りにについているが光夜はまだ寝つけていない。遠足の前日の小学生のような微かな不安と、そして高揚感が今の光夜を支配している。

石上のように生徒会メンバーで出かけたいという理由だけでない。かぐやのように好きな人と旅行を楽しみたいという訳でもない。行き先が恐山でなくてもいいと考えた二人とは違う。しかし藤原のように軽い気持ちで恐山に行きたい訳でもない。

恐山。そこは死者と語り合える場所。

人間には理解もできないその奇跡に対して、「常識的に考えてあり得ない」とオカルト扱いして嘘だと断じる人もいる。が、光夜はそれに分類される人種ではなかった。常識など全く当てにならないと思っているからである。

太陽が地球の周りを回っている事が常識であるとされた時代もあったし、夫に先立たれた未亡人が夫を焼く火の中に飛び込む事が常識であり素晴らしいとされた地域もある。そう、常識とは時代や地域によって全く異なり、固定された意味や価値を持たないという事は歴史によって証明されている。

だから光夜は常識によって物事を否定しない。仮に嘘だとしてもそれは自分の目で直接見て判断すればいいだけの事。光夜にはそれをするだけの能力が備わっている。

それに我々がこの世界の理を完全に理解できている訳がない。ならば、我々の今の常識が追いつかないほどの現実が存在していたとしても何もおかしくはない。世界というのは広いのだ。

光夜には語り合いたい死者が存在する。それは……既に亡くなった両親だ。幼い時に亡くなった父には亡くなった真相を聞きたいし、母にはもう自分を心配する必要はないという事を伝えて安心さ

せたい。

——11年前。四宮本邸にて——

「それで？ 家が燃えたという事で家うちに上がり込んできたという訳か」

鋭い目つきを来訪者に向けるのは四宮家総帥の四宮雁庵。

「ご、ごめんね？ やっぱり迷惑だったかな？」

その視線には慣れており何も動じる事なく返すのは四宮蚩庵けいあん。年は離れているが雁庵の弟であり、四宮光夜の父でもある。

「いや… 迷惑ではない。またこの家に住むがいい」

蚩庵の代の兄弟は雁庵と蚩庵しかおらず蚩庵も次期当主候補であった。が、四宮蚩庵は四宮の人間らしくない人物であった。自らに雁庵ほどの能力がない事を認めており、また非情さを兼ね備えていたために四宮総帥を受け継ぐ事はできないと理解していた。故に当主候補を自ら辞退した。兄弟で無益な骨肉の争いを避けるために。

が、それでも四宮家中では蚩庵を推す声も存在した。能力が雁庵に及ばないと言っても十分すぎる実力は備えていたし、非情さがないという事は自分達が切り捨てられないという事だから。それを察知した蚩庵は最低でも雁庵が当主を相続し、確固たる地位を構築するまでは家を出るという決心をした。

家を出てから数年が経ち、隣に座っている四宮針月しづき（旧姓、伏見針月）と結婚し光夜という子どもまで授かった。が、先日。花火大会中の花火玉が留守中の自宅に落下し爆発、全焼するという嘘のような出来事があり兄である雁庵を頼って四宮本邸に足を運んだのである。

「で、そっちは… 光夜か」

「そうだったね。兄さんは光夜とは初めて会うのか」

雁庵は光夜に視線を移すと途端に物凄い眼力で光夜を見た。光夜はその視線を向けられ驚くも… しかし目を逸らさずに雁庵の視線を受け止めた。

「（儂の視線に気づいておらぬ訳ではない。その上儂の視線に耐えるか。いや、そんな事よりも…）」

四宮雁庵という男は多忙を極める。針月が光夜を出産した時も日本国の首相との食事会で向かう事ができなかった。そして雁庵が家族のために高確率で時間を割く事ができる機会は一月の元日と八月のお盆の時のみ。が、光夜が狙い澄ましたかのように体調を崩したり雁庵の急用などで光夜が5歳となった今まで雁庵は甥と顔を合わせることがなかった。

「まあいい。光夜は確かもう誕生日を迎えて5歳だったな。まだ誕生日は迎えてないから歳は同じだが一つ学年が上の従姉がおる。年の近い親戚同士、話でもして来なさい」

とても自分の娘の事を語る父の姿には思えなかったがしかし光夜は一礼し、従者に連れられて会った事のない親戚の部屋へと向かう。

四宮かぐやは愛を知らない。母の記憶はなく、父と話した記憶もない。本邸には自分と年の近い子どももない。ただ毎日を自室にて過ごすだけ。そんな時、家の使用人がやって来る。

「失礼します。かぐや様、今お時間大丈夫でしょうか？」

その声に答え、かぐやは自室の扉を開ける。

「(あら?)」

よく見る本邸の使用人の隣に立っていたのは……よく鏡で見る自分の顔に瓜二つの少年。

「彼は雁庵様の弟君、蛍庵様のご子息の光夜様です。ですのでかぐや様からすれば従弟という事になります。お年も近いのです。もし時間がよろしければ雁庵様と蛍庵様のお話が終わるまでも光夜様とお話して頂ければと——」

「勿論いいわっ！ さっ光夜！ 入りなさいっ！」

使用人の言葉を最後まで聞く間もなくかぐやは光夜を自室へと招き入れた。

「その……かぐや……様？」

「様付けなんてしないでいいわよ！ 私達従姉弟って言ってたし……」

姉弟のようなものじゃない！」

元来人見知りで初対面の相手を自分の心の中に迎え入れるなんて事はしないかぐやであったが……強い血の繋がりがかぐやにその一線を踏み越えさせた。

「じゃあかぐや……さん」

「光夜は意外と頑固者なのねっ！ まあいいわ！ じゃあそうね……私のベッドにでも座ってくれる？ お話ししましょ？」

かぐやの部屋は勉強机に椅子、ベッドとシンプルなレイアウトであり、既にかぐやが椅子に腰掛けているため他人が腰を下ろせるスペースは一つしかなかった。

「あっ、でもそうだとちよつと距離が遠くなるわね。そうだわっ！ 私も隣に座る！」

自宅では布団が使われており、ベッドをジロジロと観察しながら腰掛ける光夜の隣にかぐやはちょこんと座る。視線がベッドの方を向いていた光夜はいきなり至近距離でかぐやと顔を合わせる事となり、女の子に対して免疫がない光夜は顔を赤くしてしまう。

「あらあら顔を赤くしちゃってっ！ 光夜ったらおかわいいことっ！」

揶揄われた事に気づいた光夜はやり返そうと……しかし自分の免疫能力では何もできないと悟り、せめてもの抵抗としてかぐやに背を向ける事しかできなかった。

「(あら?)」

しかし後ろを見てしまったせいで耳まで赤くなってる事がかぐやにバレてしまう。

「(もう少し揶揄いたかったけど……それをしたら光夜も困るわね)」

数年後には氷のかぐや様と呼ばれ、他人に対しての高い攻撃力と一度弱みを握ったらとことん追い詰める残虐性を併せ持つようになる四宮かぐやであるが、この時はまだ年相応の女の子であった。

「光夜。後ろを向いてたら話せないわ」

そしてこのかぐやの猶予が光夜に冷静さを取り戻させる時間を与えた。通っていた幼稚園でも男の子としか話さない光夜は単純に女

の子への免疫がなかっただけ。この一瞬でかぐやに一目惚れした訳ではない光夜は冷静さを取り戻した。

「ごめん、かぐやさん。初対面の相手でちよつと緊張しててね」

「姉弟じゃないっ！緊張する事なんてないのよ！」

それから四宮の人間らしくない、取り留めもない年相応の話が続いた。それは一般的に何気ない日常の一コマへと風化するような大したものではなかったがかぐやにとっては初めて他人と日常を共有できた瞬間であり、この時交わした言葉の一言一句は今でも全てかぐやの胸に刻まれている。

その日から四宮蛍庵、針月、そして光夜が四宮本邸に住み始める事になったが……程なくして光夜の天才ぶりが家中に知れ渡るようになる。将棋、チェスを教われれば程なくして光夜にルールを教えた使用人を負かしてしまった。子どもだからと手加減して負けてしまった事を受け、今度は本気で臨んだ使用人だったが……. またも負けてしまった。

そしてその後、雁庵の長男であり光夜からすれば従兄にあたる四宮黄光すら負かされてしまった。たかが将棋と思うかもしれないが、しかしルールを理解したばかりの幼稚園児が四宮次期当主候補筆頭に頭脳戦で勝利した事が問題なのだ。将棋に加えて光夜はパズルやスポーツにおいても秀でた成績を残した。

家中の中でも「もしこの子が成長したらどんな子になるのか…….」と期待する者すら現れた。

四宮蛍庵は年の離れた雁庵の実弟ではあったが雁庵の後は雁庵の三兄弟の誰かが（高確率で長男の黄光）相続すると誰もが考えていた。しかし雁庵の血が繋がった甥である光夜の能力が知れ渡った事でこの構図に変化が生じ始めていた。

四宮三兄弟は無能ではなかったが（一名除く）現当主に比べて見劣りするのは間違いない。そしてそれを雁庵と同等かそれ以上に相続できる可能性がある人物が……. 現れてしまった。四宮三兄弟が光夜に相続させないための謀を巡らせる事は……. 火を見るより明ら

かであった。

そして光夜が将棋で黄光を負かしてから一年も経たぬ内に……光夜の父である蛍庵が死亡した。雁庵の仕事を手伝う際の交通事故とされたが、ここは陰謀が張り巡らされてる四宮本家である。むしろ誰かに暗殺されたと考える方が自然だ。……が、証拠などありはしない。仮に四宮三兄弟による暗殺だったとしても四宮の下手人が証拠など残す訳が無い。

そして本家内で光夜の母である針月に対する計画的で組織的ないじめが始まった。しかし幼い光夜は母が苦しんでいる事と原因が分からなかった。無論分かったとしても何も経験がない光夜が四宮三兄弟を政治力で出し抜ける訳が無い。将来に光る才能という希望があつたとしても。

理性において何も分からなかった光夜だが小学校に上がり、成長するにつれて本能的に自分の実力を隠すようになった。十で神童十五で才子二十過ぎれば只の人という諺があまりに有名だが、結論づけると家中の人間も四宮光夜もそういう類いのものかと納得する人間も現れ始め、相続問題は解決した。

が、四宮三兄弟（次男を除く）は光夜が意図的に実力を隠しているところまでは見抜けなかったが自分達の脅威たり得る存在とは認められていた。はつきりと脅威になるかは分からないが、その可能性が微々たるものでも存在する限りは潰す。それが彼らの選択であった。

そして光夜が小学校高学年になる頃には……光夜の母は壊されていた。

「だから！ もっと気合いを入れなさいって言ってるの！ この世界は弱いものは食い尽くされるしかないの！」

針月は最早四宮で生きていける状態になく、光夜を連れて四宮を出た。光夜も姓を母のものに変えて四宮との絶縁を示した。母は……もう以前の母ではなかった。針月は一歳年上の姉を持つ二人姉妹であつたが父は家族に暴力を振るい、母も別の男と夜を過ごすようになり家に帰ってくる頻度がどんどん減るようになるような育

児放棄。中学を卒業した時に姉に連れられ家を出た。

姉は中学を卒業したと同時に夜の街で働くようになった。自分の生活費まで稼いでくれた姉に針月は頭が上がらなかつた。自分も中学を卒業したら姉のように働こうと考えたが……しかし全力で止められてしまった。ならばその分の恩返しを、今度は自分が姉を助けるためにと針月は我武者羅に勉強に勤しんだ。姉が夜の街で働くためには教養が必要なようで、そこでも針月は姉を支える事ができていた。

針月も働くようになり姉妹はお互いに支え合いながら、質素ながらも充実した日々を送っていた。そして針月は蛍庵と出会い結婚した。

針月の能力は非常に高く、弱者はただ踏み潰されるのみという四宮の現実を前に強引なやり方を使ってでも光夜にあらゆる方面の能力を仕込んだ。が、あまりにその厳しさは限度を超えていた。あの光夜ですら耐えられなくなり幾度となく母親から逃げようとした。針月の精神は既に四宮家でボロボロになっていたのだ。

光夜が秀知院の中等部に進学した時、母が病に倒れた。父の遺産があつたため生活に困る事はなかつたのが不幸中の幸いであつたが。この頃になると光夜はもう餓鬼ではなく、幼少期の思い出を冷静に分析する事ができていた。なぜ母が虐げられていたのか、その原因についても。そして光夜には両親以外にも四宮家で大切な人間ができた。

——姉である四宮かぐやである——

が、思い返せば彼女も本家では冷遇されているように思えた。無論母ほどではないが。母が元々四宮家の人間でなかつたため家を抜け出す事で四宮の濁流から抜け出す事ができたが姉であるかぐやはどうなのか？ 逃げ道などあるのか？ 四宮家当主の血を確かにひく存在であるかぐやは四宮三兄弟にただ道具として使われるのでないか……？

その考えに至った時、光夜に探るべき道が開けた。

「かく姉が四宮家で何かあつた時に逃げられる場所を。そしてそれは

四宮家からの干渉を防げるほどの強力なものでなければならぬ」

伏見光夜が四宮光夜であった時、家中でその能力が評判だった時。日本を動かすと言っても過言ではない財閥の四宮家であるためその情報は富裕層を中心に広まっていた。自分が思うより四宮光夜の名前は売れていたのだ。当然、名前が売れば光夜に会いに行く人間も増え……人脈も広がった。光夜は事業を開始する前からアドバンテージを得ていた。

人間が平等で公平な存在であるという話は嘘である。一見、万人に對して平等に見える『時間』ですら平等ではない。何か事業を興す時も、準備のための資金集めから始めなければならぬ人もいれば資金、環境、従業員までが全て揃った状態でスタートできるような人もいる。

光夜は他者とは違い圧倒的な人脈というアドバンテージを得ていた。

「光夜君……今は伏見光夜君だったね」

光夜が対面したのは橋本と言い、一代で零細IT企業を大企業にまで成長させた男である。光夜と対面した際、その実力の片鱗を見抜いた切れ物でもある。四宮は巨大すぎる勢力だ。同じ土俵で争っても新興勢力に勝ち目はないだろう。しかし四宮家が歴史ある伝統を大切にしている事からIT業界など新規事業に関しては他分野よりも弱い。

光夜はまずその部分から手をつけようと考えた。今、光夜が欲しいのは有能な人材である。ただ、人脈があり有名だとは言え、現状ただの中学生である光夜に協力する人間など少ない。目の前の橋本でさえ従業員を貸し出すなんて真似などするはずがない。

「(発想を逆転させるんだ。比較的いらなむと言われている人材なら獲得できるはず)」

だとしても無能な人材は必要としていない。無能ではなくしかし会社から窓際にさせられてる人材……性格に難があったり協調性がなかったりなど個としては優秀だが組織の一員としては機能しな

いような人材。

「橋本さん。もしよければ彼をうちで雇いたいのですが」

「彼？ 確かに実務能力は高いけど…… うん、いいよ！ その代わりこれから何かあったらよろしくね！」

「ありがとうございます」

会社とすれば厄介者扱いができて四宮家から『怠惰の天才』と呼ばれた者と誼を結ぶ事ができる……。断る理由もなく橋本は首を縦に振った。光夜はあちこちの企業を渡り歩いて同様の交渉を行っていき……。人材を集めた。その中には将来彼の側近を務める石川も含まれる。

こうして光夜は協調性がなかったり気難しかったりと問題は抱えているがしかし一芸には秀でていたりする優秀な人材を手に入れる事ができた。

「僕は自分の仕事に妥協はできん！」

自分の仕事に誇りを持つ職人気質が強すぎる前田という社員は、元の企業では周囲と自分の熱量に差を感じ、周りの人間に怒鳴り散らして厄介者扱いをされてきたが『伏見』では基本一人で職務に対して集中してもらい、チームを組むとしても同じ熱量を持った人間と組ませる事で彼に仕事に全集中できる環境を整えた。

「今日は何だかやる気出ないんだよね〜」

やる気がある時は無双の如き働きを見せるがやる気がない時はサボり魔へと変貌し、周囲にも悪影響を与える村田という社員に対してはできる限りやる気が出るよう環境の設備に尽力し、やる気が湧かない時には職務に就かなくても良いようにした(当然他の社員にはバレないよう細心の注意を払った)。いつやる気スイッチが抜けるか分からないため緊急性が高い職務や恒常的な職務には就かせられないが、やる気スイッチがオンの時に難解な単発の職務を完璧に遂行するなどして会社の成長に多大な貢献を果たした。

村田と違い、常にやる気がなく隙有らば楽しようとす前原に対しては、職務をどうすればより楽できるか、効率的にできるかといったシステムを考えさせ、少ない人員ながらも最大限のパフォーマンスを

発揮できる事ができる『伏見』の基礎を築いた。

不良品はほんの少し扱い方を変えるだけで化け、そしてその扱い方を光夜は熟知していた。中学生がつくった『伏見』は各界から有能ながら窓際に追いやられた人材を集めては大きくなり、そして企業闘争に打ち勝って相手企業を吸収したりするなどして途轍もない成長を遂げた。が、その成長を光夜は母に見せる事ができなかった。

「母さんには結局この『伏見』の姿を見せられなかったな……」

母の一回忌を前に光夜はそう漏らした。

「今なら分かるんだ。四宮を出てから……母さんは凄く厳しくて……人が変わったみたいだったけど全部息子である自分のためだったんだ……」

何度も逃げ出しそうになったり母に対して怒りを覚えた日も少なくなかったが母が亡くなってからようやく気づいた。気づくのがあまりに遅すぎて礼を言うのも手遅れだったが。

「だからこそ、父さんに聞きたい。父さんの真実を。母さんに伝えたい。ありがとうって」

光夜は一人、明日の工程に思いを馳せていた。

17話 藤原千花は貪りたい

「皆さん揃いましたね！ それじゃあ出発しましょう！」

恐山に行くべく東京駅に集合した生徒会メンバープラス眞妃は予約していた切符を受け取るために窓口へと向かった。青森県の下北半島に行くために一行は東京駅からまず青森県の八戸駅まで東北新幹線で向かう。四宮、四条、伏見の人間が集まっているから新幹線や飛行機を貸し切る事など容易だがあくまで「学生旅行」を楽しみたいという考えから庶民と同じ選択を採った。

八戸駅に至る東北新幹線は全席指定席である。自由席はない。したがってその車両の座席の数を乗客が上回れば座席に座れなくなる時さえある。その場合は立ち乗り乗車券というものが配られるが八戸までのおよそ三時間にも及ぶ行程を立ち移動ではかなりの負担だ。そのため事前に切符を予約していた。

光夜達は3人席の座席を二列購入し、改札を通り車内に乗り込んだところで足が止まった。

「(私の切符と、それから光夜の切符をさつき盗み見たら私と光夜の座席が離れてるじゃない!)」

そう考えたかぐやが全員の切符を回収したからである。普段であれば自分達のグループが座る場所が決まっているのであれば躊躇わずに座る面々だがかぐやの雰囲気はどこかしら怖く、座るのを躊躇ってしまう。なぜかその車両には他の客はいなかったから迷惑にはならなかったが、しかしだからこそ全員が通路に立ち止まるという奇妙な状況が生まれてしまった。

「(この中で私だけ生徒会じゃないのよね……。藤原は同じクラスだけどあまり話した事はないし石上とは初対面だし……。光夜か御行が近くだったら気が楽ね)」

「何突っ立ってるの？ 光夜、御行。そこ座りなさい」

「じゃあ光夜、そこ座りなさい？」

「……………」

かぐやと眞妃は同時に発言し、そしてお互いを見る。

「(何? 分家の人間の分際で私に楯突く気? ……まさか? 眞妃さんは光夜の事が?! 絶対に譲りません!)」

「(お婆様……? あ、そっか。光夜の隣に座りたいのね? 失恋した身とすればお婆様を応援してあげたいけど……なんかここで譲って負けたようになるのは嫌だわ!)」

「(絶対に譲らない!!)」

ここに非常にしようもない理由による恋愛頭脳戦が開幕した。

四宮かぐや……(光夜の隣を強く希望。眞妃や藤原といった女性陣が光夜の隣に座るのは絶対に阻止したい)

四条眞姫……(できる事なら光夜か白銀の隣を希望。だがそれ以上にかぐやに負けたくない)

白銀御行……(気まずいためかぐやの隣は避けたい)

石上優……(別に誰でもいいけどできる事なら気が知れた光夜か白銀が隣だと嬉しい。かぐやの隣は怖いので避けたい)

伏見光夜……(昨夜夜更かしたのでちよつと車内で眠りたい)

藤原千花……(駅弁食べたい)

「(そういえばお婆様、光夜を隣に指名するって何か裏でもあるのかしら?)」

「光夜とは姉弟です。隣に座るのに何もおかしい事はないでしょう?」

眞妃さんこそ光夜や会長を隣の席に指名するとは……同じくラスの誰でしたっけ? 彼が聴けば誤解するのではないかしら?」

四宮家と四条家が防犯の目的で光夜達が座る車両の切符を買い占めていたが、しかしその事が原因で両家の御令嬢が弁舌で争う事になるとは流石に予想できなかったらしい。

「……」

そして石上優も彼女達の争いを見てある事に気づいた。

「(この先輩もちよつと怖い! 四宮先輩みたいに怖い人だ!)」

石上優……(別に誰でもいいけどできる事なら気が知れた光夜

か白銀が隣だと嬉しい。かぐやと眞妃の隣は怖いので避けたい) ↑ n e w!

こういう場面で第一に頼れる光夜はあまりの眠気からか先程から船を漕いでいて役に立たない。白銀と石上には恐怖の二人に介入する覚悟はない。だとすれば残すはあと一人。

「喧嘩はダメですよ！ かぐやさん、眞妃さん！ どうして言い争ってるのか聞き逃しちゃいましたけどそれならゲームで決めましょう！ NGワードゲームです！」

NGワードゲーム。それは指定したワードを言わないように、そして他者に対しては言わせるようにする頭脳バトルである。藤原が作ったくじによって誰が誰のNGワードを書くのかが決められた。

光夜↓白銀

「御行先輩はかなり頭がいいからなあ。多分御行先輩が言いそうな事を書いても当たらない気がする。一見言わないような事を書いて油断をつくやり方でいこう)」

白銀↓眞妃

「さっきのやり取り…… 四条がちよつと怖かった。それにあいつの失恋は俺のせいのようなものだし……。勝負においてわざと手を抜くのは俺のやり方に反するが……。あいつが言いそうにない事を書くか……)」

眞妃↓藤原

「正直藤原の言いそうな事って分からないのよね……)」

藤原↓石上

「石上君の言いそうな事はよく分かってるんだYO〜！ゲームも楽しみたいけど早く弁当食べたいんだYO〜！石上君が私に対して思っている事を書けばきつと瞬殺なんだYO〜！」

石上↓かぐや

「もし四宮先輩を負かせたら一体どうなるのか……。想像しただけで寒気が……)」

かぐや↓光夜

「(光夜には悪いですが負けられません)」

NGワードゲームが始まった。

「じゃあ黙ってても進まないしみんな始めようか」

「ドーンだYOー」

「(ごめんなさい光夜)」

NGワードとはいわば相手の事をどれだけ理解しているかが問われている。このゲームにおいてかぐやの存在は光夜にとって天敵でしかなかった。始まった瞬間、藤原コールが鳴り、光夜は瞬殺された。「結構本気で頑張ったけど……あ、本当だ『みんな』って書いてる。じゃあ終わったら教えてくれないかな？」

いつまでも通路に突っ立ってる訳にはいかない。とりあえず適当に着席したが(最早そのままでも良いとも思うが)、言い当てられた側はその後の会話には参加できないというルールだったので光夜は眠りに入った。

「おば様は最近何か趣味とかないのかしら？」

「(趣味……私のNGワードを書いたのは石上君でしたね。私とかけ離れた事が書いてあるでしょうから答えるとしても私と容易に結びつけられるものにするべきでしょうね)」

「そうですね……弓道などは嗜んでおります。そういえば眞妃さんは東北にはこれまで行った事は？」

「(確か私のは御行が書いていたわね……。御行は頭がいいし私が言いそうな事を書いてるでしょうね。ただ御行とはまだ知り合つて間もないからその間に交わした会話で予想できるわ。ただ今のおば様の問答じゃどんな事について書かれているか分からないわ……。危険だけでもうちよつと様子を見るべきね)」

「家の関係で勿論来た事はあるわ……尤も恐山は今回が初めてだけど」

顔色動かさずに二人は会話を続けるが、しかしお互いが相手の情報を一つでも多く見過ごさないよう気を配っているのは明らかであつ

た。しかし幼い頃から交渉術や社交界を体験してきた二人の心を汲み取る事は難しい。ならば別の相手から情報を入力しようとする二人は矛先を別の相手に向ける。

「石上君、先ほどから黙ってますけどこのゲームで沈黙はダメですよ」
かぐやは矛先を石上に

「御行もさつきから黙ったままじゃない」

眞妃は矛先を白銀に向けた。

NGワードゲームとはつまり相手を誘導し、そして自分が言いそうな言葉を避ける事が勝負の肝である。しかし白銀と石上は……

「俺の書いたのは光夜だったな……。あいつは俺の事をよく知っている。俺がよく言いそうな事を書いてるだろう」

白銀、不正解。

「僕のは確か藤原先輩だったな。あの人予想できないんだよな。予測はできるけどそれを遥かに超える時もあるし……」

白銀と違って石上は方向性を大きく間違えるという事はしなかったがしかし、二人の思惑は一致していた。

「(すぐにでも敗退したい!!)」

「俺も本気を出して勝ちにいく」

「僕も普段なら帰りたいと言いますが今日だけは頑張ります」

白銀も石上も日頃自分が言いそうな言葉を選んだが……しかし藤原コールは聴こえてこなかった。そんな二人の様子を見てかぐやは考えた。

「(会長も石上君も頭がいいですからね。普通なら自分が普段言いそうな事は避けるでしょうがおそらく藤原さんの反応などを見ているんでしょうね。少々考えすぎな気もしますが)」

考えすぎなのはかぐやの方である。石上が自分に対して強く出れない事は予想できたかぐやだが、白銀と石上が敗北を望んでいる事ま

では辿り着けなかったようである。

「妥協は俺の主義に反するからな」

「ゲームだつて手を抜いてやっても面白くないですからね」

引き続き狙つて言葉を発するがしかし、藤原コールは依然として鳴らなかつた。

「どうして…… どうして！ 会長と石上君はさつきから日頃言つてる言葉を使つてるんですかつ！」

「(御行と石上、やるわね)」

「藤原さん。その紙を見てみなさい」

藤原が持つていた紙を見てみると、そこには確かに「どうして」と書かれていた。

「ヴェエエんっ！ どぼじでええええ!!」

「(会長と石上君は自分の言葉を確認しながらも藤原さんに対して罠を仕掛けていたのでしょうね)」

誤解である。白銀と石上はそのような事など全く考えていない。ただ純粹に自らの負けを願つた結果である。そして藤原の離脱は白銀と石上を更に焦らせた。

「(藤原が離脱するとなるともう俺のワードが何かを予測する事ができない!)」

白銀と石上はある種、かぐやと真妃よりも難易度の高いゲームをしていた。一つのワードを避けて会話するのと一つのワードを特定するのでは明らかに難易度は異なる。そしてかぐやと真妃は彼らに簡単に手がかりを残してくれるような人物ではなかつた。

目的は違ふとはいへ、指定されたワードを特定するという事はその勝負に絶対に負けない事を意味するのだから。白銀と石上がそのワードに対して情報を得るには藤原という手段しか残されていなかった。が、このゲームでは敗退者は議論に加わることができない。苦々しげに白銀と石上は藤原を見る事しかできなかった。

「負けたのは悔しいですけど…… おべんとー！ おべんとー！」

藤原は先程まで凄く悔しがっていたようだが気分を入れ替えたようで、車内販売のワゴンのお姉さんから事前に調べていた弁当を購入

し……

「おいひい〜!!」

美味そうに食べ始めた。

18話 白銀御行は乗り換えたい

新幹線の中、絶対に負けたくない四宮かぐや、四条真妃と絶対に勝ちたくない白銀御行、石上優の4人によってNGワードゲームが繰り広げられていた。先に敗退した伏見光夜は既に眠りに入っており藤原千花は弁当を一心不乱に貪っている。

「石上の得意科目って何だ？」

「得意科目って言ってもここにいらっしゃる皆さんを前にして言えるほどではないですけどね……強いて言えば数学ですかね。そういえば会長って何か得意なスポーツとかありますか？」

「お、俺か？ バ、バレーとかかな……？」

会話に参加していなくても話を聞いていた藤原は何を思い出したのか顔を青くした。

一見すれば白銀のNGワードはスポーツ、石上のNGワードは教科に関するものだと思察される。お互いが敗退を望んでいるという事を知っていればヒントを教えあつたと考える事が自然であろう。しかし……

「(光夜と藤原が敗退した今、単独で四宮と四条の相手はしたくない！)

石上、俺は絶対にお前に負けなければならない！」

「(光夜と藤原先輩が敗退した今、もし会長が先に敗退したら僕が四宮先輩と四条先輩の相手をしなければならぬ事に……絶対に負け逃げさせませんよ！)」

藤原千花が消えた事で二人に協力しあう意思は消滅し、現に今、それぞれがNGワードとは関係ない分野について質問をした。

「(会長も石上君も相手にNGワードを悟らせないようにして追い詰めていくつもりなのでしょうね。ですが私は負けません)」

かぐやは勘違いをした。

「そういえば石上君、前回のテスト凄く成績を上げましたね。赤点ギリギリだったのに」

テストの話題を持ってくるかぐや。前回のテストでは白銀と、そし

て眞妃に負けた出来事であったのだがその後、光夜にひたすら慰められ（早坂に平身低頭で光夜が頼まれた）、既に吹っ切れている。

「流石に留年されたら困るので私が教えようとも思っていたんですよ」

「そ、そうなんですね……」

「（光夜に教えてもらって本当に良かった……）」

石上は「もし四宮先輩に教えてもらっていたら……」という事をつい想像してしまい内心冷や汗をかいた。

「まったく……人に教えるならせめて一位を取ってからにするべきでしょうに……」

かぐやは爆睡して、会話など全く聴こえていないであろう光夜を見た。

「二回テストで一位を取ったものの、継続する事が難しいというのに……」

尚、かぐやは光夜が一位を取った理由が「自分がそう言ったから」である事には気づいていない。かぐやが毎回「一位を取りなさい」と言えばその通りになる事をかぐやは知らなかった。

尤も、かぐやは白銀御行や四条眞妃という人間がいる事によって常に一位を狙う事ができないためこの誤解は解けない方がいいのかもしれないが。

「そういえば光夜はどうやって勉強をさせたんだ？」

前回学年一位を陥落させてしまった白銀は依然として勉強へのやる気を失っていた。石上は客観的に見ても勉強に対してやる気を持っている人間ではない。そんな石上相手にやる気を持たせた光夜の手法に白銀は興味を示した。

「えっと、今度光夜の会社がサービスを開始するゲームがあるんですけど、光夜の講義を受けたらこのベータテストの権利をくれると……」

「……」

しかし白銀にとって、それは残念ながら何の役にも立たない情報であった。

「まあ動機はどうであれ、それで勉強のやる気が出たんならいいんじゃない？ お子様達の話によれば石上も成績上げたんでしょ？」

「……はい」

苦手意識を持った眞妃から話しかけられた事で一瞬言葉に詰まったが、石上は何とか言葉を返す事に成功した。

「石上君は光夜の事についてどう思ってるのかしら。今は光夜も寝ていますし教えてくれませんか？」

「(……ッー)」

白銀は何かに気づいた。即座に話題を変えようと言葉を探す。しかし時、既に遅し……

「光夜とは同じ年ですけど……それでも凄い奴だなんて……面と向かつては言えませんが尊敬しています。友達になれて本当に良かったって」

話に参加できないでいたが二箱目のお弁当を完食した藤原はしっかりとその会話に集中していた。石上の言葉を聞き逃す事はなかった。

「ドーンだYOー！」

その言葉を聞いて石上は自らのNGワードを見してみる。そこには確かに『尊敬』と書かれていた。

「(いよっしやああああああっ!!!)」

大喜びする石上。

「(やるわねおば様……)」

光夜の時と併せて2キルを達成したかぐやに対して素直に内心で称賛を送る眞妃。

「(私より遅かったですが、それでも引っかかってくれて良かったです！)」

自分が指定したNGワードに見事石上が引っかかった事に喜ぶ藤原。

「(さて、次は眞妃さんと会長、どちらに狙いを絞りますかね)」

もう既に心を入れ替えて次の標的を狙うかぐや。

「(zzzz……)」

爆睡する光夜。そして…………

「(石上イイイ!!)」

石上に対して羨望の視線を向ける白銀。

残すはかぐや、真妃、白銀の3人となり結果、白銀は到着駅の八戸駅まで敗退する事ができなかった。

光夜↓白銀 (簡単)

「(御行先輩はかなり頭がいいからなあ。多分御行先輩が言いそうな事を書いても当たらない気がする。一見言わないような事を書いて油断をつくやり方でいこう)」

白銀↓真妃 (九州)

「(さっきのやり取り………… 四条がちよつと怖かった。それにあいつの失恋は俺のせいのようなものだし…………。勝負においてわざと手を抜くのは俺のやり方に反するが………… あいつが言いそうにない事を書くか…………)」

真妃↓藤原 (どうして)

「(正直藤原の言いそうな事って分からないのよね…………)」

藤原↓石上 (尊敬)

「(石上君の言いそうな事はよく分かってるんだYO〜! ゲームも楽しみたいけど早く弁当食べたいんだYO〜! 石上君が私に対して思っている事を書けばきつと瞬殺なんだYO〜!)」

石上↓かぐや (映画)

「(もし四宮先輩を負かせたら一体どうなるのか………… 想像しただけで寒気が…………)」

かぐや↓光夜 (みんな)

「(光夜には悪いですが負けられません)」

東北新幹線が八戸駅に到着し、一同は新幹線を降車した。

「御行先輩………… 大丈夫ですか…………?」

白銀は屍のようであった。

八戸駅で在来線に乗り換える。一同は八戸駅から下北駅に向かうために電車に乗り込んだ。

都内では見る事がない一両しかない鉄道に一同は驚きながらも座席を探した。昔ながらの4人一塊のボックスシート……。光夜達一同は6人。つまり2人は別の席に移らなければならないという事でまた新幹線のように争――

「お、俺と石上はこっちに座るから」

「光夜と先輩達はそっちでお願いします」

もう悲劇を繰り返す事を白銀と石上は望んでいなかった。光夜達とは通路を挟んだ場所に彼らは座った。かぐやの望みは光夜の隣に座る事と眞妃、藤原が光夜の近くに座らない事である。白銀と石上の行動によって争いがなくなる訳ではないが、しかし二人が争いに巻き込まれる事もなくなった。

二人は勝利条件を満たしたのだ。

窓の外を見る。まず気づく事は東京とは生えている木が違うという事。緯度が高いからか、日頃見慣れない針葉樹林に囲まれた線路を走っていて窓の外を見るだけでも飽きる事はない。

「(冬は雪が凄いんだろうなあ)」

今は夏。雪などないがしかし冬の光景を想像する光夜であった。

下北駅に着いた。ここからバスで30分向かえばようやく恐山に到着する。早朝早くに東京を出発したはずなのにもう正午に近い時間帯だ。光夜は新幹線の中で寝ていたため長い時間が経った事にあまり実感は持てないが。

「やっぱり便数は少ないね」

東京では見る事がないくらいに時刻表はスカスカである。

「帰りの便の事を考えれば恐山には1時間か4時間の滞在ですね」

出発前から計画していた事であったがやはり時刻表を見た時の驚

きは大きかったようである。4時間滞在は長いのかもしれないが、しかし一人ではなくみんなで来ている。退屈さなど感じないだろう。

「眞妃さんはそもそも悟る事が目的らしいし……」

様々な考えがあったがしかし光夜達はバスに乗り込んだ。例に漏れず、白銀と石上は即座に二人席を確保し仮に争いが起こっても傍観する態勢を整えた。

恐山まであと30分。

19話 伏見光夜は報われない

「ッー…これは……」

道中、不老不死になると言われている湧水に立ち寄ってからバスで山を上り続け終点である恐山に到着した。バスを降りると標高が高いからか下北駅よりもやや冷たい風が肌を刺す。

そして辺りを見渡せば、整然とした山々に囲まれた壮大な宇曾利山湖を目の当たりにする。靈感というものに縁のない一向でもここが浮世離れた、他の場所とは隔絶した空間である事を感じとった。

だがいつまでも圧倒される訳にはいかない。

「帰りのバスの時間は決まっている。時間が余ればまたここでゆっくりできるだろう。先に進むぞ」

一向はお金持ちの子息が通う秀知院学園の生徒。白銀御行を除けば皆が皆、お金持ちの上流階級の出身である。そんな彼らであれば車を運転せずとも運転手を雇ったり、それこそタクシーをチャーターする事も容易であろう。しかし彼らは敢えて不便な公共交通機関を選択する事を望んだ。

彼らはあくまで学生旅行を同級生と楽しみにここに来ていたのだ。何れやろうとしてもできなくなる不便を望んでいるのだ……一人を除いて。

「何を言っているんですか！ 常に時間を気にしながらの旅行など旅とは言えません！ 行きならまだしも帰りは違うと思います！ 時間を気にしながら焦っては、見るものも見れません！」

忍耐とは程遠い、強欲と自愛の塊（かぐや談）の藤原千花である。「帰りたくなった時に帰ればいいんです！ のんびり見ていきましょう〜！」

藤原の視線の先には流石政治家の娘と言うべきか、豪華なりムジンと白色の手袋を身につけた四十代くらいの運転手が。

「私の事は何も気にせず、のんびりと観光なされて下さい」

運転手の影島に一同は頭を下げてから先に進んだ。

藤原の活躍(?)によつてのんびり回る事が許された。最初に言われた時は皆が皆、藤原に対して

「お前なんて事を！」

と思つていたが、しかし時が経つと全員が時間を気にせずゆつくりと回れる事を喜んだ。無論、誰一人藤原に対して感謝など口にしないが。

急ぐ必要がなくなった一向は落ち着いて湖のほうに再び目をやる。とても天気が良く、雲も見えない晴天では湖の向こうの山の青々さえもはつきりと見る事ができる。

「本当、綺麗ね。凄く心が奪われるわ。そうは思わない？ 光夜」

「そうだね姉さん。旅行の計画を立てる時にこの写真も見た事があるけど、何ていうか……ただ綺麗つてだけじゃなくて吸い込まれるような、不思議な感じだ」

恐山について徹底的に調べた光夜は自然とガイドのような役割を担っていた。

「これは…… エメラルドグリーンつてやつね。あと硫黄の匂いが凄いわ」

「眞妃さんの言う通り、強い酸性だからこの色らしいよ。千花？ 綺麗だからつて飛び込んだらダメだよ」

「そんな事する訳ないじゃないですか！ 人をアホの子みたいに言わないで下さい！」

「(藤原書記ならやりかねん……)」

「(藤原先輩ならやつてもおかしくない……)」

藤原は濡れ衣だ！ と叫ぶが、この場にいる誰もが藤原ならやつてもおかしくないという結論に至った。尚、かぐやと眞妃はその自然の美しさからか、ここがあれだけ恐怖した場所という事を忘れていた。

入口の方に歩くと赤い橋が見える。橋の前には「立ち入り禁止」と書かれた立て札が。

「あれは太鼓橋だね。有名だから知ってるかもしれないけどこの世とあの世を結ぶ橋。だから千花、間違つても渡っちゃダメだよ」

「だから！ どうして光夜君はさつきから私をお間抜けキャラにしよ

うとしていくんですか！ 皆さんも否定して下さいよ！」
藤原はかぐや、眞妃、白銀、石上に向き直るが……

「……………」

全員藤原から目を逸らした。

「どぼじでええええ!!」

「五百円になります」

太鼓橋を横目に見ながらついに恐山菩提寺の入り口に到着した。
一人五百円を支払い、入場券を貰ってから中に入る。

「見て下さい！ 本堂が見えますよ！ みんなで写真を撮りましょう！」

総門からは長い石畳の路の先に本堂を見る事ができる。

「写真は私が。皆様は一列にお並び下さい」

「影島さん?! どうしてここに?」

突然声をかけてきたのは先ほどの藤原家の運転手、影島。

「お嬢様方がここで写真を撮られると愚考し、僭越ながら着いてきた次第。皆様方、お並び下さい」

一眼レフを構えた影島に促され、一同は並ぶ。

「ほら、光夜は私の隣よ」

「ほら光夜、ここに座りなさい」

前列中央に光夜、左隣にかぐや、右隣に眞妃が座りそしてその後ろにそれぞれ藤原、石上、白銀が立った。

「…なんか七五三みたいなんだけど……」

とは言いつつも、友人達と集合写真を撮る事に喜びを隠せていない光夜であった。

「では、はいチーズ」

「あれがイタコさんのテントでしょうか?」

影島に写真を撮ってもらい、ふと視線を横に向けると恐山の大祭の一大目玉、イタコが立ち並ぶテント群を見る事ができる。

「かなり並んでいるようだな」

イタコの口寄せに予約制度はない。美容室やファミレスのように署名してその間離れてもいいシステムではない。誰かが並んでいなければ口寄せして貰えないのだ。では一体誰が並ぶのか？

「私が並んでおきましょう。皆さんはゆつくりと菩提寺を見て回られて下さい。順番が近づきましたら連絡差し上げます」

「二」「影島さん……！」「三」

バスの中では二組に分かれるなどの話し合いをしていたのだ。申し訳ないという気持ちはあるが、しかし影島に並んでもらえれば全てが解決する。

「一周回った後でまだ時間があつたり、それこそ口寄せ中には影島さんにも楽しんでもらおう」

影島に一同は感謝をし、絶対に調子に乗るので口には出さないが藤原にも感謝をしていた。

「あー！ 見て下さい！ あんなどころに温泉がありますよ！」

本堂に向けて真っ直ぐの参道を歩いていると右手に小さな木造の小屋が。側の立て札には藤原の言う通り「薬師の湯」と書かれている。

「あ、この水路……もしかして温泉？」

石上の言葉に従うように恐山の所々にある水路に目を通してみると…… 湯気が沸き立つ水が流れていた。

「源泉掛け流しというやつなのかもしれないな」

「バスを降りてから硫黄の匂いが凄かったけどこういう温泉が凄く近いからかもしれないわね」

東京ではあまり身近とは言えない温泉。しかしそれがこんなにも身近にある事に一同は改めて遠いところまで来たのだと実感する。

「……でも、こんな参道と近いところだとちよつと恥ずかしいですよね……」

温泉は男湯、女湯、混浴があつた。東京ではあまり見ない混浴、という文字に一同は顔が赤くなる。しかし決して誰もその事を話題に出す者はいなかった。そして混浴を抜きにしてもこちらも参道と近い

なのであれば内風呂でも恥ずかしいと思う女性陣であった。

「壁も薄いし声も聞こえて…… 破廉恥つてところじゃないじゃない！」

「(畜生、こういう時何て言ったらいいんだよ……)」

「(こういう時、男は何を言っても弾劾される虚しい生き物なんです……)」

かぐやと眞妃に対して本能的な恐怖を刻み込まれている白銀と石上は建前だけではなく本心からそのような事を望んでいなかった。

「どつちみち入るとしても参拝で汗かくだろうし全部終わってからだよ。先に行こう」

光夜の提案によって一同は無言で小屋から離れた。

恐山はその硫化ガス、強い酸性ガスによって地面が強い酸性であるために植物は育たない。土も緑もなく色のない白砂と玉石の光景がただひたすら広がっている。そして辺りには、ちらほらと風車が備えられている。

「恐山は死者が向かう世界。あの世に最も近い場所。子どもが早くに死んでしまった時に手持ち無沙汰にならないように親が手向けるものだそうです」

「……………」

浮世離れた景色で目を奪われていたためにすっかり忘れていた。^{恐山}ここはそういう場所なのだ。参道を歩くほどにそういう気持ちが強くなっていく。歩けど歩けど目に入るのは「地獄」ばかり。ここはあまりに死が近すぎる。

「あの…… 熊に注意とか書かれてるんですけど……」

石上の指差す先には今にも倒れそうな立て札だが確かに「熊に注意」と書かれていた。

「(こんな人里の中なのに…… いや、ここがそうだけで山に囲まれた場所だったな。バスでどういう道を辿ってきたのか思い出せ)」

熊なんていないよな？ と一同は辺りを見渡すが何も見つからない事にひとまずホッと息を吐く。

賽の河原と呼ばれるように積み重ねられた小石を傍目に一向は進み続ける。

「みんなと一緒に良かったわ……。一人じゃこんなところ来れないわよ！」

四条真妃は本来「悟り」を求める事を目的で恐山に来ている……。だが、今はそんな事など忘れたかのようにただ漫然と境内を散歩しているだけである。恐山の目に見えない畏怖よりも熊に対して真妃は怖がっていた。

「つと、おい四条大丈夫か？」

周りを過剰に気にするあまり、真妃は足元の石に取られ躓いてしまう。が、転倒する寸前白銀が身体を支えた事によって大事には至らなかった。

「ありがと、御行」

「足元はいい訳じゃないからな……。それと気を遣えなくてすまん」

「え？」

「お前は石上や藤原と面識がなかったみたいだし、四宮が光夜を独占しているのに俺が動かないからお前を一人にさせていた。すまんな、正直ちよつとつまらなかつただろ？」

白銀は新幹線の中でかぐやと真妃の争いに巻き込まれた後、在来線でもバスの中でもかぐやと真妃を避けていた。そしてその流れのまま恐山でも主に石上と話していた。一向は6人とかかなりの大所帯。道も狭いし他人の迷惑にもなるため横一列で歩く事はできない。

ここまで最前列に光夜、かぐや、藤原。その後ろに白銀、石上。そしてその後ろに真妃といった具合で歩いてきた。別に真妃が一番後ろだからといって何も会話がなかった訳ではないが、それでもやはり隣の者との会話が早いから真妃を一人にしたのでは？ と白銀は考えた。転びそうになった真妃を見た瞬間に罪悪感を抱いてしまった。そこで石上を光夜に預けてから真妃の隣に立った……。石上は（恐怖のかぐやの近くに自分を追いやった）白銀に対して恨みの籠った視線を向けていたが。

が、眞妃は白銀が言うほど寂しさは感じていなかった。恐山に来るまではかぐやと舌戦を繰り広げたりして、先も言った通り最後列にいたところで会話がなかった訳でもなかったから。むしろじっくりと周りを見る事ができて満足さえしていた。

「……………でも御行が隣にいてくれるのなら」

「……………ありがとう」

眞妃は小さな嘘をついた。

「(会長……………恨みますからね!)」

白銀と眞妃が二人並んで歩く中、残りの四人の集団に押しつけられた石上は冷や汗をかいていた。気配りができると評判の光夜は石上のために何をする事もなかった。(そもそも石上がかぐやに恐怖している事を知らないから)

「石上君」

「ひいっ!」

「(四宮先輩! 僕の方なんて見てないですつと光夜の方を見ていて下さいよ!)」

石上は不意にかぐやに見られ(石上からすれば睨まれているように見えている)声をかけられた事で声が裏返ってしまった。

「(石上君……………。会長、ナイスアシストです。これで藤原さんを光夜から遠ざけて二人きりになれるわ)」

当然白銀にそのような意図などなかったが、勝手にかぐやの中で白銀の株が上がった。

「藤原さん。石上君が何か話があるそうですよ?」

「(この流れ、乗るしかない!)」

藤原を遠ざげたいかぐやと、かぐやから遠ざかりたい石上の目的が一致した瞬間であった。

「……………藤原は何も考えてないだろうがそういえば光夜は何でここに来たがつっていたんだ?」

石上が藤原の手を引いてかぐやと光夜から離れる中、眞妃と恐山の事について話していた白銀はある違和感を持った。恐山を訪れた理由としてはかぐやは光夜に着いていくため、そして自分は当時好きだったかぐやに付いていくため。石上も同じような理由だし眞妃の理由についても聞き及んだ。積極的に恐山に行きたがっていたのは藤原と光夜のみ。

藤原は面白半分というか、しかし観光目的だという事は分かった。

「(なら光夜はどうだ?)」

ヒントは死者と語り合えるというこの場所。

「(光夜は誰かと死に別れているのか?)」

かぐやですら気づいていない、光夜の真の動機について白銀は眞実への扉を開きかけた。

光夜以外は知らない。なぜ光夜が真に恐山を訪れたがっていたのかという本当の理由を。それはかぐやでさえも。彼は観光を第一の目的として来た訳ではない。死者と語り合うためにここに来たのである。

賽の河原、極楽浜を見ながらここが死者の集まる場所であり、自分の両親もここにいるかもしれないと思ひ至る。

「ん、千花。電話鳴ってない?」

後ろで石上とやいやいややっている藤原のスマホが鳴った事に気づいた光夜が声をかける。

「あ、影島からです。あと数組で順番がくるそうです! この距離ならゆっくり歩いても間に合うと思いますよ!」

「(もう少しで父さんと母さんに会える!)」

光夜は内なる興奮に冷めやらぬ熱を抱き始めていた。

「……………え? 今、何て……………?」

「その…………… 前の人の霊媒が終わった時にイタコさんが腰をやってしまったようで……………」

イタコの高齢化という問題がある。今回光夜達が霊媒をお願いしたイタコはもう80を優に超えたおばあちゃんである。そしてそれ

ほどの高齢のおばあちゃんであるのならやってもおかしくな
い。……腰を。

光夜は影島に釣られてイタコのおばあちゃんに目をやる。

「あばばばばばばば」

「……流石にこれでは霊媒どころではありませんね」

光夜は恐山に来た目的をへし折られて肩を落とした。

20話 四宮かぐやは運ばせたい

結局イタコの口寄せはできなかった。光夜達が並んでいたイタコの腰が治る気配は全くなく、またこれから他のイタコの列に並ぼうと思えばいつ自分達の番になるかも予想もできないから。それに次のイタコも腰をやらかす可能性も0ではない。だってお年寄りだもの。敬わないと。

光夜達はまだ見ていなかったところを観光してから恐山を後にした。誰一人として話題にも出さなかったために「入るとしても後だね」と言った温泉に入る事もなく。

藤原家の使用人、影島が運転する車に一同は乗り込み山を降りていく。

「そういえば、これからどこに行くんですか？」

全体の工程を知らない石上が尋ねる。

「取り敢えず一回宿に向かおうかな？ って思ってます。皆さん、荷物もあるでしょうし。勿論昼ご飯とか食べてからですけどね。その上でまだ元気とかだったらどこか観光に出かけましょう！」

その話を聞いていた（この中では唯一の一般庶民である）白銀は「宿」という言葉に強く反応した。

「俺は正直この高級リムジンに乗っているというだけで傷をつけたらどうしよう!?! とか思ってるくらいなんだが……宿、か……」

「……どんな宿なんだ？」

「俺達は学生旅行をしに来たんだよな!?!」

白銀は宿のランクが高くない事を願う。

「宿に関しては自分じゃなくて姉さんが押さえてくれたので」

「(終わった……)」

白銀は絶望した。光夜も金持ちの部類に入るが幼少期に親が常識的な金銭感覚を覚えさせた事、そして四宮の苗字を捨てた時は父、虫庵の遺産で生活に困る事はなかったものの決して裕福とは言えない暮らしを送っていた事から、ここにいるかぐや、真妃、藤原に比べれ

ば光夜の金銭感覚は白銀に近い。

現に彼が提案した「学生旅行」は白銀が考える「学生旅行」とかけ離れたものではなかった。最終的に助かったとはいえ藤原千花^{高級リムジン}までは白銀の抱く「学生旅行」の歯車は正常に作動していた。

「そこまで身構えないで下さい会長。私もこの旅行が「学生旅行」だという事は分かっています。普段家の用事で使うような場所は選んでいません。所謂普通の宿ですのでそんなに心配なされないで下さい」（四宮が言うなら……）」

と白銀はひとまず緊張を解く。

「……これが普通……？」

だが四宮の人間にとつての「普通」とは、庶民にとつての高級以上であり信用してはならないのである。

影島に送られて辿り着いた先は……荘厳な日本家屋の門構えをした旅館。敷地が広すぎるからかここからでは全体を臨む事すら難しい。

「これが普通……？」

この光景を目にしてもかぐや、光夜、真妃、千花が驚いた様子は見えない。白銀は「自分がおかしいのか!？」と錯覚すらしてしまう。

「安心して下さい会長。あの人達がおかしいだけです」

動揺こそしなかったがこの宿が「普通」ランクでは絶対でない事、石上は分かっていた。

宿の名前は「黒石庵」。その広大な敷地面積を活かして客室は全室離れを実現している。建物は巨大な日本家屋の古民家をリフォームしたようなもので、まるで一つの豪邸を貸し切っているような感覚だ。この巨大な敷地が一つの集落のようである。

「ではチェックインに向かいますようか」

動揺で膝を振るわせる白銀を置いて一同は入口から最も近い、受付がある棟へと向かった。

「(これが…… 受付…… ? これだけでその辺のホテル越してんだろ……!)」

白銀は依然として動揺を全身で表現していた。

「予約したのは私ですから。チェックインに行ってくださいませね。皆さんはここで休まれて下さい。客室は…… 2人部屋を三室予約しています。私が向かってる間、部屋割りを決めていてはもらえませんか？」

そう言い残すとかぐやはフロントの方に向かっていった。

「さて、どうしようか……」

かぐやに残された一同は頭を抱えていた。三人部屋二室であれば当然男女で区切り、早くに決着がついただろう。簡単に結論は出るはずだった。

しかし一同は男女三人ずつの六人。つまり二人部屋三室という事は…… どこか一室は必然的に男女でペアを組むという事になる。

「(男の子と同じ部屋だなんて！ お父様に怒られてしまいます!)」

藤原は顔を赤くしながらも女部屋を希望した。

「(男子と一緒になんて破廉恥じゃない！ 昔なら光夜と一緒に大丈夫だったけど今はお互い成長してるし…… もし、御行と同じ部屋だったら……)」

眞妃はつい、「もし男子(特に御行)と同じ部屋だったら……」という事を想像してしまい、藤原と同じく顔を赤くしてしまった。尚、彼女の想像に石上は登場しなかった。

女性陣がこう考える一方、男性陣はというと……

「(四宮先輩と四条先輩は論外だ。怖すぎて眠れる訳が無い。あの人達と同室になるくらいなら野宿の方が圧倒的にマシだ。少なくとも精神的平穏は守られる。藤原先輩は中身はアレだけど外面だけはいから別の意味で怖い。それに…… 光夜や会長と一緒にの方が僕はいいな)」

石上は女性陣のように顔を赤くさせるのではなくその逆、顔を青く

させて男子部屋を希望した。

「(四宮は言うまでもなく……藤原もだ。女性陣の中で唯一四条なら気を遣う事もないし……いや！俺は何を考えているんだ！失恋してすぐに他の相手に恋慕するなんて最低すぎるぞ！それに……あいつ真妃にも失礼だ」

白銀も石上と同様男子部屋を希望する。となれば残る選択肢は一つしかない。

「そういえば光夜君はかぐやさんといつも一緒に暮らしているんですよね？」

「そりゃあ姉弟だからね」

光夜のその返答によって実質的に部屋割りには決定した。

「じゃあ男女の部屋は光夜君とかぐやさんですかね？何か異議がある人とかいますか？」

藤原が尋ねるが……しかし異議を唱える事は誰もいない。ここまで来ると事情を知る白銀、石上、真妃は彼女による策略の匂いを感じ取ったが……だからといって藤原の提案に首を横に振る事はできなかつた。

「じゃあ残りは同性同士で組みましょ！真妃さん！よろしくお願ひしますね〜！」

「え、ええ……」

藤原と真妃にこれまで接点はなかったが、藤原のコミュ力があれば問題ないだろう。

「(計画通りにいったようね!)」

そして藤原達の様子を遠くから眺めていたかぐやは自らの策略が成功した事を悟り、唇を弧状に歪ませた。白銀達の予想した通り、言うまでもなく全てかぐやの策略である。

かぐやの目的、それは言うまでもなく光夜に「異性」として認識される事。様々な作戦を立案したが、まずは同じ客室に宿泊する事が大前提。かぐやは光夜と同じ客室に二人きりで宿泊するために策謀を

張り巡らせた。

当初、同行が決定していたメンバーはかぐや、藤原、光夜、白銀、石上であった。この女子二人、男子三人だと光夜と二人部屋になるのは難しい。まず人数が奇数であるという事。そして分けたとしても高確率で同性の藤原と組む事になるという事。そこでかぐやは男女の人数を同じにして偶数とするべく、光夜に対して「誰かもう一人、知り合いの女性を誘って」と持ちかけた。言うまでもなく光夜の女性関係を精査する目的もあった。

こうして追加されたのが四条真妃。かぐやはよく知る彼女が光夜に選ばれた事に一瞬憎悪しかけたものの、自分が知らない人が来た場合よりかはマシだと考え憎悪を収める。

「(先日の女子中学生を誘うとも思いましたが…… 光夜が選んだのは真妃さん。現状では真妃さんを一番警戒するべきね)」

尚、かぐやは以前光夜と話していた中学生が白銀の妹である事を知らなかった。もし圭を光夜が連れてきた場合、全ての作戦が水泡に帰っていた可能性もあった。

そんな事は知らないかぐやは男女三名ずつで三部屋とった場合、男女の部屋は自分と光夜のペアになると確信していた。この中に交際しているカツプルはいないから。

「(真妃さんは当然ですが人の姿をした家畜の藤原さんも一応の慎みはあるでしょう)」

彼女達が自ら進んで異性と組むとは思えなかったし、白銀や石上に對しても同様である。

かぐやは全てを確信した上で、敢えて部屋決め会議に参加しない事によって作為の匂いを消し去ったのだ。

「では…… 私と光夜は向こうのようです。会長と石上君の部屋と真妃さんと藤原さんの部屋は…… あちらのようですね。会長、これ地図です」

チエツクインから帰ってきたかぐやが地図を持って先導していた。

受付棟を出てしばらく歩いて突き当たりに辿り着くと……かぐやがそう言った。

かぐや達の部屋はこの角を右に、そして白銀達と眞妃達の部屋はこの角を左折すると到着するようだ。

「やけに遠いのねおぼ様」

「人気宿ですからね。私が予約した時は既にその三室しか空いていませんでした」

嘘である。かぐやがそんなミスを犯す訳が無い。日程が決まった瞬間に策を実行するために宿を予約した。現に白銀達の部屋と眞妃達の部屋は隣だ。

しかし彼女達の部屋とかぐやと光夜の部屋は集落の中でもお互い対角線の位置で、最も離れている。かぐやの「邪魔を許さない」という強い意志が感じられる。

「せっかくのチャンスなのに藤原さんに邪魔される訳にはいきません」

かぐやの中での藤原の評価は低かった。

「お、大きいね……」

白銀達と別れて姉弟で歩き、客室に辿り着いた。光夜達が辿り着いたのはこれまで歩きながら見てきた客室よりも……明らかに大きかった。そして周りに他の客室も見当たらない。明らかにかぐや達の客室だけが異常だった。

「(光夜と泊まるのです。当たり前です)」

白銀、眞妃達の客室とは違ってVIPルームだった。

「ひ、広い……」

普通に6人全員一室に泊まる事も可能な程の広さ。だってVIPルームなもの。

「(部屋も一つじゃない。これなら)」

「ねえかぐ姉、自分達も昔みたいに小さい訳じゃないから——」

「ベッドはこの部屋に二台だけみたいね。布団はないみたいよ」

「(しつかり仕事はしてくれたようね)」

元々この部屋はベッドではなく布団であったがかぐやが大枚をはたいてベッドを二台、同じ客室に用意させ、そして布団を撤去させた。重いベッドを運ばされた可哀想な男のスタッフは哀れ、ギックリ腰になっただらう。

ついでに言うならばかぐや達のVIPルーム以外の、白銀達の部屋でも3人は余裕で収容できるが……かぐやが布団を2枚残して撤去させた。こちらの担当は楽だったらしい。

光夜と同じ客室で過ごす事、そして同じ部屋で眠る事が決定した。これがサタン柏木であればダブルベッドを用意させていたところだが……そこまでは頭が回らなかったらしい。

しかし同じ部屋で眠るなんて事、随分と久しくやっていない。これだけでも非日常を演出する事はできるだろう。

「(ひとまずここまでは予定通りね！ それなら！)」

かぐやの作戦は次のステップに入る。

「じゃあ光夜、次は——」

「まだ体力も有り余ってるし御行先輩達とどこか出かけようよ！」

「えっ？ ちよつと？」

伏見光夜は影島の車の中でこう言っていた。「その上でまだ元気とかだったらどこか観光に出かけましょう！」と。イタコに自らの両親を口寄せしてもらえなかった彼はまだ体力が有り余っていた。

多大な費用と時間と労力を使ったかぐやの作戦は早くも崩れかけていた。

21話 四宮かぐやは入りたい

「まだ体力も有り余ってるし御行先輩達とどこか出かけようよ!」

伏見光夜の一言。彼のその言葉によってあらゆる計画が失敗に終わった事をかぐやは悟った。「一緒に(誰もいない)夕焼けの外を二人きりで散歩する計画」「二人で外の観光に出かける計画」「二人で—— E t c」

少なくとも昼から夕方までにかけてかぐやが立てた計画は水疱に帰した。いつものかぐやであればこの段階で藤原を内心罵倒するところか早坂に愚痴り始めているところだが——かぐやの顔に絶望の色はない。

「楽しかったねかぐ姉!」

「そうね光夜」

「今日の私は少し違うのですよ」

今日のためにどれだけかぐやが金銭と時間と労力を費やしたと思っている。これっぽちの問題、今日のかぐやにとっては想定内。

「夕方までは皆さんで観光地を巡る、夕食も既に食べてるのでプランCとプランH—2は難しそうですね……。プランS10でいきましよう」

プランS10! 佐藤 それは夕食までかぐや達が二人きりの時間を確保できないものの、それまで生徒会のメンバーと観光地を巡って『旅の雰囲気』というものを十二分に実感できた場合に彼女が探るべきモデルルートである。『旅の雰囲気』というものを全面に押し出し、ムードと勢いに長けた戦術である。

かぐやは旅行が決定してから今日まで、ありとあらゆる可能性と展開を予想し数多のモデルルートを作成してきた。その数、実に千に及ぶ。

千に近い手段を用意したところで当日にはその中の一つしか使わない。それ以外の手段は必然的に無駄となる訳だが——

「千の備えで一使えれば上等です。可能性のあるものは一つ残らず用意しておきます。それが私のやり方です。それに……せっかく

の機会です！ 無駄にはできません！」
かぐやの執念は凄まじいものだった。

「夕食も美味しかったですね光夜」

さつきまで白銀達と共に夕食を食べていた。二人の腹はまだ膨れており、光夜は客室備え付けの長椅子に腰掛けて食休みをとっている。かぐやは不自然さを一切出さないようにして光夜の隣に腰掛けた。

「(かぐ姉、ちよつと近くない?)」

普段よりも近い距離にかぐやは腰掛けた。光夜は長椅子の端に座っているためかぐやから距離をとる事はできない。

二人の距離はまさしく、かぐやが攻略を開始した時、光夜がかぐやの真意を図りかねて早坂に助けを求めたあの日と同じかそれ以上に縮まっていた。無論全てかぐやの策略である。

「ちよつと狭いから少し——」

「明日はどうするの光夜？ 明日の計画を固めたんでしょ？」

光夜の抗議を遮りかぐやは矢継ぎ早に話題を転換する。現在光夜が見ていた観光雑誌に視点を誘導する。

「光夜は明日の予定、今のところどこに行くつもりなの？」

広げていた観光雑誌をかぐやは光夜の肩口から覗き込むようにして見る。必然的にかぐやと光夜の肩が密着する形となる。

「(ちよつとこれは、流石に姉弟でも距離が近いんじゃない?)」

「ねえかぐ姉、ちよつとこれ近——」

「光夜と旅行するのも初めてですからね。私、今とてもいい気分なんですよ。これが藤原さんが以前言っていた「旅の雰囲気」というものなのでしょうね」

「旅の雰囲気」。それは旅行先にて感じる非日常感。いつもよりテンションは高揚し、日常ではあまり採らない行動もとってしまう非日常イベントの宝庫となる空気感である。

「(かぐ姉も楽しんでくれてるんだ!)」

そしてかぐやが楽しんでいる、という事は恋愛感情抜きにしてもシスコン気味である光夜にとっては喜ぶべき事である。かぐやと密着する事は光夜にとって嫌な事ではない。かぐやの雰囲気や台無しにするほどの優先順位ではないと光夜は判断した。

「(それなら、別にいいのかな)」

光夜はかぐやに対してその距離感について何も言わなくなった。

かぐやは光夜のその様子を見て、光夜から見えないよう右手でガッツポーズをした。

かぐやが予約したこの旅館は全室に源泉掛け流しの露天風呂が併設されている。そしてかぐやと光夜の客室はVIPルームであるため周りに他の客室はなく、人目を全く気にする事もなく絶好のロケーションを独占する事ができる。

「じゃあ光夜。先に入ってきたくない？」

二人長椅子の上に並んで談笑を楽しんだ後、かぐやの作戦は次のステップに移行した。

「分かったよかぐ姉」

そしてそんな事など知らない光夜は素直に答えて、浴場に向かった。

「うわあ、凄いな」

扉を開けると生卵が腐ったような、しかし不快感を感じない硫黄の匂いが鼻腔に広がっていく。

既に日は落ち、月光に照らされた雄大な大自然を背に光夜は身体を洗っていく。そして泡を流してから岩で形作られた湯船に入る。自分が大自然の恵みを一身に受けていると実感する。

客室の光はここまで届いておらず浴場の光源は月光と、事故防止のためか通路には明度を抑えた間接照明が施されている。暗すぎず、そして明るすぎない環境が光夜の心を落ち着かせていた。

「(今日のかぐ姉、何だかいつもとちよつと違ったな)」

かぐやの「異性として見られる事」についてはともかく、「光夜に意識される事」という観点においてかぐやの目的は達成されていた。

光夜とて健全な男子高校生である。姉弟だからという心理的ブレーキこそあるが絶世の美女と称されるかぐやがいつもより近くにいた事で…… 思うところはあつたらしい。

かぐやは同じ部活動に属する藤原の胸部をよく殺意の波動の目で見ていたが——対光夜に限ってはその心配は杞憂であった。

伏見光夜は貧乳好きだったから。——貧乳はステータス——だと本気で思っていたから。

かぐやの可愛い胸部は光夜にとってはパーフェクトだったのだから。

「何てね。さつきから変な事考えてる。疲れてるからかな」

今日は朝が早く、そして前日まで今回の工程の準備をしていた光夜。肉体的にも疲労は溜まっている。

「違うな。それも勿論あるけど…… 分かってるんだ。もう猶予なんてない事を」

数ヶ月前、かぐや達が羞恥淫学園を繰り広げていた時に突然電話で告げられた提案。その期日がもう迫っている事に光夜は精神的な疲労を抱えていた。

「ダメだダメ。もう決めたんだ。あいつらと戦うんだって。——英気を養うために休まない」と

改めて肩まで湯に浸かり息を大きく吐く。全身を包み込む暖かさが光夜の疲労を溶かしていく。

「(光夜は入ったようね)」

光夜が浴室に向かつて数分。身体を洗い終えて彼が露天の岩風呂に入った音をかぐやは確認した。かぐやはしゅるりと紐を解いて自らの身体を纏っていた布を脱ぎ去っていく。この女、偶然を装って弟の浴室に突入する算段である。

かぐやの目的とはこれまで何度も述べてきたが、光夜に異性として

見られる事である。そして異性として見られるためには性の違いを認識させる必要がある。

一緒の風呂に入る事、混浴。そんな事、現在同じ屋根の下で暮らしているといえやっただははずもない。

二人が育つたのは「四宮家」である。第二次性徴期を迎える以前でさえ二人仲良く湯に入った事はない。すなわちこれが初めて。

「(流石に、タオルがないと私の方が緊張で固まりそうね)」

そしてこれは仕掛ける側のかぐやにとっても相当な緊張が走る。しかし途中で恥ずかしさのあまり逃げ出すなどしてしまえば全てが水の泡。かぐやはバスタオルを纏ってから浴室に繋がる扉を開いた。

ガチャリと扉が開く音がする。

「え？ ガチャリ？」

浴場の暗さのせいでドアの方をはつきりと見る事はできない。ピチャピチャと濡れた地面を歩く足音が数回した後、光夜がようやくよく見る事ができたのは——月光に照らされたかぐやの姿だった。

「か、かぐ姉!? さつき先に入ってるって言ったじゃん!? まだ入ってるよ!?!」

「そういえばそんな事も言っていたわね。ごめんなさい、すっかり忘れてたわ」

嘘である。

「とりあえず！ さつきと出るから！ かぐ姉は目をつぶって——」

「待って光夜」

慌てて浴場から出ようとする光夜の腕をかぐやは掴んだ。

「まだ湯船に浸かって短いでしょう？ せつかくの温泉ですから満足するまで浸かっていなさい」

「いや、でも——」

「何か問題でもありますか光夜？ まさか姉弟なのに照れているの？」

ふふふ、お可愛い事。確かに家じゃあこんな事しないけど——ここは旅先よ?」

言葉のマジック。現在光夜はかぐやによって「旅の雰囲気」と「姉弟だから」という言葉の鎖によって脳を侵食されていた。加えて湯船に浸かっていた事から光夜の理性も普段のように働く事はない。次第に……

「(自分の方がおかしかつたのかな?)」

といった錯覚まで引き起こされた。

「私もこれからまた服を着てまた脱ぐという作業は煩雑ですからね。光夜、少し浸かっていなさい」

かぐやは光夜にそう言うってから自らは洗い場に向かう。光夜は未だ状況を完全に把握しているといった様子はなく、姉に言われたようにただ茫然と湯船に浸かっている状態だ。そんな光夜を見てかぐやは満足げにしていた。

「(一体これはどんな状況で……)」

かぐやは身体を洗った後、光夜と同じ湯船に身体を浸からせた。光夜は視線を向ける先に困っているのかかぐやと反対側、入口の反対側の風景を見て自らの動揺を悟らせないようにしている。ただ耳の先まで真っ赤になっており、全く隠せていなかった。

「(光夜が私に照れてる……!!)」

姉弟としては完全にアウトな発言だが、しかしかぐやは光夜のそんな様子に口元を緩ませる。

桶狭間の織田信長が如く、浴室を奇襲したかぐやがこの場の主導権を完全に握っていた。

いつもの光夜であればかぐやが身体を洗っている間に温泉を満喫したなどと理由をつけてこの場から撤退する事もできたが主導権を握られているからかその手段に思考が到達していない。

「さっきからどこ見てるの光夜? —— あら、綺麗ね」

光夜がかぐやの反対側の方向を見ている理由をかぐやは知っているのだが敢えて惚け、光夜の肩に手を置き、彼の見ている先をかぐやは後ろから見ろ。

必然的に湯船の中で光夜とかぐやは密着する形となる。

「そ、外が綺麗だなあ……… つて！」

「落ち着け！ 落ち着くんのだ！」

当たり前だが光夜は網膜に映る景色の事など見えてはいなかった。

一見攻守は明らかに思える。しかし………

「きゃーっつ!! 光夜が！ 頬を赤くしてるわ!! で、でもこっち見られたらどうしよう!?!」

湯船に浸かる際にかぐやはバスタオルを外している。現在は光夜が目を逸らしているために攻守関係が鮮明に別れているだけ。

ひとたび光夜が意を決して姉の方を振り返れば戦況は一瞬にして変化する事をかぐやは悟っていた。

傍目には見えないが激しい戦闘がかぐやの脳内では繰り広げられている。

「きゃーっつ!! 恥ずかしいわ!!」(弁護士かぐや)

「耐えなさい！ この瞬間を！ どれだけ待ち望んだと思っっているのですか!?!」(検察かぐや)

「(で、でも！ これ以上このままだと私の方が!!)」(弁護士かぐや)
「もう少し！ もう少しだから！ あなただっって光夜に女として見

られたいでしょ!?!」(検察官かぐや)
「(見られたい!!)」(弁護士かぐや&裁判長かぐや)

脳内議論の熱気と共に無意識にかぐやは光夜を強く抱きしめて
いって………

「え、光夜……… 光夜!?!」

その状況に光夜は耐えられる訳もなく顔を赤くしたまま沈んで
いった。

「う、うう………」

「こ、光夜!?! 良かった！ 目が覚めて！」

光夜が浴室で意識を失ってから数分後、光夜は意識を取り戻した。

「軽くのぼせたみたいね…………ごめんなさい、私のせいね…………」
光夜が倒れてから数分後、彼は目を覚ました——かぐやの膝の上で。

光夜が倒れた時、かぐやはパニックに陥りかけたが冷静を取り戻し光夜の簡易的な診察を行う。

かぐやは四宮家の天才である。基本的な医学の知識も持っている。光夜の症状が軽い熱中症に似た「のぼせ」である事をかぐやは見抜いたため彼の身体を的確に冷やした上で安静に寝かせてあるのである。

「(確かに私は光夜に赤面させたかったです私——)」

光夜を傷つけたかなかった。かぐやは自己嫌悪に陥っていた。
「(私はいつもやり過ぎる…………)」

かぐやのそんな様子に——光夜は気づいた。確かに浴場の中での出来事に動揺した光夜だが——彼も姉には傷ついてほしくない。

「旅の雰囲気、だよ。分かってるよ…………ほら、平気だから気にしないで」

少しふらつきながらも立ち上がり、かぐやに自らの無事をアピールする。少しでも彼女の罪悪感を削るために。

「……………」

ただ光夜の行動はかぐやを傷つけた。光夜が立ち上がる、それはつまり膝枕の終了を意味していたから。かぐやが予定していたプランS10も最後まで進める事ができていない。しかしこれ以上光夜に無理をさせる訳にもいかない。

「(今回も失敗、ね…………)」

自嘲気味にかぐやは微笑んだ。しかし今回は藤原も誰も悪くない。完全なる自業自得。

「んー、もうちよつと休もうかな」

一方光夜はかぐやを安心させるために立ち上がったが——まだ立ちくらみが生じていた。思考はまだ正常には程遠い。光夜は、光夜の本能は彼が最も心が休まる場所への帰還を望んだ。

「えっ？」

それは言うまでもなく——先ほどまでいたかぐやの膝の上。

「(光夜は優しいわね。それに…… 私は光夜に酷い事をしたというのに——胸が暖かくなる)」

恋心とはある種人間を単純にさせるもので、光夜との一時がかぐやの悩みを全て洗い流してくれる。

「……か、ぐ姉……」

そしてかぐやはもう一つ、大きな誤解をしている。かぐやは自分の作戦を最後まで完遂できなかったからこそ、光夜に女として見られる事は今回も失敗したと思っている。——しかしそれは違う。

かぐやが気づかないのも無理はないだろう。

光夜のその紅潮しきった頬を見てないからである。

22話 四宮かぐやは諦めたい

夏休み。それは普段の日常たる学校がなく、男女で多くのイベントをこなす事ができる潜在能力を持った期間である。

そんな夏休みを有意義に活用するためには——スタートダッシュが肝心だ。

最初に男女でどこかに出かける事ができたならば「次は皆であそこ行こうよ！」など、自然な流れで次なる予定が埋まっていく。

しかし夏休みスタートを同性のグループだけで過ごしたならば……男女混合の心理的ハードルは上がり、同性だけで夏休みを終える事になるだろう。いや、それはそれで楽しい事は間違いないのだが。

その点で言えば、生徒会のメンバーは夏休みスタートダッシュに成功したと言えるだろう。夏休みに入った直後に男女で旅行に出かける事ができたのだから。行き先に疑問はあるものの、生徒会メンバーは理想的なスタートをきる事に成功した。事実、ある男女は現在も順調に仲を深めていつている。そんな中……

「早坂ー」

「……何ですかかぐや様」

かぐやは流れに乗り遅れていた。

「かぐや様、恐山では光夜様と二人きりになれたじゃないですか。あれだけ準備をしてきて——結局何もできなかったんですね」

「う、うるさいわね」

早坂は恐山旅行に、かぐやの警護という目的で着いてきていた。ただ早坂の尾行は事前に知っていたかぐやと光夜以外、知る由はない。

「第一あれは……仕方がなかったただけで！」

かぐやは何かに言い訳するかのようには言葉を捻り出す。

夏休み。それは男女において多くのイベントをこなす事ができる潜在能力を持った期間だが——ことかぐやと光夜に限っては例外だ。

かぐやと光夜は既に家族。普段から同じ家で過ごし、食卓を囲む。いわば毎日が他人で言うところの夏休みマジックだ。

そんな環境に身を置いておきながらこれまで何の進展も見出す事ができなかつたかぐやに——夏休みマジックなど訪れる訳が無い。

「もう旅行の事は置いておいて、また光夜様をデートに誘われたらどうですか？」

前回の誘いは、光夜が眞妃との先約があり、そして期末テストでかぐやが3位だった事の慰めもあつたりして有耶無耶になっていた。

「(と言つてもきつとまた嫌がるんでしょうけど)」

早坂はかぐやからの返答を色々想定する。

「仕方ないですね。また私からかぐや様の背中を押しますか)」

「じゃあ私から光夜様を誘ってきます——」

「待つて早坂！」

案の定、返つてきた返答に早坂は息を吐く。

「かぐや様。そんな事だといつまで経つても——」

「やめて！」

「かぐや様……？」

しかしかぐやのその返しは早坂が想定していたような、照れからくる拒絶でも天邪鬼からくる拒絶のいずれでもなくそれは——本心からくる拒絶だった。

「(私に光夜の隣に立てる資格なんて……)」

かぐやは自らのせいで光夜を傷つけてしまった事を悔いていた。

「(あー、これは何か精神的に参つてますねー)」

護衛のために尾行したとはいえかぐやがなぜこうも参っているのか、客室の中の様子を知らない早坂がその理由に辿り着く事はない。

「(精神的に参っているかぐや様は何度も見た事がありますが……)」

ここまで弱っているのは随分と久しぶりに……)」

多少弱っている程度なら強引にけしかけるといふショック療法も有効ではあるが……)」

「(ここは、少し様子を見た方がいいのかもしれない)」

早坂はそう結論づけ、用意していた映画のペアチケットを懐に仕

舞った。

結局、かぐやから何かアクションを起こす事はなかった。普段の日と何も変わらず夜を迎える。

「ありがとうございます。頂きます」

光夜に対して含むところがありませんが、かぐやと光夜は家族であるため食卓を囲んで顔を合わせる。

普段であれば家族での食事は一日の中でかぐやが楽しみにする時間だが、今日ばかりは少し憂鬱だった。

「……………」

そして姉のそんな様子に気づかない光夜ではなかった。

「ちよつといい？ 早えもん」

やはりこんな時、光夜が頼るのは早坂を置いて他にない。夕食が終わってそれぞれが自室に戻る中、光夜はかぐやの目を盗んで早坂の部屋に辿り着く。

「その呼び方やめて下さいって。でも私も光夜様に聞きたい事があったので丁度良かったです。——かぐや様の事ですよね？」

「さっすが早えもん！」

「だからその呼び名やめて下さいって」

「なるほど。つまりかぐや様が旅先で暴走して光夜様を気絶させた、と。それでかぐや様は弱っていたのですね」

光夜は早坂に旅館の中で一体何があったのか、全て話した。無論、この事によって後にかぐやが近侍から全力でイジられる事になるのは言うまでもない。

「もしかして姉さんはまだその事を気にしているのかな？ って思っています。自分は全く気にしないって何回も言ったんだけど」

「(おそらくそれもかぐや様に気を遣ったの発言だと捉えたのでしょ

うね。かぐや様、気が弱るとことんネガティブになる方ですから」
「姉さんはどんな感じかな？ しよつちゆう姉さんの部屋に行っている早坂なら何か分かるかなって」

「そうですね。かぐや様はお帰りになられてからずっと、何かを気になされているようでした。光夜様が考えられているように罪悪感を抱かれているのかもしれませんが。光夜様の言葉もおそらく、自分に気を遣ったものだと考えられているのでしよう」

「そっか……………」

光夜は本心から気にしていなかったが——その事を言葉だけではかぐやに伝える事ができない。

「言葉で足りないのなら……………」

「ねえ早坂、姉さんの予定が知りたいんだけど」

光夜の中の長いモラトリアムは終わりを告げた。

「はあ……………」

「本当に私、何をやっているのかしら……………」

光夜と早坂が密会している中、かぐやは自室のベッドに顔を埋め、絶賛自己嫌悪の沼に陥っていた。

「(光夜の顔を見て気まずいなんて……………)」

そんな経験、これまでなかった。かぐやが初めて光夜と出会った1年前から、そしていつからか初恋を抱いてからもずっと光夜の近くにおいて苦しむ事などなかったはず。それなのになぜ……………

「……………いいえ。理由は分かっています」

かぐやが光夜の事を好きになっただけからもう10年近くが経つが——ここ数ヶ月で大きく変わった事がある。

「恋をする事。そして自分を好きになっでもらうように行動する事は……………このように苦しく、辛く、不安を伴うものなのですね」

これまでクラスメイトが意中の相手と恋仲になるために四苦八苦している様子を内心馬鹿にしていたかぐやだったが、今となっては彼ら彼女らに尊敬の念さえ抱いていた。

「私もこれまで頑張ってきたつもりですが、一向に結果が出ないとい

う事は…… そういう事なのでしょうね」

「こことは違う世界とは違つて自らへの脈ありのサインさえ感じられないかぐやの思考は——最悪の方向へと進んでいく。」

「光夜は私に気がない。私に向けてくれる気持ちはどこまでいつても姉弟のそれ」

「私と光夜が結ばれる事はない……」

アタックを幾度となく仕掛けながらも失敗し、その中で考えないようにしてきた「諦め」という二文字がかぐやの脳内を支配する。

「(負けを認めず惨めに這いつくばる事ほど醜いものはありません……)」

「わたし…… しは……」

頭では分かっている。しかし心が全力でその判断を邪魔しかかってくる。

「(本当に諦められるの？ 自分の気持ちを押して殺して、前に進めるの？)」

「それでも…… 私と光夜が結ばれる事はもうあり得ない。私たちは姉弟です。このまま惨めに挑戦し続けたら——姉弟の関係さえ壊れてしまう」

かぐやと光夜の恋愛は、普通の恋愛ではなく姉弟の関係を失つてしまふかもしれない Dead or Love。ただ猪突猛進に突き進むだけでなく引き際も考えなければならぬ。決して引き際を、間違えてはならない。

「勝算のない勝負にリスクが大きすぎると言っている…… だけです。例えば恋仲として結ばれなくとも光夜とはこれからも姉弟として近くにいられます」

頭では分かっている。心の中から湧き上がる想いを抑え込むようにかぐやは両の拳を強く握りしめる。

「今のこの関係さえ崩れてしまえば私は…… 生きていけない！」

分かっている。この事実が、今の関係が崩れてしまうという途方もない恐怖がかぐやの理性で強く渦巻いている。

「それなら私は…… 光夜と恋仲になる事を諦める事だ……」

「(本当にできるの?)」

「ツー」

いつものような、秩序が保たれた脳内裁判ですらない。検察官か裁判官か、誰の声とも分からない声がただひたすらかぐやの心の底から湧き上がってくる。それはかぐやの目を自らの本音から逸させないように、自分の本音を伝え続けるように。

「(本当に諦められるの? 光夜と結ばれて、放課後は手を繋いで帰ったり、恐山とは違って真正銘二人でどこかにお出かけしたり。修学旅行で二人こっそり抜け出して夜の街を歩いたり、高校を卒業して今みたいに毎日会えなくなるようになっても彼の隣に立ち続けていたいと、そんな未来をあなたは、本当に諦められるの?)」

「それは…… 私は……」

「(確かにお父様はお許しにならないかもしれない。兄様からも妨害を受けるかもしれない。そんな中でも二人なら、光夜となら! 彼と二人手を取り合って、隣並んで生きていって、心を通わせて、どんな苦難があつたとしても同じ時を刻んでいく未来を! あなたは諦められるの?)」

「そんなの…… そんなの…… ! 諦められる訳ないじゃないっ
!!」

嗚咽をあげながらも捻り出した声は、理性の鎖から解き放たれたかぐやの本音は——最初から分かりきった解^{こた}えだった。

「(それならもう、答えは決まっているじゃない)」

23話 伏見光夜は夢を見たい

「(それならもう、答えは決まっているじゃない)」

長い脳内裁判、たくさんペルソナの仮面と話して無意識に覆い隠していた自らの本音と向き合い、ついにかぐやは一大決心をする。

「(光夜に会いたい…… 光夜と話したい……！)」

あれだけ光夜の顔を気まづいと思っていたかぐやだったが今、まさに正反対の想いがかぐやの胸に宿っていた。

一刻も早く光夜の顔が見たい。かぐやは自らの決心の赴くままに自室の扉を開いて廊下に出る。

日中とは異なり静けさを持った廊下。家中の使用人も本日の業務を終わらせ自室に留まっている。人の気配のない道をかぐやは進み——目的地に到着した。無論、光夜の部屋の前だ。

「(勢いそのまま出てきてしまったけれど…… 何て言えばいいかしら。そもそも私が勝手に一人で気にして、光夜を避けてきただけなのだけど……)」

かぐやは数時間前に早坂が言った事を思い出す。

「(そうよ。このチケットで光夜を映画に誘うのよ！ 光夜は私の暴走を受け入れてくれた。手を差し伸べてくれた。それなら……！ 今度は勇気を出すのは私の番よ！」

かぐやは覚悟を固めて光夜の部屋の扉をノックする。

「……………」

しかし中からの返答はない。

「(聞こえなかったのかしら?)」

かぐやはもう一度扉を三度叩いた。

「……………」

しかしやはり返事はなかった。

「(もう寝たのかしら……?)」

確かに夕食は既に終わり、人によってはもう眠りに入っている時間帯だ。

「(でも光夜の就寝時間はまだ先のはず……)」

かぐやは光夜の就寝時間から平均起床時間までの全てを把握している。光夜の事を知り尽くした彼女が——まだ光夜が寝るには早すぎるかと断定する。

「早坂！・ちよつと早坂！」

ともすればかぐやが次に訪れるのは近侍の早坂の部屋。先ほどの光夜の部屋と同じように扉を三回叩くが——光夜の時と同様に返事はない。

「早坂？・早坂！」

部屋にいないのならばと、トイレ、風呂場など早坂がいそうなところを徹底的に探すが……

「い、いない……」

早坂を見つける事はできなかった。

「お嬢様、どうかなされたのですか？」

流石に静かと言ってもかぐやが使用人の名前を呼びながら家中を歩き回れば何事かと気づく者もいたようで、かぐやは早坂以外の使用人には会う事ができたのだが……

「ねえ、光夜と早坂がどこにいるか知らないかしら？」

「部屋にいないのでしたら分かりかねます」

誰一人光夜と早坂の居場所を知る者はいなかった。

「(家にいないのは光夜と早坂だけ……。そして光夜達がどこに行ったのかをどの使用人も知らない。流石にこの数の使用人全員が光夜達の姿を見ていないのはおかしいわ。つまり……光夜達には身を隠さなければならなかった理由があったという事……)」

家の中の全ての部屋を探し尽くしたかぐやが導き出した結論、それはかぐやの中で最悪な想像を掻き立てるには十分なものだった。

「(こんな時間に二人きりで外出なんて、そんな……)」

もう子どもと呼ぶには成長しすぎた男女が深夜に二人きりで外出。主と使用人の秘密の逢瀬。信頼していた近侍の最悪の裏切り。

かぐやの中でぐるぐると悪い想像は進み、次第に顔は俯いていく。

涙は…… 止まってはくれなかった。

「早坂…… どうしてよ早坂…… つ！」

「私がどうかされましたかかぐや様」

「早坂は私の気持ちを知っていたはずよ。それなのに——って早坂ア!?!」

振り返ってそこにいたのは——いつも通り、メイドの服装をした早坂だった。

「えつとその早坂……？ 今までどこに……？」

「すみませんかぐや様。少し外に出ておりました」

「外についてあなたね……」

「(べ、別に私は本気であなだが私を裏切ったなんて思っていた訳じゃないのよ?)」

かぐやは心の中で必死に言い訳をしながらも、溢れ出す安堵に口元を抑える事ができていない。

「(どうせ何か理由があったんでしよう?)」

「それで？ 光夜は？」

辺りを見渡してみるが——そこにいるのは早坂だけ。彼女と外出していたと思われる光夜の姿はない。早坂が光夜を置いて先に屋敷に戻る事も考えられないのでかぐやはおかしいな？ と思いながらも早坂に尋ねる。

「流石ですかぐや様。既に光夜様の不在にも気づかれていましたか」

光夜との外出は緊急事態からくる想定外だった。そして早坂以外の使用人は本家分家の差はあるものの、何も四宮家に雇われた者。今回の件を伝える訳にはいかなかった。

故に光夜と早坂は秘密裏に屋敷を抜け出したのだが…… まさかかぐやに気づかれていたとは思わなかった。

「ええ。家にいないのはあなたと光夜だけだわ。それで？ 光夜はどこにいるの?」

「(早坂！ 早く光夜を出して!)」

かぐやには時間的猶予がもうあまり残されていない。

かぐやにはややロングスリーパーの傾向がある。広い家の中、早坂

と光夜を探し回った結果——もうすぐ時計は就寝予定の23時を迎える。

規則正しい生活を送っているかぐやにとって、この時間を越えた瞬間自らの思考力がどんどん落ちていく事を肌で分かっており、ボロを出さないために、姉としてカツコ良く決めるためにも一刻も早く光夜との決着を望んでいた。

「すみませんかぐや様……」

「……え？」

が、そんなかぐやの願いは通らない。光夜はどこ？ とのかぐやの問いに、早坂は謝罪で答えた。

「……どうして謝るの早坂……まさか本当に!？」

早坂の言葉によつて、先ほどまで考えていた最悪の想像がかぐやの脳内で現実味を帯びてくる。よりリアルで実写化に近い映像——つまり最悪な代物がかぐやの脳裏に流れる。

「先ほどまで光夜様と車で出ておりました」

「(車で……まさかドライブデート!?)」

かぐやの顔はみるみる青くなつていく。しかし天はかぐやを見捨ててはいなかった。

「光夜様。突然会社から呼び出されたようで、私も同行していたんです」

「え？」

真実はかぐやの想像を良い意味で裏切るものだった。

「(早坂。最初から私はあなたの事を信じていましたよ？ あなたがそんな薄汚い泥棒猫——藤原さんのような真似をするだなんてちつとも思っていませんでした)」

嘘である。この女、途中から脳内で早坂愛を完全に藤原千花のように思い始めていた。

そんな明らかに安堵した表情を見せるかぐやに対して本人の知らぬところで藤原の烙印を押された早坂は——悪戯心を抱いた。

「かぐや様、先ほどまで何を考えられていたのですか？ 恐山であれだけ大胆な事をなされたというのによくもまあ今更になつて不安に

なつて——」

「う、うるさいわね！　っていうか何でその事知っているのよ！　光夜ね？　光夜に聞いたのよね!?　覚えてなさい光夜！　帰ってきたら色々と聞くんだから！」

しかしその後、夏休みが終わる直前までの約1ヶ月の間、伏見光夜が四宮家別邸に帰る事はなかった。

かぐやは自分の部屋を飛び出すより少し前。光夜はかぐやの部屋の前にいた。

「かぐ姉の悩みを何とかしてあげたい」

早坂からかぐやの悩みを聞き出した光夜は、自らの中で解けた封印もあいまいかぐやと話をしたくここまで来ていた。深く深呼吸をし、扉を三度叩く決意を固める。だが……

「(こんな時に……)」

光夜のポケットに入っていたスマホが、主に対する着信が入った事を知らせるために振動する。せっかくの覚悟が遮られたとして光夜は溜息を漏らす。着信の主を見て自然と気持ちが切り替わる。

「……分かった」

着信の主は光夜の腹心たる石川。彼は些細な連絡や緊急性の低い出来事ならメッセージで済ませる配慮を持っている。そんな彼がメッセージではなくわざわざ電話で連絡してきたという事は……

「早坂、いるか」

「はい、光夜様」

石川からの連絡を受け、光夜は即座に早坂を呼ぶ。光夜の様子を見て、早坂も今朝の「早えもん」と言っていた光夜とは完全に別人として対応を改める。

「運転手の手配を頼めるか。それから帰りが分からない。すぐに帰る事も想定して着いてきて欲しい」

「承知致しました」

早坂の指示通り、即座に運転手が用意され光夜は早坂と並んで後部座席に乗り込む。座席の中で石川から送られた資料を読みながら――

—光夜の表情は苗字変わりのアンタツチャブル、「伏見光夜」の顔に変わっていった。

24話 似非四宮は見せられない

生徒会の構成員^{メンバー}は「伏見光夜」を、穏健な性格で個性的な生徒会構成員^{メンバー}の緩衝材を石上と並んで果たしており、かぐやの悪口さえ言わなければ極めて人畜無害な存在だと認識している。

だが経済界の人間が知る「伏見光夜」は違う。彼らにとって「伏見光夜」とは、あの四宮の苗字を冠していた人間であり、ほんの数年で無名から今や四大財閥に最も近い存在にまで成り上がった存在だ。

今に至るまでに、光夜は「伏見」を潰そうとしてきた企業を全て返り討ちにしてきた。何も当時伏見より格上だったにも関わらず。

「伏見光夜」とはまさしく、経済界の人間にとっては触れてはならない恐怖の対象だった。

しかしいつものあの穏やかな光夜にそのような事が本当にできるのか？　と思う人もいるかもしれない。

「現在の戦況はこれで全部だな？」

「はい」

「相手もまだ小手調べの段階だろう。……容赦はいらん、潰せ」

光夜の目は、かつて石上優を救った時に教師に向けた冷たさ——否、それより数十倍の冷たさを放っていた。生徒会の時とはまさに別人。

しかしどちらかが光夜の演技という訳ではない。

生徒会の構成員^{メンバー}の前で猫を被っている訳でも、「伏見」として振る舞う中で自らの純粋な心を守るために意識して仮面^{ペルソナ}を被った訳でもない。

これこそが光夜が幼少の頃から身につけていた二面性。言うならばかぐやのように後天的に身につけた仮面^{ペルソナ}ではなく先天的に併せ持っていた仮面^{ペルソナ}。

「これは今日明日で帰れるような代物じゃないな……。早坂、ご苦労だった。もう戻ってもらって構わない」

「……承知致しました」

早坂にも言いたい事は当然あるが、この状態の光夜とは完全なる主

従関係。恭しく礼をしてから四宮家別邸に戻っていった。

「相手は……これまたとんでもない相手だな」

今回、伏見傘下の企業に対して攻撃を仕掛けてきたのは「常盤」^{グループ}集団。これまでの企業闘争も常に格上が相手ではあったが今回は話が違う。

常盤集団^{グループ}は四宮、四条には及ばないもの——四大財閥の一つだ。

「四宮、四条に比べて経済力では劣るが——各方面に強い繋がりを持っている集団^{グループ}だな。人脈という点だけで言えば四宮、四条を上回る巨大な集団^{グループ}だ」

故に各方面から協力を取り付けた場合下手をすれば瞬間的には四宮や四条を上回る可能性すらある。

「当主は確か……」

常盤家の当主の顔を光夜は思い出していく。

「典型的な秀才だったはず。華々しい学歴を誇っており、膨大な知識を持っていて。しかし俊敏な動きに弱く予想外の事情に対応する事が難しい」

「ですが当主がそうでも周りの参謀がその部分を補う事は十分に可能でしょうな」

「そうだな」

流星に相手は巨大組織。作戦を間違えればこちらは一瞬で崩壊してしまふ。光夜はかつてないほどに冷静に考えを張り巡らせる。

「こちらに対して攻撃を仕掛けてきた者の特定は終わったか？ 小手調べの段階だからまだ本丸には程遠い存在とは思うが」

常盤集団^{グループ}がいかに人脈情報網^{ネットワーク}に長けた財閥と言えど、その全てと親密な関係を築いている訳ではない。当然、その関係にも軽重は存在する。

「はい。まだ常盤集団^{グループ}に入ったばかりの企業でした。規模も弱小。社長^{グループ}の仰るように捨て駒でしょうね」

そして今回伏見に攻撃を仕掛けてきた常盤の捨て駒は——まだ常盤の傘下に加わって間もない企業達だ。しかも義ではなく利によつ

て従った者達。

当然常盤の下っ端であるため情報を抜き取られる心配もない。伏見に吸収されたとしても全く問題ない文字通りの捨て駒だ。

しかしそれは逆説的に言えばその企業を処分したとしても戦略上何の意味もないという事。潰したとしても光夜に特筆するほどの利点メリットはなくなただ悪評だけが残る可能性がある。その上で光夜が下した決断は――

「そうか。だが攻撃を仕掛けてきたからな。容赦はいらん。潰せ」

「ど、どの程度に？」

迷わず処断を選択した。その決断に石川は一瞬言葉を詰まらせる。

「決まっているだろ。徹底的にだ」

「し、しかし。向こうも本心から向こうに従っている訳でもありませんし、好きで我々を攻撃してきた訳でもありません」

石川の言う事は正論だ。戦略上必要のない処分を下せば後に残るのは恐怖のみ。恐怖は他者との距離を開かせる。それは四宮四条のように単独で十分な力を持たない伏見にとっては致命的だ。

常盤の情報を得る事ができずとも勢力の小さい伏見からしてみれば取り込んで勢力をより大きくする事もできるはずだ。

石川はこの選択は伏見に対して百害を与えて一利も残さないと考えていた。

「見せしめだ。石川、覚悟を決めろ。これは戦争だ。それに相手の大きさを考えろ。少しでも隙を見せればこちらが潰されるぞ」

しかし光夜の考えは違う。今回の相手はこれまでと違う。明日の存亡が怪しい時に空想で彩られた十年先を語る余裕など今の伏見にはない。

「わ、分かりました」

光夜にそこまで言われれば石川も首を縦に振るしかない。石川は知っているのだ、光夜が自分と意見が違うからと他者の意見を聞かない暗君ではないという事を。彼が企業闘争において無類の強さを誇るという事を。

常盤グループの強みは先にも述べたが人脈情報網だ。独善的で独裁的な他財閥とは違って常盤集団は（一見）外交的で、各方面の有力者とも友好で深い関係を築いている。それによって常盤集団は自前以上の戦力の動員を可能とする。

単独では四宮四条に遠く及ばない常盤が同じ財閥の中でも一目置かれてるのはこのためだ。情報網こそが常盤にとっては最強の武器。

しかしだからこそ敢えて光夜はその情報網に挑戦する。常盤集団の情報網を機能不全に追い込めば光夜の追い風となるから。執拗な徹底処断も当然常盤の情報網に風穴を開ける事を期待して。

事実、常盤集団が小手調べに送り込んだ企業が徹底的に潰された事によって常盤の攻撃は緩やかになった。第二陣の攻撃の要請が死刑宣告を意味するようになったから。

常盤集団は（外形的には）上下関係ではなく横の繋がりによって情報網を形成している。今回の伏見への攻撃も命令ではなくあくまで要請の形を採っている。

命令ではなく要請という形の上で、自分達が粉碎する事も厭わず常盤のために奉公しようとする者などほぼいない。

常盤集団にとって人脈情報網は強みでもあり、弱点でもある。

光夜はその弱点を敵を徹底的に潰すという外道な手段で突いた。

「予想通り、攻撃が弱まったな。よし、間者を送り込め」

常盤集団の情報網は現在綻びを見せていた。常盤の協力者達はいつ自分が死刑宣告を下されるか疑心暗鬼に陥っていたから。財閥たる常盤に近づく事は間違いなく自分達の利益となるがそれは自分達が玉碎してまで望む利益ではない。

この状況の中、常盤は協力者達を監視する事はできない。

仮に光夜の予想が外れて常盤が協力者の周りを警戒し、間者の存在に気づいて光夜の工作が失敗したとしても問題ない。この疑心暗鬼の中、監視行為を断行すれば協力者の心は離れていくだろうから。そ

これは情報網ネットワークの更なる崩壊を意味する。

どちらに転んでも伏見の得。光夜はそこまで読んだ上で、以前、かぐやに恋文ラブレターを送った者の身辺調査を行わせた草の者を送り込んだ。

光夜が即座に常盤の下つ端を始末し、常盤に対して間者を送り込んでから数週間が経った。その間、表面的な諍いはすっかり鳴りを潜めていて、両者は初激以降、表立っての攻勢に移る事ができないでいた。常盤集団グループの武器たる情報網ネットワークは伏見によって完全な機能不全を引き起こして伏見に対して攻撃を仕掛けられる状況になく……

一方の伏見も常盤に対して攻撃を仕掛けられないでいた。闘争が始まってからの場の雰囲気は完全に伏見が制していたとしても、圧倒的な戦力差が現実問題として立ちはだかる。常盤は四宮四条には及ばないとしても四大財閥の一角。いくら協力者ネットワーカーの情報網ネットワークがなくとも単体で伏見の戦力を軽く凌ぐ。

どちらも攻撃を仕掛けられない状況。戦況は完全に停滞する。

そんな中でも光夜は秘密裏に工作を進めていた。光夜の予想通り、常盤は情報網ネットワークのこれ以上の崩壊を恐れて協力者の監視をする事ができないでいた。

「社長。嵯峨集団グループの調略、相成りました」

「分かった」

嵯峨集団グループ。それは古くから常盤の中核を成す側近中の側近であったが、今回の伏見との闘争において当主の方針に不満と不信感を抱いた者達。

最初は伏見の誘いに首を横に振っていたが常盤の未来を思いやるとついに首を縦に振った。

嵯峨集団グループを皮切りに、降伏した企業の全てを「伏見」が受け入れた事によって戦況は大きく左右した。ついこの間攻撃した相手を全て受け入れるなんて冷静に考えればおかしい。しかし人は追い詰められた時、その苦しみから逃れるためであればどんなに怪しい嘘だろう

と簡単に飛びつく。

常盤の人脈情報網ネットワークは今や壊滅に追い込まれていた。情報網ネットワークがなければこの闘争の先の常盤はない。そう考えたのだろうか、この闘争は突然終結へと向かう。

「社長。常盤集団グループから和睦の提案が届きました」

「降伏ではなく和睦、か」

戦況は確実に「伏見」が制しており、常盤の武器である人脈情報網ネットワークも甚大な被害を受けている。それなのに降伏ではなく和睦。それはつまり……

「(これ以上やるのならどんな犠牲を払っても純粋な物量で押し切るという事か)」

どれだけ「伏見」が優勢だと言っても単純な物量では四大財閥の常盤には到底敵わない。常盤と伏見がぶつかれば常盤は甚大な被害を受けるかもしれないが伏見は消滅する恐れすらある。

「(そういう意味を暗に示した強気の物言いだな)」

しかし何度も言うが伏見は単独の力で常盤に勝つ事はできない。常盤にそういった意図がなかったとしても力関係パワーバランスが現に存在する以上、簡単に伏見は動く事ができない。常盤が情報網ネットワークを使つてこない場合、情報網ネットワークの弱点を突く事もできない。

「(ここらが潮時だな。石川。常盤の提案を受け入れる)」

こうして一月にも及んだ伏見と常盤の闘争は、伏見が優勢のまま集結した。

「石川。嵯峨集団グループに続いて我々に降ってきた者達はほとぼりが冷めた頃に処分しておけ」

「……え？　しかし彼らは我々の味方になつた者達であつて……」

常盤との和睦が成つた後、光夜と石川は会社にいた。伏見存亡の危機は取り敢えず乗り切つたという事で光夜の顔にはいささか安堵の色が見える。既に光夜は彼女を呼び、彼女が到着するまでの時間を使つて闘争の後処理を行つていた。

彼が最初に命じた事、それは常盤から降ってきて伏見の味方になったはずの者の処断。石川は動揺を隠す事ができなかった。

「嵯峨集団グループは我々が調略を仕掛け、幾度の交渉の後にその誘いを受けたのだ。

だが彼らは違う。こちらから調略を仕掛けた嵯峨と違って彼らは自ずから降ってきたのだ。恩のある常盤を裏切って」

そこには大きな違いが存在する。同じ裏切りだとしても意味は異なる。

「二度裏切った奴は必ずまた裏切る。我々の組織は少数精鋭で成り立っており、戦況が悪くなったからといって誰からも誘われていないというのに周りに同調して降ってくる者など——伏見には不要だ」

「いつもすまないな早坂」

「いえ、これも私の仕事ですので」

常盤との闘争も後処理も済ませた光夜は、かぐやの待つ四宮家別邸に帰らず会社に早坂を呼びつけていた。

「……今はどれくらいだ？」

「全然ですね。まだ2割ほどです」

「……そうか」

光夜は「伏見光夜」の顔になった時は毎回、早坂を呼んでいる。自分の中の「伏見光夜」を捨てるために。捨てられたかどうか自分では分からないため早坂に確認して貰っている。

この闘争が始まった時、早坂も連れて行ったのはこのためだ。一度「伏見光夜」の顔になってしまえばそれがどんなに短時間だろうが光夜は早坂を呼ぶ。

ちなみにこれは業務扱いのため早坂に給料は出る。早坂は普段よりも楽で給料が出るこの時間を実は楽しみにしていたりもする。

しかしながら一体なぜ光夜はこんな事をしているのか？ 決まっている。

「かぐ姉にはこんな醜い姿、見せられないからね」

ボソリと漏らした光夜の言葉を受けて、早坂は今四宮家別邸にいる

であろうかぐやに対して思いを馳せる。
「かぐや様。これ、特別扱いですよ」

25話 四宮かぐやは問い詰めたい

四宮かぐやと伏見光夜はあらゆる意味で従姉弟で当たる。亡き光夜の父親、四宮蛭庵はかぐやの父親の四宮財閥の頂点たる四宮雁庵の実弟であり、光夜の母親、伏見針月は――

「だから姉さん。ここはこう解くの」

「なるほど。じゃあこの応用のところはこう解くんだね！」

「……相変わらずどんな要領の良さをしているのよ姉さんは……」

その姉妹は、妹が学校で学んできた事を姉に教えるという日課に取り組んでいた。姉にはある種の才能があったようで、妹の講義を少し聴いただけで大半の問題が解けるようになっていた。自分が一日かけて他人に教えられるだけに学んだ事を一瞬で物にする姉の才覚に、妹は嬉しいような悔しいような、そんな複雑な表情を浮かべていた。「じゃあ今日の夕食当番は針月だからさく！ よろしくねく！」

まだ勉強道具の片付けも終わらぬうちにさっさとどこかに行く姉に対して妹は軽く溜息をつきながらも手早く料理に取り掛かった。

姉妹は二人で暮らしていた。両親はいない。生きているのか死んでいるのかも今の二人には分からないが少なくとも二人にとって親と呼べる者は最初からいなかった。二人の系図上の尊属は親として、人として大きな欠陥を備えた者達だった。二人の物心がついた頃から家族、というものが機能していた記憶はない。

男は暴力を働き、女はその危害から身を守るためか、子どもを放置して外の男と会っていた。姉妹にとっての家族とは姉にとっては妹、妹にとっては姉を指す言葉でしかない。家族は常に同じ屋根の下にいる外敵達から身を守るために協力し、苦楽を共にしていた。そんな二人にある日、転機が訪れる。

「針月。家を出よう」

それは姉が中学を卒業し、法的に働く事が可能となった日の事。

「で、でも……」

「既に働き口は確保してあるんだ。あの人達に気づかれないうようにして職を探すの、結構大変だったんだよ？」

外敵は性根腐った存在だったが容姿に優れていた。その遺伝子を形式的にも受け継いでいる二人にもその傾向は認められ——皮肉にも血の繋がりを感じさせるものだったが。姉はその容姿のおかげか、所謂夜の職業からのを受けていた。

「……姉さん、高校は？」

「……」

姉は勉強ができた方だった。地域の中の最上位校トッに奨学金付で入れたほどに。しかし働くのであれば当然高校に行く事ができない。必然的に合格を蹴る事になる。

この社会は昔に比べて緩和されたとはいえ学歴社会だ。高校に行かず、中卒というラベル値札はそれだけで姉の将来を狭める。その辺の高卒、大卒よりも優秀であろうと中卒という値札ラベリングは姉の才能に蓋をする。

そんな、姉の未来を狭めてOK。そんな方法に妹が首を縦に振る事などできる訳がない。

「2人分稼がないといけないんだよね？ それなら私も働く！」

「ダメ。針月はまだ働けないでしょ」

姉と妹は一歳の差があった。姉が中学を卒業したばかりで、つまり妹はまだ中学生。この国では法的に中学生は働く事ができない。……無論、闇に潜ればいくらでも働き口はあるのだが。

「なら姉さんだけで行ってよ……私は大丈夫だから」

「ダメ！」

姉は先ほどよりも大きな拒絶で妹の提案を拒んだ。二人いる娘の一人が家を出れば——もう一人により危害が加わる事は明確だったから。

「行く時は二人だよ。私達は家族だから」

姉妹は夜も更け、外敵が寝静まる事を見計らってから外の世界に飛び出した。

姉の適応力は凄まじいものだった。夜の街という権謀渦巻く世界でありながらも彼女は確固たる地位を築いた。外に飛び出して1年も経たない間に安定した収入を築いた。かつて中学生だった妹は、中学を卒業すると同時に自らも働こうとするが姉に止められ、かつて姉が合格した地域の最上位校に、同じく奨学金付で通う事になった。いつしか妹にはある想いが宿るようになっていた。

「(姉さんのおかげで私は今生活できている。たくさん勉強して、いいところに就職して、今度は私が姉さんを支えるんだ!)」

妹は姉を支えるために、より勉強に勤しむようになった。

そして姉が働く夜の街は、用役の階級サービスが高くなるほどに嬢に対して高い教養も求められるようになる。姉の仕事のために、そして高校は行けなくても大学には通う事になるかもしれないという事から妹は姉に対して勉強を教えるようになっていた。

家を出た当時、まだ権利能力者ではなかった妹は父の姓をそのまま背負い伏見針月と名乗り、姉はより身元がバレないために姓を母のものに変え——清水名夜竹と名乗るようになった。

「今日は満月か…… 名夜竹君、君と出会った時と同じ月だ」

杖をつき、衰えた足だけで自らの身体を支えられないほどに高齢ではあるが未だに四宮財閥の頂点トップを張る四宮雁庵は、先に月に旅立ってしまった想い人に対して想いを馳せていた。

「四宮…… 本家からですか?」

「ああ。今まではこんな事なかったんだけど……」

そこは伏見のオフィス。早坂の助けを得て無事に「光夜」に戻る事ができた光夜は、夜も明けてかぐやの待つ四宮家別邸に帰ろうとしていた矢先、電報を受け取った。差出人は四宮雁庵。必然的に光夜の顔も強張る。

一瞬で早坂セラピーの効果は切れた。

「……………罨、か？」

形式的には四宮の人間ではなく外部の「伏見」の人間としての体裁を保った招待であるが——向かった先でも客人としての扱いをされるかは分からない。

「(騙し討ちという事なら……………既に前例がある……………っ！)」

「伏見光夜」という皮を既に破ってしまった光夜は、感情が素直に表に出てきてしまい拳を強く握りしめてしまった。爪が掌に食い込み血を滲むほどに強く。

光夜にとつて四宮雁庵とは——父の仇の象徴そのものだ。

「(敵の本丸に近づける絶好の機会だが……………流石に危険すぎる。まだ力の差が大きすぎる。今、四宮を敵に回す事はできない)」

今回は見送るべきか、光夜がそう結論づけようとしていた時だった。

「光夜様。先ほど四宮家別邸に確認をとったところ、かぐや様にも本邸に来るようにと連絡が来ていたみたいで……………」

「……………！」

光夜は本家でのかぐやの扱いを知っている。自分が両親と共に本家を訪れるより前の方が酷かったらしいがそれでも上の兄との扱いの差は歴然だという。

「(今。かぐ姉を守れるとしたら自分しかない……………！)」

何のために四宮から離れて力を付けようと思ったのか、自分の原点に立ち返り自然と気が引き締まる。先ほどまでの考えは完全に打ち捨てられていた。

「早坂、京都に向かう。準備を始めてくれ」

「承知しました」

光夜の瞳から、既に怯えは消えていた。

「ねえ早坂！…どこにいるのよ早坂あ!!」

光夜が覚悟を固めたその頃、かぐやは逆に動揺していた。

「(光夜と常盤の争いは終わったみたいね。光夜は明日にも帰ってきて

てくれるでしょう。……そしてやはり早坂はいない」

光夜も早坂も何も言わないが光夜が帰ってくる前日に決まって早坂がいなくなれば——嫌でも悪い想像をしてしまう。

「違うわよね？　早坂、光夜？　ただの偶然よね？　私に隠れて二人でいるなんて……ないわよね？」

かぐやは、この前してしまった悪い想像を理性で必死に抑え込む。二人が自分を裏切るはずがないという事を頼りに。

「はい、そうです。これからかぐや様にもお伝えしようかと思っていましたがこちらにも届いています」

悪い想像をしながらもかぐやは自分の名前を呼ばれた事によって自然とその声の方向に視線を動かす。視線の先には、四宮家の使用人が封筒を片手に抱えながら誰かと電話している姿が。

「あの封筒が私に伝えるもの、なのかしら」

ともすればここであの使用人の電話を待つ事が合理的だと思いきり、かぐやはその場に留まった。この決断が後にかぐやを苦しめるとも知らず。

「はい、分かりました。それでは光夜様にもよろしく申し上げます侍従長」

「……え？」

かぐやにとつて、この後の本邸への呼び出しなど些細に思えるほどの衝撃だった。